

近森遺跡

県営経営体育城基盤整備事業西伊尾地区に係る発掘調査報告書

2008

財団法人 広島県教育事業団

例　言

- 1 本書は、平成17（2005）年度に実施した県営経営体育成基盤整備事業西伊尾地区に係る近森遺跡（広島県世羅郡世羅町大字伊尾字近森）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室が、広島県尾三地域事務所・広島県教育委員会と委託契約を結び実施した。
- 3 発掘調査は、山田繁樹、辻　満久が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・図面の整理は山田、田村直子、馬渡加代子が、写真撮影は山田が中心となって行い、本書の執筆・編集は山田が行った。
- 5 石器の石材は、考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼観察による。
- 6 本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。
S B；竪穴住居跡， S K；土坑， S D；溝， S X；性格不明の遺構， P；柱穴
- 7 土器の断面については、須恵器は黒塗り、そのほかは白抜きである。
- 8 挿図の遺物番号と図版の遺物番号は同一である。
- 9 第1図は国土交通省国土地理院発行の1：25,000の地形図（本郷）を使用した。
- 10 本書に使用した北方位は、第1図以外は「平面直角座標系第Ⅲ座標系北」である。



遺跡見学会（平成17年12月10日）

目 次

I はじめに	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	6
IV 遺構と遺物	8
V まとめ	39

挿図目次

第1図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)	3
第2図 周辺地形図 (1 : 2,000)	7
第3図 A地区地形図 (1 : 200, 土層断面図は1 : 60)	9
第4図 B地区遺構配置図 (1 : 150)	折込
第5図 S B 1~4 実測図 (1 : 60)	折込
第6図 S B 5 実測図 (1 : 60)	13
第7図 S K 4~7 実測図 (1 : 30)	15
第8図 S K 8~11 実測図 (1 : 30)	17
第9図 S K 12~15 実測図 (1 : 30)	19
第10図 S K 16~18 実測図 (1 : 30)	21
第11図 S K 19~22 実測図 (1 : 30)	23
第12図 S K 23~26 実測図 (1 : 30, 26は1 : 20)	25
第13図 S D 1・2 実測図 (1 : 60)	26
第14図 S X 1 実測図 (1 : 30)	27
第15図 S X 2 実測図 (1 : 30)	28
第16図 S B 1 出土土器実測図 (1 : 3, 9は1 : 6)	29
第17図 S B 2・4・5 出土土器実測図 (1 : 3)	30
第18図 S K 12~14・16~18 出土土器実測図 (1 : 3)	31
第19図 S K 18・21・22・25, S D 1 出土土器実測図 (1 : 3)	32
第20図 S D 1・2, S X 1・2, 柱穴内出土土器実測図 (1 : 3)	33
第21図 S K 26, 調査区内出土土器実測図 (1 : 3)	34

第22図 調査区内出土土器, SB 1出土石器実測図 (1 : 3, 96は1 : 6)	35
第23図 SB 1, SD 1, 調査区内出土石器, 土製品実測図 (1 : 3, 108~111は1 : 2)	36

表 目 次

第1表 出土遺物観察表 1	36
第2表 出土遺物観察表 2	37
第3表 出土遺物観察表 3	38
第4表 出土遺物観察表 4	38
第5表 山陰型甌形土器出土遺跡一覧表	41

図版目次

図版 1 - a 遠景 北東から	図版 8 - a SB 5 土層断面 北東から
b A地区調査前 西から	b SK 4 完掘状況 北東から
c B地区調査前 南西から	c SK 5 完掘状況 北東から
図版 2 - a A地区完掘状況 西から	図版 9 - a SK 6・7 完掘状況 東から
b A地区完掘状況 北東から	b SK 8 完掘状況 東から
c №2 トレンチ土層 東から	c SK 10 完掘状況 北から
図版 3 - a №3 トレンチ土層 東から	図版 10 - a SK 11 完掘状況 北西から
b №4 トレンチ土層 西から	b SK 12 土層断面 南東から
c №5 トレンチ土層 東から	c SK 12 完掘状況 南西から
図版 4 - a B地区完掘状況 (東半) 西から	図版 11 - a SK 13・SD 1 土層断面 南東から
b B地区完掘状況 (西半) 東から	b SK 13・SD 1 完掘状況 南西から
c 調査区全景 空中写真 西から	c SK 14 遺物出土状況 北から
図版 5 - a SB 1 土層断面 西から	図版 12 - a SK 14 完掘状況 西から
b A-A' 土層断面 西から	b SK 15 完掘状況 北から
c B-B' 土層断面 西から	c SK 16 遺物出土状況 北西から
図版 6 - a SB 1~4 完掘状況 北東から	図版 13 - a SK 11~16 完掘状況 西から
b SB 1~4 完掘状況 南東から	b SK 17 遺物出土状況 北から
c SB 1 遺物出土状況 東から	c SK 17 完掘状況 北から
図版 7 - a SB 1 遺物出土状況 南西から	図版 14 - a SK 18 土層断面 東から
b 遺物 (1・3) 出土状況 北から	b SK 18 遺物出土状況 北から
c 砥石 (102) 出土状況 北から	c SK 18 完掘状況 東から
d SK 1 土層 北から	

- 図版15-a SK19~21土層断面 東から
b SK19・20完掘状況 北から
c SK21遺物出土状況 南東から
- 図版16-a SK21完掘状況 北西から
b SK22完掘状況 南西から
c SK22・23土層断面 北から
- 図版17-a SK22・23完掘状況 北西から
b SK24土層断面 北東から
c SK24完掘状況 南東から
- 図版18-a SK19~24完掘状況 南東から
b SK25土層断面 南西から
c SK25完掘状況・SK26遺物
出土状況 北東から
- 図版19-a P1遺物出土状況 北東から
b P2遺物出土状況 南西から
c SD1・2完掘状況 北西から
d SX2土層断面 南西から
- 図版20 SB1出土土器 I
- 図版21 SB1出土土器 II
- 図版22 SB2・4・5出土土器
- 図版23 SB5, SK12・14・16出土土器
- 図版24 SK16~18・21・22出土土器
- 図版25 SK25, SX1・2, SD1, P1・2
出土土器
- 図版26 SK26, 調査区内出土土器
- 図版27 調査区内出土土器
- 図版28 SB1, SD1, 調査区内出土石器・
土製品

I はじめに

近森遺跡の発掘調査は県営経営体育成基盤整備事業に係るものである。

経営体育成基盤整備事業は将来の農業生産を担う効率的かつ安定的な経営体を育成し、これらの経営体が農業生産の相当部分を担う農業構造を確立するため、地域農業の展開方向及び生産基盤整備の状況等を勘案し、必要となる生産基盤及び生活環境の整備を経営体の育成を図りながら一体的に実施することにより、高生産性農業の展開が見込まれる大規模水田地域の整備を着実に推進するとともに、優良農地を将来にわたり適切に維持・保全することで、食料自給率の向上、農業の多面的機能の十分な發揮に資することを目的としている。

本事業に先立って、広島県尾三地域事務所長（農林局広島中部台地総合開発事業所・以下「尾三事務所」という。）は、平成16年9月21日付けで、甲山町（現世羅町・平成16年10月1日に甲山町・世羅町・世羅西町の三町が合併し新しく「世羅町」となる。）教育委員会（以下「町教委」という。）に協議書を提出し、町教委から、計画地内に近森遺跡が存在する旨の試掘結果を受けた。その後、尾三事務所・県教育委員会（以下「県教委」という。）・町教委と協議を重ねた結果、近森遺跡の一部（20,60m²の内970m²）について現状保存が困難なため、尾三事務所は平成16年12月28日付けで「埋蔵文化財包含地における土木工事等の通知」を県教委に届け、平成17年1月13日付けで県教委から事前に発掘調査するよう通知を受けた。

尾三事務所は、平成17年2月9日付けで財団法人広島県教育事業団（以下「教育事業団」という。）に発掘調査の依頼を行い、同年8月1日付けで、尾三事務所と教育事業団は発掘調査業務の委託契約を締結し、発掘調査は同年10月24日から12月26日まで実施した。調査期間中の12月10日には、町教委と共に遺跡の現地見学会を開催し135名の参加者があった。

本報告書は、以上のような経過のもとに行われた近森遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであり、地域の歴史の一端を知る一助となれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては、尾三地域事務所、世羅町教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

II 位置と環境

近森遺跡は、世羅郡世羅町（旧甲山町）大字伊尾に所在する。

旧甲山町は平成16年10月1日に、世羅郡内の世羅西町・世羅町と合併し世羅町となった。

世羅町は広島県東部の中央部に位置し、地形的には、標高300～600mのいわゆる世羅台地の東部を占めている。町内には瀬戸内海に注ぐ芦田川水系と日本海に注ぐ江の川水系の馬洗川の支流である美波羅川上流域にあたり町内各所に分水嶺が存在している。芦田川の上流域である当町域は遺跡の密集地として知られており、特に芦田川が東西に貫流し南北に広がる微高地や丘陵上にはこれまでに多くの遺跡が確認・調査されており、分布の中心となっている。

本遺跡が所在する伊尾地区周辺は、さきの中心地から芦田川下流の峡谷地帯にかかる位置にあり、北流する芦田川が大きく湾曲して東南流する地域の南側に広がる水田を望む微高地上に立地している。遺跡のすぐ南側には三川ダムが建設されている。

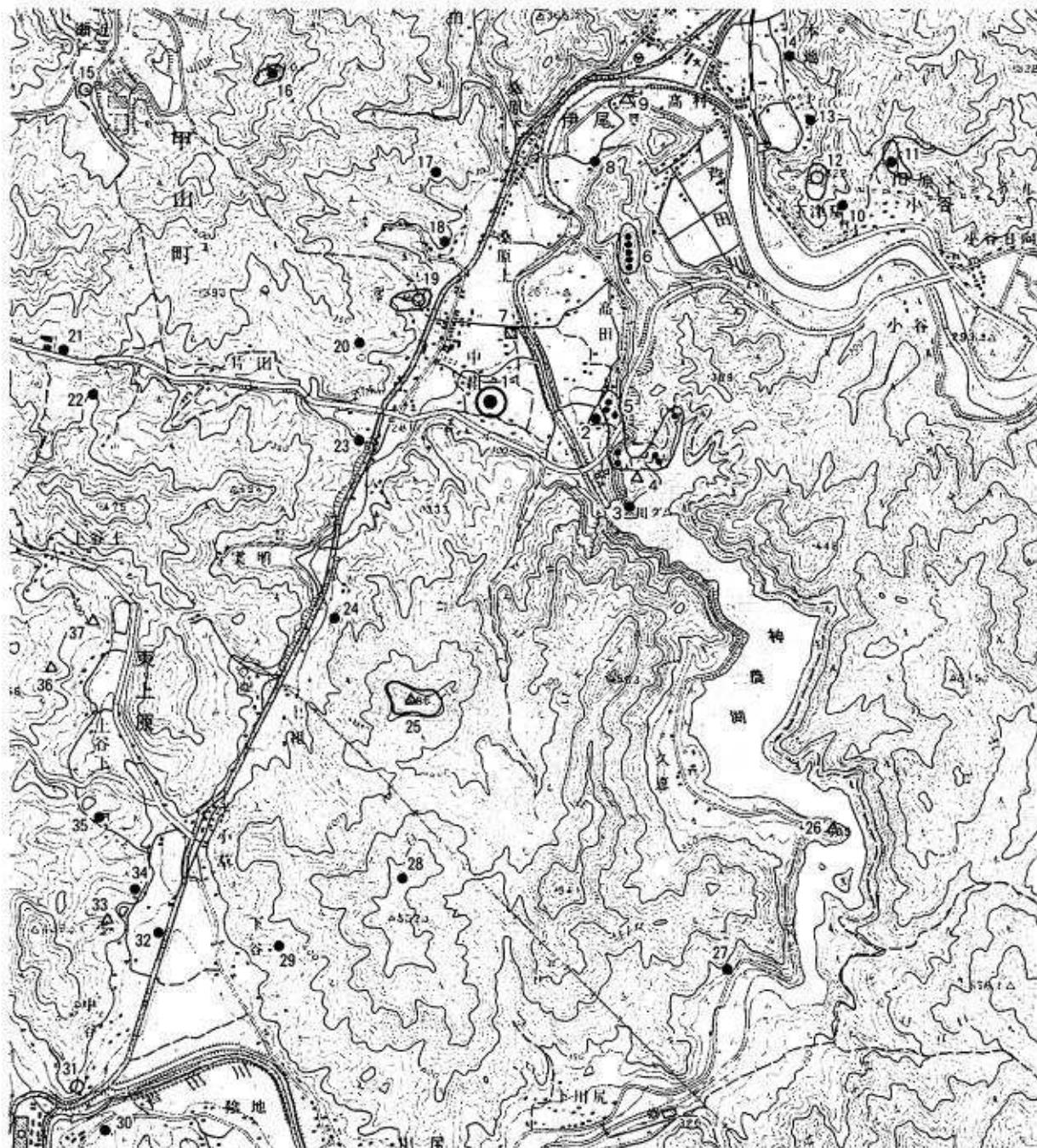
伊尾周辺の丘陵地では、これまでにいくつかの古墳が確認・発掘調査が実施されており、遺物の散布地もみられる。

ここでは報告されている遺跡を中心に近森遺跡周辺の歴史的環境をみてみたい。

旧石器時代の遺物は、当町内では未確認であるが世羅町と南西に接している三原市久井町筋原垣内遺跡から貞岩製のナイフ形石器1点と貞岩製の剥片2点、チャート製の剥片3点が出土している。^{あぞうはら}
^{かきうち}
⁽¹⁾

縄文時代に入ると僅かではあるが遺跡が確認されている。頓迫遺跡群（川尻）⁽²⁾は、中期～晩期の遺跡で、3地点からなり土器片、安山岩製の石鏃や打製石斧などの石器類が採取されている。2号遺跡が中期後半、1・3号遺跡が後期～晩期とされている。高山1号遺跡では、包含層から晩期後半の精製の壺・浅鉢、粗製突帶文深鉢などの土器が一括で出土しており、縄文時代から弥生時代の移行を考える上で良好な資料を提供している。^{とんざこ}
⁽³⁾

弥生時代の遺跡は旧甲山町域で約40か所が遺物包含地として確認されている。時期的には後期に属するものが大半を占めている。前期の遺跡は、高山1号遺跡と乙川北遺跡（小世良）⁽⁴⁾の2遺跡があり、高山1号遺跡は遺物包含層から甕の口縁部が出土している。乙川北遺跡は前期後半の土坑から甕が出土しており、他に中期後半から後期前半の竪穴住居跡11軒、溝3条、貯蔵穴2基が、また、後期後半から古墳時代初頭の30基からなる墳墓群、木棺墓を埋葬施設とした円形周溝墓など遺構・遺物が確認されている。金井原遺跡（川尻）⁽⁵⁾の最大5軒の住居が重複する住居跡は径が7～9.5mと同心円状に拡張されており、土器以外に土器片紡錘車（26点）、石鏃、石包丁、柱状片刃石斧が出土している。本遺跡と芦田川を挟んで東側に位置し、西側へ緩やかな傾斜面に立地する龍王山2号遺跡⁽⁶⁾は後期～古墳時代初頭期の集落跡で、竪穴住居跡1軒以外に土壙墓7基、貯蔵穴4基が確認されている。土器以外に分銅形土製品、山陰型甑形土器が出土している。土居丸遺跡（西神崎）⁽⁷⁾は、後期～古墳時代前期を中心とした集落跡で竪穴住居跡14軒、土坑18基、溝28条など跡14軒、土坑18基、溝28条などを確認しており、この地域の中心的な集落であったと考



- 1 近森遺跡 2 龍王山2号遺跡 3 龍王山1号遺跡 4 山口城跡 5 龍王山南古墳群 6 龍王山古墳群
 7 大通土居屋敷跡 8 龍王山第6号古墳 9 尾首城跡 10 下津屋遺跡 11 権現古墳群 12 下津屋古墓群
 13 広岡山遺跡 14 的場古墳 15 濱近古墓 16 二本松古墳群 17 庄田古墳 18 石堂山遺跡 19 石堂山古墓群
 20 石堂山古墳 21 長土路第7号古墳 22 大谷山西古墳 23 大谷山第1号古墳 24 草田古墳 25 鶴が丸城跡
 26 平家が城跡 27 比恵谷山古墳 28 城ヶ平古墳 29 風呂ヶ谷遺跡 30 金井原遺跡 31 大柳古墓 32 大原遺跡
 33 宇根城跡 34 総田遺跡 35 霜高下遺跡 36 宮地城跡 37 久代城跡

●は集落遺跡・古墳 ○は古墓 △は山城跡 □は中世遺跡を表す。

第1図 周辺主要遺跡分布図 (1 : 25,000)

えられている。住居跡のうち径6.6mの竪穴住居内の柱穴から山陰型甑形土器が出土している。

古墳時代の遺跡は古墳がほとんどで、県北の三次市域に次ぐ密集地として知られている。現在まで世羅町内で856基の古墳が確認されている。⁽⁹⁾ 分布状況をみると旧甲山町域で総数の約20%，旧世羅西町域で約15%，旧世羅町が約65%を占めており、特に本郷地区を中心とした芦田川を挟んだ南北の丘陵上周辺に集中している。古墳のほとんどは横穴式石室を埋葬施設とする後期の古墳である。前期古墳はまだ確認されてはいないが、美波羅川上流域にあたる津口で前方後円墳である正連寺古墳（全長約27m），帆立貝形古墳である向原第5号古墳（全長約24m）が確認され、三次市地域との関係が注目される。また、県史跡である康徳寺古墳（寺町）⁽¹⁰⁾ は、羨道部が搅乱を受けていたが、玄室内の長さ5.9m，奥壁の高さ3.2mと県内でも梅木平古墳（三原市本郷町）に次ぐ規模の横穴式石室である。出土遺物から6世紀末に築造されたと考えられている。

伊尾地区周辺では、旧甲山町域の約38%にあたる古墳が確認されている。この内、本遺跡から芦田川を挟んで北東の丘陵上に立地する龍王山古墳群は、箱式石棺と横穴式石室の2群に分けられ、龍王山第2号古墳⁽¹¹⁾からは花崗岩を用いた内法で長さ1.7m，幅0.4m，深さ0.4mの箱式石棺内から、石枕上の頭部に酸化鉄の赤色顔料が残る壮年期女性の人骨1体とガラス小玉33個が出土している。横穴式石室を埋葬施設とする龍王山南第4・5号古墳⁽¹²⁾は三河ダムの建設時に発掘調査が行われ、6世紀末から7世紀にかけて築造されてことが確認されている。

古代以降になると遺跡は明らかではないが、伊尾のほぼ中央に桑原という地名があるところから、『和名抄』所載の四郷の内、桑原郷であったと考えられる。中世になると高野山の管轄の元に大田庄が経営され伊尾は桑原方の一地域であった。この荘園は、平安時代後期に当地域の権力者であった橘兼隆が桑原郷を、橘光家らが大田郷を開発・支配していたが、平重衡に寄進したのが始まりで、平重衡は1166年、大田庄を後白河法皇に寄進し、後白河院を本家とする大田庄が成立了。後白河院は1186年大田庄を高野山に寄進し、高野山は今高野山を建立し、預所・雜掌を派遣し大田庄経営の拠点とした。

参考文献

角川書店「角川日本地名大辞典 34広島県」 1987年

中国新聞社「広島県大百科事典上・下巻」 1982年

平凡社「日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名」 1982年

甲山町「甲山町史資料編Ⅰ」 2003年

註

(1) 久井町教育委員会「久井町文化財報告」 1995年

(2) 小都隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」「芸備」第5集 芸備友の会 1977年

(3) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高山1・2号遺跡」 1992年

(4) 甲山町教育委員会「乙川北遺跡 現地説明会資料」 2000年

(5) 報告書が未刊であるため詳細は不明であるが、現地説明会資料では「東濠」となっている。しかし、調査区が道路

- 幅によって制約を受けており、全体像が復元しにくいこと、規模が小さいことから、ここでは「溝」とした。
- (6) 財団法人広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室「金井原遺跡 遺跡見学会資料」 2006年
- (7) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「龍王山2号遺跡」 1997年
- (8) 世羅町教育委員会「土居丸遺跡I」 1993年
世羅町教育委員会「土居丸遺跡II・青山大迫遺跡」 1996年
- (9) 広島県教育委員会「広島県遺跡地図」V 1998年
- (10) 世羅町教育委員会「康徳寺古墳」 1997年
- (11) 鈴木誠・池田次郎「備後國龍王山古墳出土人骨」「人類学報」第5輯 広島医科大学解剖学教室 1951年
池田次郎「三ツ城古墳出土人骨、並びに広島県下出土の古墳人骨について」「三ツ城古墳」広島県文化財調査報告
第1輯 広島県教育委員会 1954年
- (12) 龍王山古墳群発掘調査団「龍王山古墳群 第9号古墳・第10号古墳の発掘調査報告」 1971年
- 註(9)で遺跡名称の変更と統一がなされており、註(11)の龍王山古墳は龍王山第2号古墳、龍王山第9・10号古墳は、龍王山南第4・5号古墳と変更されている。

III 調査の概要

近森遺跡は、三川ダム堰堤の北西方向にあり、背後の標高486mの山頂から北へ延びる低丘陵上の先端部付近に立地している。遺跡から北側に芦田川の両岸に広がる水田や集落地が見渡せる。調査区内の標高は約279mで現状は水田となっていた。試掘調査で確認した遺跡範囲（2,060m²）の内、現状保存が困難な970m²が発掘調査の対象となった。

発掘調査区は2か所にわかれしており、西側をA地区・東側をB地区として調査を進めた。両調査区共に耕作土と床土、客土は重機を使用して除去作業を行った後に掘り下げ作業行った。

A地区からは明確な遺構の存在はないものの、調査区中央付近から北に向かって黒褐色土の落ち込みが確認できた。黒褐色土の深さを確認するため、幅約1mのトレンチを5本設定し掘り下げを行った結果、小さな谷状の自然地形の傾斜であることがわかった。検出面上部から厚さ20～40cmは遺物を包含しており、その内容は、弥生土器、古墳時代の土師器、中世の土師質土器や弥生時代の磨製石斧が出土している。このことから、調査区の背後にあたる南東側に、これらの時代の遺構が存在している可能性が強い。また、B地区が立地する北東に延びる低丘陵の西側の谷頭に相当すると思われ、近森遺跡の西限を示していると思われる。

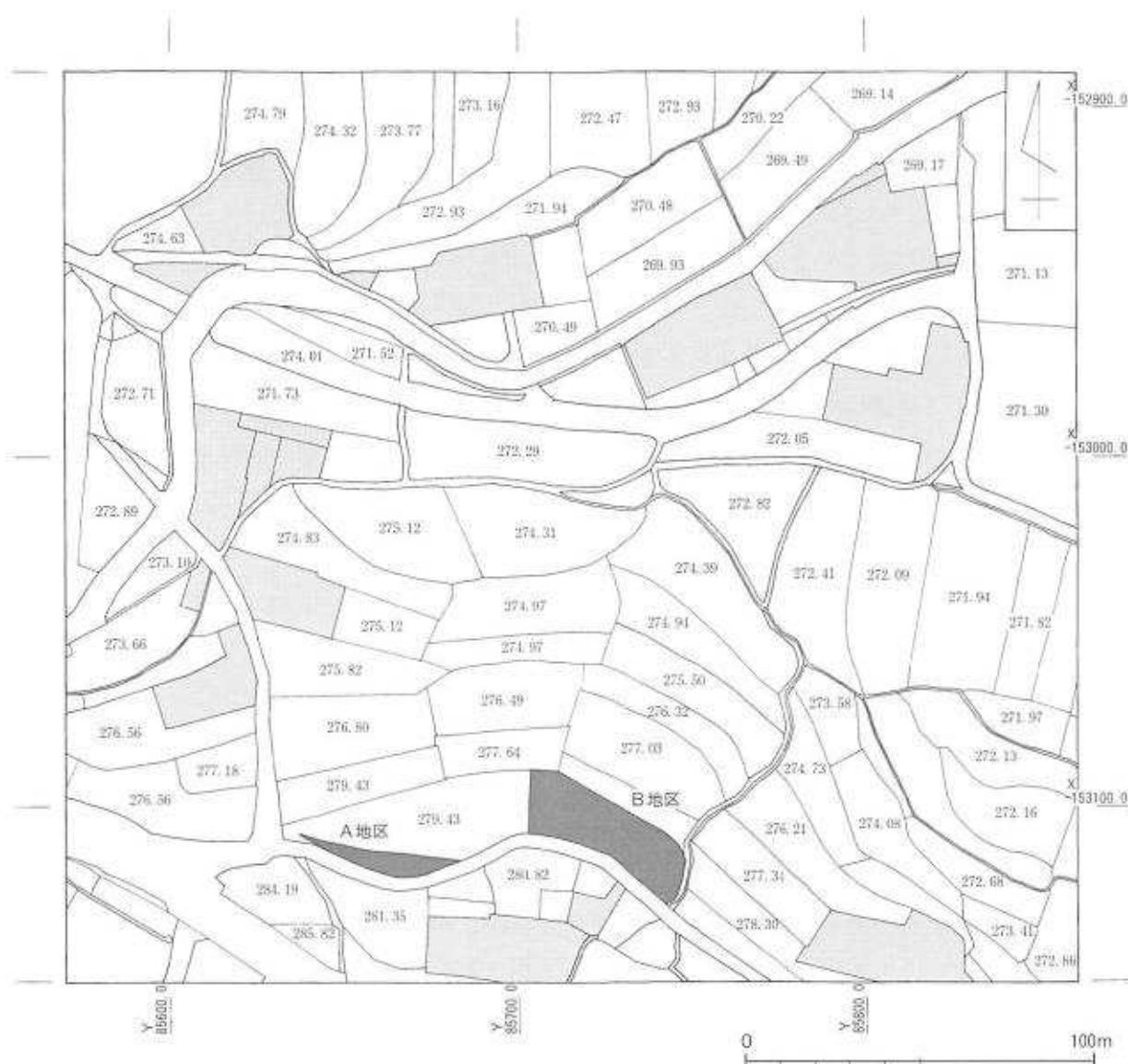
B地区では、調査区の全面から遺構が確認できた。主な遺構は竪穴住居跡5軒、土坑26基、柱穴多数、溝2条、性格不明遺構2基である。竪穴住居跡は、北東隅部に位置し、土坑は北東部・中央部・南東部の3か所にわかれている。

竪穴住居跡は当初、試掘時の見解で近世の落ち込みと判断されていたことと、覆土である灰褐色土が單一で範囲が広いため、南北・東西に各2本のトレンチを設定し床と思われる箇所まで掘り下げを行った。その結果、4軒の竪穴住居跡を確認した。SB1・2が径約9mの規模で重複し、それぞれ拡張を繰り返している。更に下層からSB3・4を確認した。SB1の床面から山陰型瓶形土器が2個体分出土し、ひとつはほぼ完形品である。土器以外に、土製勾玉、砥石、土製紡錘車がある。同一場所に建て替えを行い、住居跡も大規模であることから集落の中心的な建物であった可能性が高い。SB5は、水田の造成時に削平され壁と床の一部のみ残っている。土坑は形状が方形のものが大部分を占めているが、約半数から土器が廃棄された状態で出土していることから、墓壙の可能性は低いと思われる。土坑と住居跡は一部で重複関係がみられるが、住居跡も含めて弥生時代終末～古墳時代初頭を中心とした時期と思われる。唯一、SK26は15世紀代の土師質土器皿を5枚置き、更に土鍋をうつ伏せに被せた状態で検出し、性格としては祭祀的な要素が強いと思われる。溝からは弥生時代中期後半の土器と性格不明の石製品が1点出土している。その他、柱穴跡は古墳時代と中近世頃のものも含まれているが、柱の並びが明確でない。

このように、近森遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構を中心とした集落跡であったことが確認できた。平成8（1996）年に発掘調査が行われた龍王山2号遺跡は芦田川を挟んで対峙する位置にあり、弥生時代後期の土器と古墳時代前期の竪穴住居跡や土坑が確認されている。近森遺跡と龍王山2号遺跡は芦田川を望む小高い場所に営まれているという共通性があることから、

芦田川流域にみられる同様な立地条件の場所には同時期の集落が存在していた可能性は高い。

出土した土器は山陰型甑形土器や山陰系の土師器がほとんどであるが、住居跡や土坑から在地系の土器も出土している。このことから、この地域が弥生時代終末～古墳時代初頭頃に山陰地方の強い影響を受けていたと考えられる。



第2図 周辺地形図 (1:2,000)

IV 遺構と遺物

A地区（第2・3図、図版1b, 2・3）

A地区は東西約44m、最大幅約6mで三日月状の調査区である。調査区内の最高所と低位の比高差は約1mで、調査区内中央付近に279mの等高線が東西方向に伸びている。

耕作土と床土を除去した時点で、旧地表面の確認ができるが明確な遺構は存在していなかった。

調査区の東西隅付近の検出面は淡黄灰色砂質土がベースとなっており、中央付近は黒褐色粘質土が堆積していた。この層は遺物の小片が多量にみられることから、この層の厚さとベースとなる層との関係をつかむため5本のトレンチを設定し、掘り下げを行った。遺物包含層は第1層で厚さが10~40cmで、No 2・3 トレンチ部分が厚い。各トレンチの底の傾斜から、谷地形と判断し、No 3 トレンチ部が最も深く北に向かって下がっているため、芦田川に向かって延びる小谷の谷頭付近と考えられる。

また、B地区の地形も南から北・北東方向に下がりつつ、等高線がA地区方向に向かっていることからA地区で確認した小谷は、近森遺跡の北西側の境界或いは範囲を示していると思われる。

調査区内及びトレンチ内の包含層から出土した遺物は、弥生時代中期～中世・近世のものが含まれていたが、小片のものや磨耗が激しいものが多く図化し得たものは少ない。

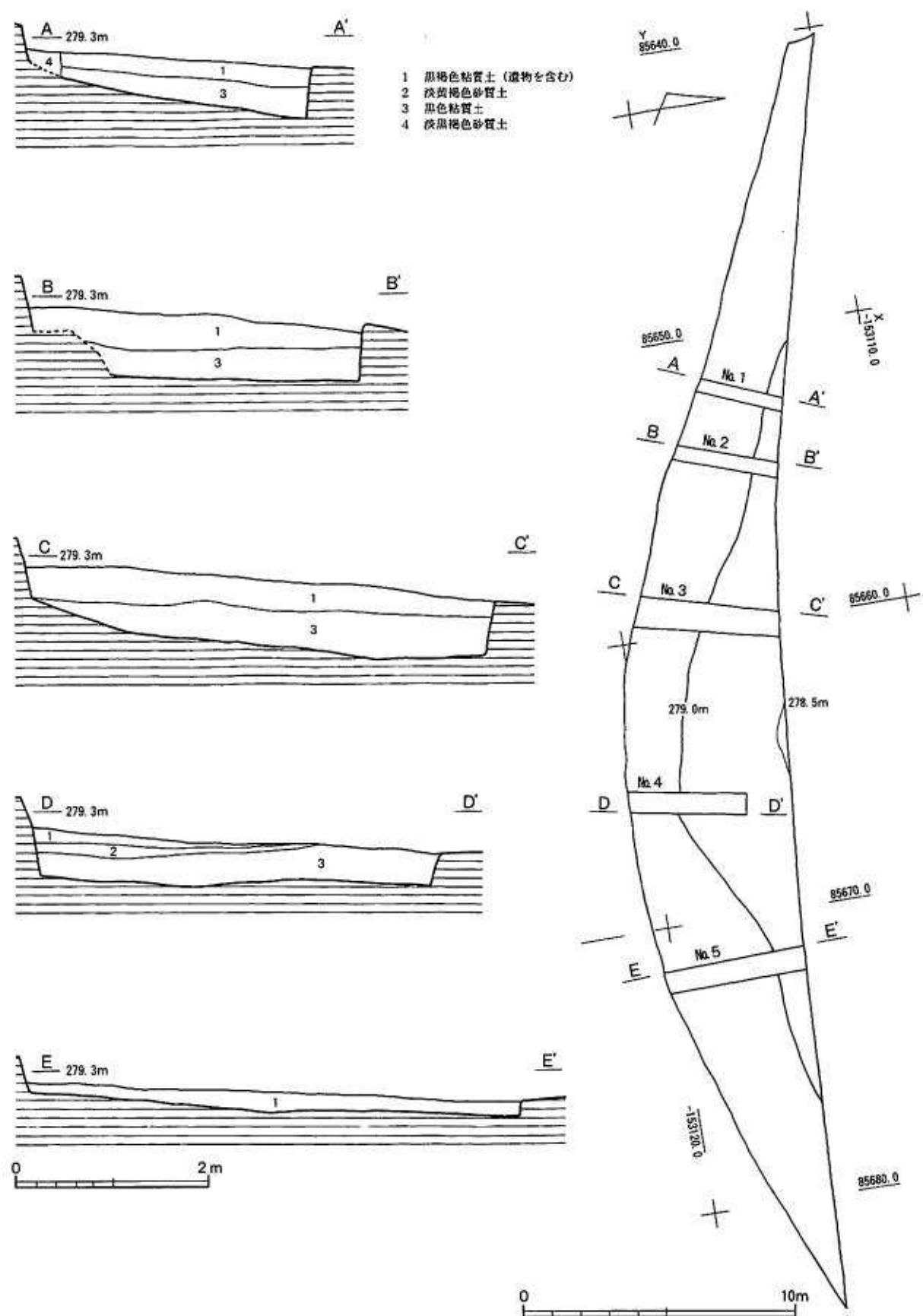
出土遺物（第21~23図、図版26~28）

72~77は弥生土器である。72~74は長頸壺の口縁部周辺で、72・73は同一個体である。74は外面に赤色顔料が残る。77は短頸壺に貼り付けによる把手がついている。これらの土器は中期後半の範疇に収まると思われる。この内、75の甕は形態的に古くなると思われるものの、遺存状況が良くないので明確ではないが、口縁端部に刻み目がない。砂粒が3mm前後と粗い。色調も灰褐色を呈していることなどから、縄文晩期にまで遡る可能性もある。その他、78~90までが後期～古墳時代初頭、92~95までが古代・中世の土器である。80・81、86・87が山陰系の土器で80・81が二重口縁の甕、86・87は鼓形器台の脚台部である。78・79が甕、82・83が底部。84・85は高杯で内外面に赤色顔料が塗布されている。88がミニチュア土器、89・90は脚裾部である。概して山陰系の土器と在地系の土器の出土点数の比率は山陰系と思われるものが多い。92は須恵器杯身、93・94は土師質土器皿、95は土師質土器鍋である。石器類としては106の磨製石斧、109の石鏃が出土している。

B地区（第2・4図、図版1c, 4a・b）

B地区は東西約46m、南北約13~18mの細長い調査区となっている。調査内の標高は278~279mで、南西側に約10m幅の平坦面があり278.8mあたりから北に向かって緩やかに下る斜面となっている。遺構はこの平坦面からの傾斜変換点から北側に、調査区北西側、中央部、東側の3か所にほぼ集中して分布・立地している。

調査区の北西部で確認した遺構は、住居跡4軒、土坑10基で、土坑のうちSK 1~7は住居跡



第3図 A地区地形図 (1 : 200, 土層断面図は1 : 60)

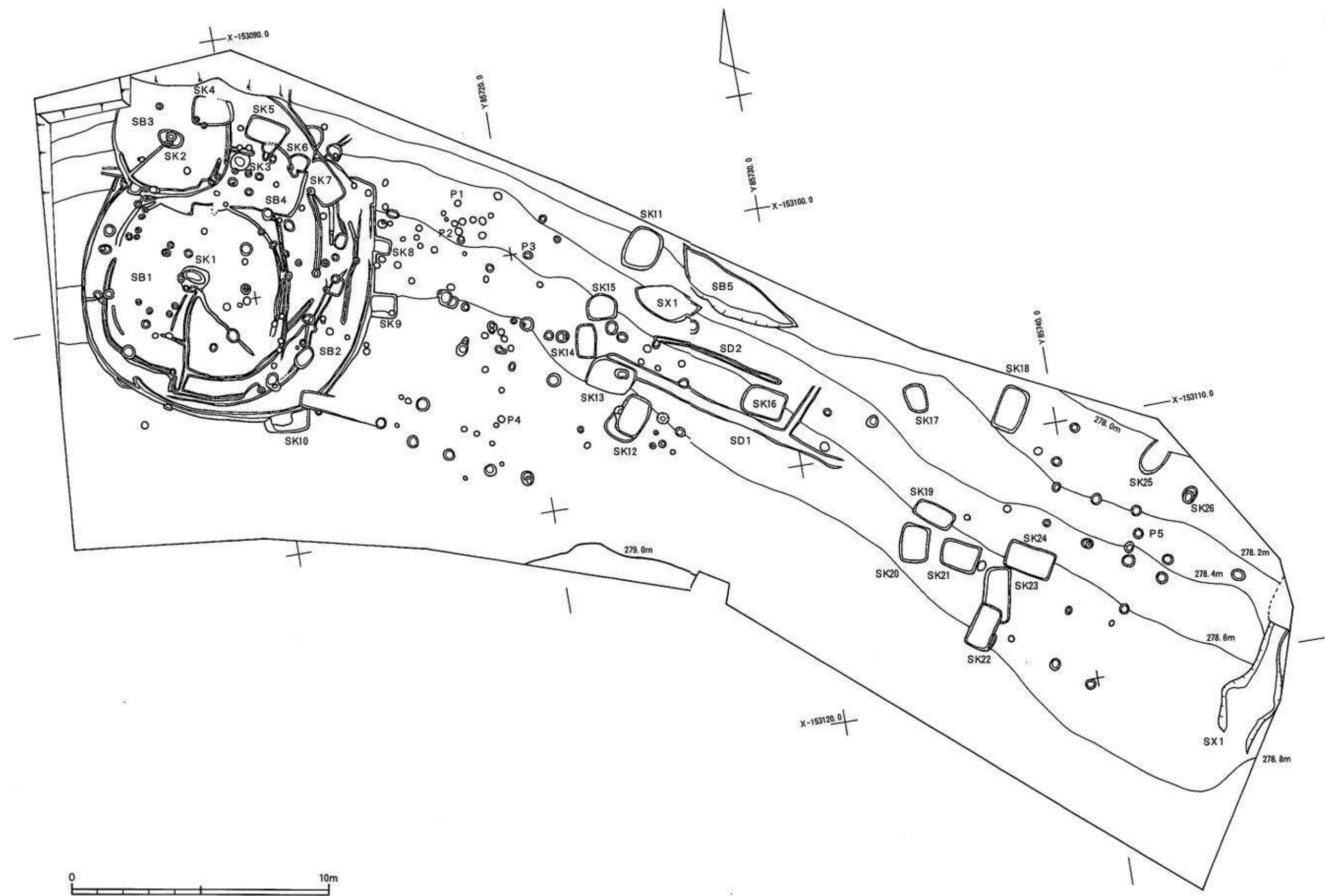
の床面検出時に確認している。中央付近では住居跡1軒、土坑6基、東西方向の溝2条、性格不明の落ち込み1基を確認した。溝と土坑の一部は重複関係がみられるが、土坑群には重複関係はない。溝からは弥生時代中期の土器と石器が出土している。土坑群のうち遺物が出土したものは、SK12・14・16である。北西部住居跡と中央部の遺構群との間に、対応関係が不明瞭な柱穴と思われる小穴を多数確認した。全てではないが、遺物が出土した柱穴跡もある。東側では、土坑10基、性格不明の落ち込み1基と、柱穴跡を確認した。遺物が出土した土坑はSK18・21・26で、土坑のうち2基は重複関係がみられる。

a. 住居跡

S B 1 (第5図、図版5~7)

調査区の北西部に位置している。規模が幅11m前後と大きいため、東西2本、南北に2本のトレンチを設定し遺構の状況の確認を進め、遺物の出土と床面・柱穴を確認し住居跡と判断した。掘り下げにあたっては、覆土のほとんどが同系色であったため、範囲内を12のグリッドを設定して進めていったが、面として各住居を把握することができず、土層によって新旧関係を確認するにいたった。その結果、S B 1~4の住居跡及びSK 1~7の土坑を確認した。

S B 1はS B 2~4と重複関係にあり、新旧関係はS B 1→S B 2→S B 3→S B 4でS B 1が最も新しくS B 4が最も古い。住居跡の規模は最大直径が東西約9.5mの円形で、南側から北側半分にかけて東西両側に幅約1m程度の平坦面がみられる。南側の検出面から平坦面までの深さは約40cm、平坦面と内側床面との最大高低差は26cmあり、西側は北に向かって徐々に床面と同じ高さとなる。東側平坦面は土層C-C'中のP-4部分で住居跡の東側壁を確認している。掘り下げの段階で、平坦面の内側壁の立ち上がりは確認できなかったが、土層で確認した壁から内側へ2本目の溝が平坦面西側の溝と対応していることから、この溝までの幅1.8m程度の平坦面が存在していた可能性がある。また、土層A-A'のS B 4覆土上層の第10層の形状をみると、10層を削平して北側の平坦面削りだした痕跡と思われる。平坦面については、ベッド状遺構とも呼称されているものと同様な形態で、徐々に消失している部分もあるが、性格的には同じと思われる。平坦面の内側の規模は約7mで、壁際に幅20cm程度の溝が巡っている。この溝の内側にはさらに溝が1条、東側の壁溝より内側に2条巡っており、S B 1が北東方向に、1回ないし2回拡張されたことを示していると考えられる。床面はほぼ平坦で、中央付近には上端が幅1.0m×1.1m、中端が0.5m×0.8mのやや楕円形を呈する深さ0.54mのSK 1がある。SK 1周辺は被熱を受けた様子はないが、土坑内からは、炭化物を含んだ暗灰色の粘土が大量に含まれていることと、土坑周辺の床面上に、炭化物が散在している状況から、炉跡であると考えられる。SK 1から幅10~18cmの排水溝と思われる溝が南側の壁溝に向かって、延びている。中央の溝は住居壁溝にまで及び、この部分で一段高い平坦面の西側と東側で高低差が10cm程度があるので、住居内への入り口、或いは平坦面に係わる何らかの施設である可能性がある。S B 1の床面上で確認した柱穴の内、一部はS B 2に伴うと思われるものも含まれており明確にしがたいが、S B 1の主柱穴の対応関



第4図 B地区遺構配置図 (1:150)

係は第5図で図示した6個考えられる。柱穴の深さは、いずれも床面から40cm程度である。

遺物は床面上からと壁際の平坦面上から出土している。床面上から、甕(1~3)、高杯杯部(4)、山陰型瓶形土器(8, 9)の土器が、石器としては台石(96)、砥石(99)、石庖丁(108)と土製勾玉(111)が出土している。壁際の平坦面からは、高杯杯部(5)、椀(7)、砥石(101)が出土している。出土状況は、床面に接しているか、若干浮いた状況であった。中でも1~4, 108, 111は住居の北西部で位置的にまとまっており、特に3は、4の上に乗った状態で、2は倒れた状態で出土している。9の山陰型瓶形土器は、縦方向に割れ、南北に据部が対峙するように出土している。南側の半分は土圧によって割れた状況が窺える。8は狭口部周辺の破片で、東側の排水溝を挟んで散在的に出土している。96の台石は2片に割れ、SK1の北側と南側から出土している。台石は96以外に2点ほど、床面北側の東西両側から出土している。7の椀は口縁部を上にして据えたような状態であった。6の手捏土器、103・104の砥石は覆土の中位での出土である。

出土遺物（第16・22・23図、図版20・21・28）

1~3の口縁部は、1が頸部から内傾、2・3は外反している。器面調整は、内外面とも横ナデである。胴部の外面にはハケ目が残っているが、1の肩部は、回転台を利用したカキ目状に横方向にハケ目が、3はヘラ状工具を用いた刺突文がみられる。内面はヘラ削りが施されている。4は低脚高杯で口縁端部外面に凹線状の窪みがみられ、体部内面は板状の工具で器面を斜め方向にナデている。5は高杯杯部で、内面は調整不明、外面にハケ目が残る。6は内面がナデ、口縁部に部分的に黒斑がみられる。7は口縁部を一部欠く。器表面の剥落が激しいが、口縁部は内外面とも横ナデで、外面は部分的に縦方向のハケ目が残る。8は狭口部から把手周辺以下を欠いている。内面は上から下方に向かった丁寧なヘラ削りが行われ、狭口部は削り後に外面にかけて横ナデを行っている。突帯は貼り付け、把手は横方向に差し込んだ後に粘土を貼り付け成形している。体部外面は縦方向のハケ目が丁寧に施されている。部分的に黒斑が残る。9は下部の把手の片方を欠いているがほぼ完形である。狭口部の突帯は貼り付け、把手は横方向、下部の把手は縦方向に差し込んだ後、粘土を貼り付け成形している。狭口部は内外面に横ナデ、体部外面は縦方向のハケ目が残る。広口部外面は横ナデであるが、端部に2条の凹線状の窪みがみられる。内面は狭口部端部から3cm辺りから把手付近まで横方向のヘラ削り、下部も広口部から把手付近まで横方向のヘラ削りが施されている。体部の内面は、横方向のヘラ削りが行われた後に、縦方向のナデが行われている。96の台石は上面が窪み、縦方向の擦痕が繋がることから、割って別々に使用したのではなく、何らかの理由で割れた後、離れた場所で再利用したものと思われる。98・99, 101は小型の砥石である。98は断面が6角形のうち5面と下面の一部を使用している。108は孔が1か所残る石庖丁片で、孔は両側から穿ち、孔から上端に擦痕がみられる。111は土製の勾玉で、手捏による成形である。孔は両側から穿かれている。内部の色調は暗灰色で、外面は黒色であることから意図的に仕上げた可能性もある。

S B 2 (第5図, 図版5, 6 a・b, 19 a・b)

S B 2はS B 1・3・4と重複関係にある住居跡で、新旧関係はS B 1→S B 2→S B 3→S B 4でS B 1に次いで新しい。SK 8~10とも重複関係にあり、S B 2はこれらの土坑を掘り込んでいる。平面形は、北側の形状は不明であるが、東・南側の形状から直径9.5m前後の円形、または南北方向にやや長い楕円形であった可能性がある。土層の堆積状況をみると、土層D-D'の壁溝の立ち上がりから内側へ1.5mの部分の落ち込み、土層A-A'の南部でS B 1の壁付近に幅1mの平坦面の痕跡がみられることから、S B 1と同様な平坦面が存在していた可能性が考えられる。S B 2に伴う主柱穴は、P 1~P 4が土層堆積状況と覆土が同質の暗灰色粘質土であること、柱跡として対応していると考えられるが、他の柱穴は不明瞭である。P 1~P 4は、いずれも長楕円か長方形で東側平坦面からの深さが40cm程度である。

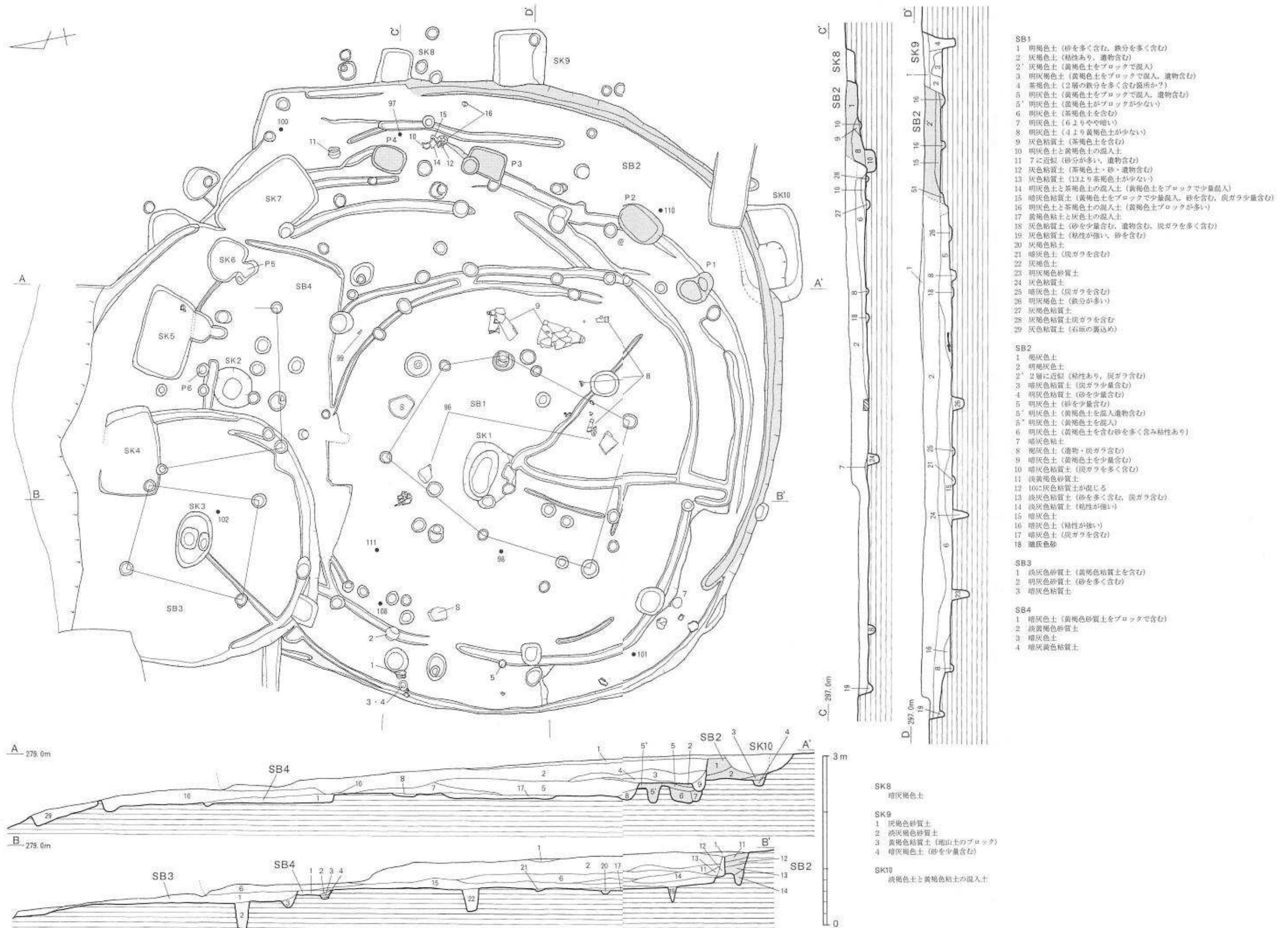
遺物はP 3・P 4周辺の床面上から甕(10・12・13), 高杯杯部(14), 梗(15), 鼓形器台(16), 砥石(97・100), P 2近くで土錐(110)とP 2周辺の覆土中から砥石(105)が、P 4から北側の床面から甕(11)と砥石(100)が出土している。P 3・P 4周辺の遺物は11がP 4の北から、P 3とP 4の間から10・14・15・12・16の順で並んだ状態であったが、完形ではないため使用状況を示すものではないと思われる。

出土遺物 (第17・22・23図, 図版22, 28)

10~13の甕の内、13が胴部下半である。10・11の口縁部は頸部から直立気味に立ち上がっており内外面共に横ナデ、10は頸部内側まで横ナデが及び、横方向のヘラ削りが行われている。11の内面は頸部から胴部最大径付近まで横方向のヘラ磨きが施され、胴部下半はヘラ削りがみられる。12は底部を欠いている。口縁部は外反気味に立ち上がり、内外面共に横ナデ、胴部内面は横方向のヘラ削りであるが、部分的にヘラ磨き状の痕跡がみられる。外面は頸部縦方向、胴部最大径周辺が横方向、これより下は縦方向のハケ目が残っている。肩部より下に2次焼成による煤が付着している。13は内面が縦方向のヘラ削り、外面は板状工具によるナデ、底部の外面はヘラ磨きが行われている。14の杯部内面は横方向のヘラ磨きが部分的に残っている。15は口縁外面に3条の凹線、体部は外面に縦方向、内面に横方向の丁寧なヘラ磨きが施されている。16は上台部で内外面とも横ナデである。97・105は上下2面、100は6面の使用痕がみられる。

S B 3 (第5図, 図版6 a・b)

S B 3はS B 1・2・4, SK 4と重複関係にある住居跡で、新旧関係はS B 1→S B 2→S B 3→S B 4でS B 1・2より古く、S B 4より新しい。平面形は円形と思われ、規模は東西で直径約4.5mである。北側は、調査前の水田より古い時期の水田により削平を受けている。床面は南と北で10cm程度の高低差がある。床面の中央部には、規模が約1m×0.7mのSK 2があり、南西隅部分から、幅10~15cmの溝が、壁溝まで延びている。炉跡を思われるSK 2の深さは約10cmで、中央部でさらに10cm窪んでいる。窪みの覆土は暗灰色粘質土で炭ガラを多く含んでいる。主柱穴は4本で床面からの深さは、50cm前後である。壁溝内の柱穴はS B 3には伴わない。遺物



第5図 SB 1~4実測図 (1 : 60)

は床面上で、砥石（102）が出土している。

出土遺物（第23図、図版7c, 28）

102は長方形で、4面以外に第23図に図示した上端面を含め5面がよく使用されている。

SB 4（第5図、図版6a・b）

SB 4はSB 1・2・3, SK 5・6と重複関係にある住居跡で、新旧関係はSB 1→SB 2→SB 3→SB 4と最も古い。SK 5より古く、SK 6より新しい。平面形は南側の状況から、方形と推定できる。規模は土層B-B'でSB 4を確認していることと、床面中付近に炉跡と考えられる径0.7mのSK 3が東側の壁から2.5mに位置することから、反転すると5m程度と思われる。SK 3は灰褐色土で炭ガラを多く含んでいる。SB 4に伴う柱穴は不明である。他の柱穴に比べ、底までの深さが約30cm程度のものが伴う可能性が高い。遺物はP 5から底部片（18）、P 6から口縁部片（17）、東側の壁溝内から高杯か鉢の杯部（19）が出土している。

出土遺物（第17図、図版22）

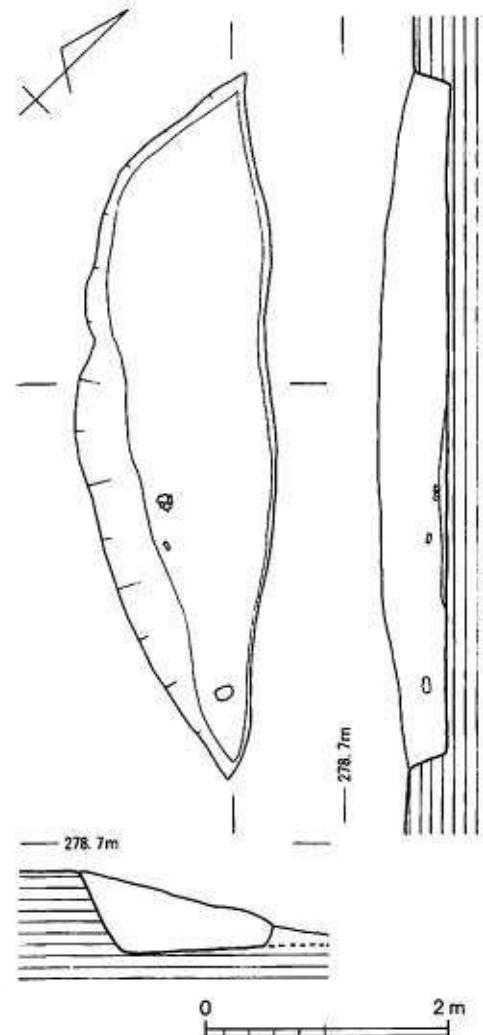
18は底部外面をナデ、内面に指頭による成形痕が残っている。胴部外面は縦方向のヘラ磨き、内面は縦方向のヘラ削りが施されている。19の口縁部の内外面は横ナデで、端部は拡張され2条の凹線がみられる。端部を拡張する形態は弥生時代後期中頃にはみられないことから、19は後期前半頃と思われる。

SB 5（第6図、図版8a）

調査区中央部北東側は調査区外となっている。平面形は不明であるが、南西側下端が直線的なことから、隅丸方形と思われる。壁溝・柱穴跡はみつかっていない。上端と下端の高低差は、約60cmで、床面は北東に向かって緩やかに傾斜している。遺物は、甕（21）が南西側で床面より浮いた状態で出土している。覆土の中位から、高杯か鉢の口縁（20）、甕口縁（22・23）、甕の底部（24・25）が出土している。覆土は灰褐色粘質土の単一層であった。

出土遺物（第17図、図版23）

20は口縁部の破片で、内外面は強い横ナデ、端面に2条の凹線を施している。21の口縁は頸部から強く外反し、内傾気味に立ち上がる。内外面を横ナデ、肩部内面は指頭による縦方向のナデ、肩部より下は横方向にヘラ削り



第6図 SB 5 実測図 (1:60)

が行われている。外面はハケ目が残る。22・23ともに内傾する口縁部で外面に、凹線状の窪みが2条残る。

b. 土坑

調査で確認した土坑の26基は住居内の、SK1～3、住居跡と重複関係が認められる一群、調査区の中央付近のSK11～16の一群、調査区の東側のSK17～26の一群の三群に分かれて立地している。この内、SK1はSB1、SK2がSB3、SK3がSB4の床面で確認している。SK1～3の土坑は、それぞれ床面のほぼ中央部に位置し、覆土内に炭ガラを多く含んでいることから、炉跡と考えられる。以下、単独の遺構である土坑の記述を進める。

SK4（第7図、図版8b）

SB3の北東隅に位置している。平面形は南側1.6m×西側1.04mの長方形であったと思われる。東側の壁が0.75m残り内側に掘り込まれている。北東隅と北側の壁の立ち上がりは確認できなかった。SB4床面からの深さは14cm程度である。底面は南から北に向かって緩やかに下がっている。覆土は灰褐色粘質土（黄褐色土をブロックで含む）の単一層であった。SB3・4の掘り下げ中に確認したが、SB3の壁溝がSK4上面で確認できなかつたので新旧関係はSK4→SB3→SB4と考えられる。遺物は出土していない。

SK5（第7図、図版8c）

SB4の北東部に位置している。平面形は長辺の南西側が1.25m、北東側が1.5m、短辺約0.8mの南西側が短い長方形で、底面の中央部が浅く窪んでおり炭ガラを多く含んでいる。SB4からの深さは30cm程度である。柱穴跡2基と重複関係にあり中央の柱穴跡を掘り込んでいる。遺物は、床面南東隅付近から浮いた状態で、甕の胴部片が3点出土している。SB4と重複関係にあり、出土した遺物の観察から、SK5の方が新しい。隣接するSK6との間に位置する幅5cmの溝を覆土の上面で確認していないので、溝よりも新しいと考えられる。

SK6（第7図、図版9a）

SK6はSB4の東側壁溝の北隅部に位置している。平面形は短辺0.6cm～長辺0.7cmの不整形である。SB4からの深さは、約17cmで底面は平坦である。柱穴跡・SK5との間に位置する溝と重複関係にあり、新旧関係は、柱穴（P5）→SK6→溝の順に古くなる。覆土は淡褐色砂質土の単一層で、遺物は出土していない。

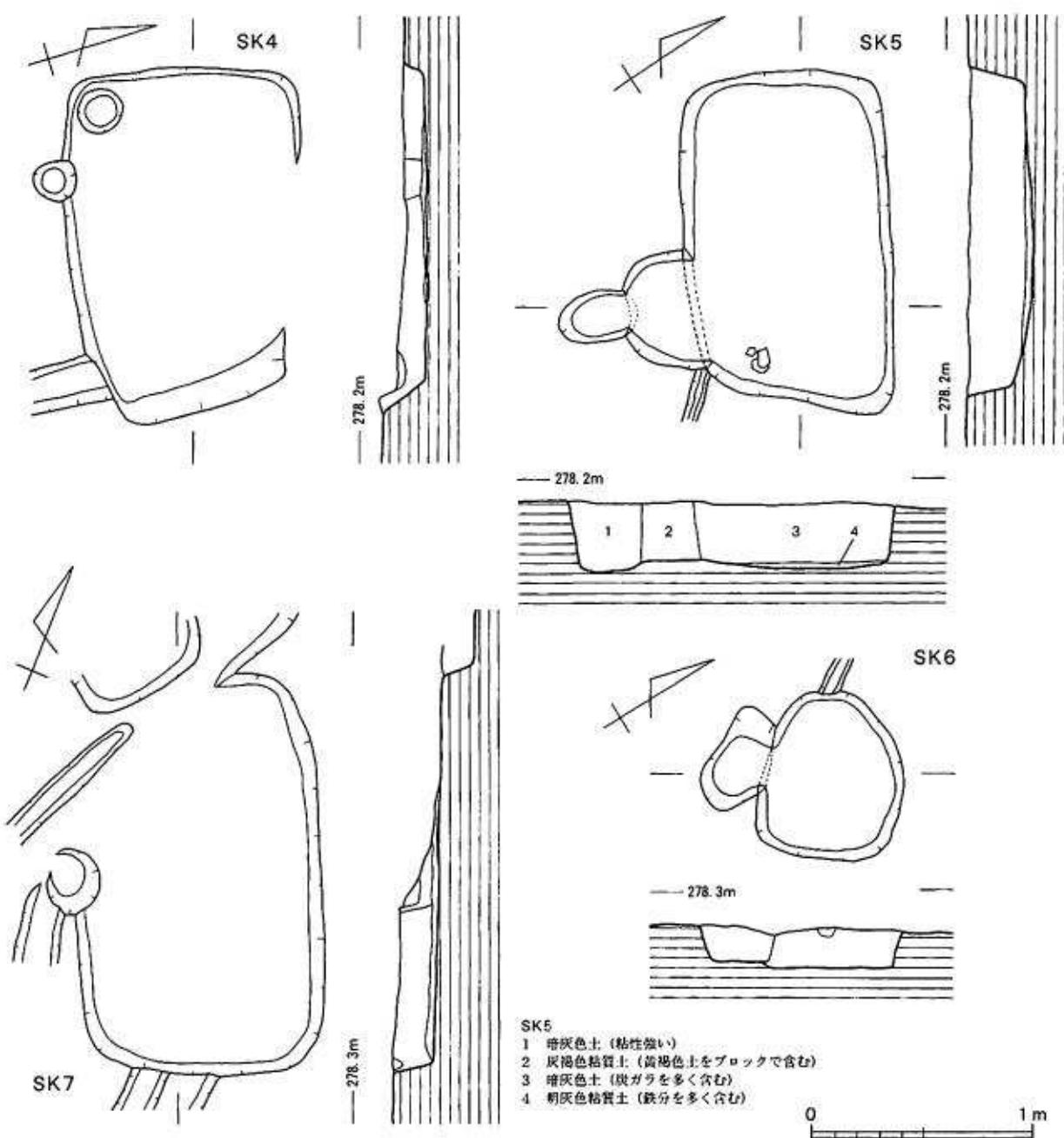
SK7（第7図、図版9a）

SK7はSB2の北東部、SB4の東側に位置している。平面形は、北西部分が不明瞭であるが短辺1m×長辺1.8mの長方形であったと思われる。SB2床面からの深さは約20cmで、底面

は中央付近がやや窪み、北に向かって緩やかに下がっている。位置的に S B 1・2 と重複関係、SK 6 と新旧関係の位置にあるが、新旧は確認できなかった。ただ、覆土が S B 2 と同じ明褐灰色土の単一層であったことから、S B 1 よりは古いと考えられる。遺物は出土していない。

SK 8 (第8図、図版9 a)

S B 2 東壁の東側に位置し、S B 2 より古い土坑である。平面形は、S B 2 によって西側を掘削されているがことから、短辺0.55m、長辺が0.6m以上の長方形であったと思われる。検出面から深さは15cmで底面が西側に向かって下がっている。覆土は暗灰褐色土の単一層であった。遺物は出土していない。



第7図 SK 4～7実測図 (1 : 30)

S K9 (第8図)

S B 2の東側壁中央付近に位置し、S B 2と南東隅の柱穴跡より古い土坑である。短辺0.9m、長辺が1m以上の長方形であったと思われる。検出面からの深さは25cmで、底面は西側に向かって緩やかに下がっている。覆土は2層（第5図土層D-D'断面図）で、遺物は出土していない。

S K10 (第8図、図版5 b, 9 c)

S B 2の南隅壁付近に位置し、S B 2より新しい土坑である。北東部を試掘時、底面の一部を調査時に住居壁と誤認し掘削を受けている。平面形は1.15m×1.7mの長方形であったと思われる。検出面からの深さは、35cmで底面は平坦である。ほぼ淡褐色土と黄褐色粘土の混入土の単一層である。覆土の中位から甕の胴部破片が少量出土している。

S K11 (第8図、図版10 a, 13 a)

S K11は、調査区中央の遺構集中部に位置する土坑群の1基で、東側にS B 5、南東側にS X 1が位置し、調査区際の緩斜面に立地している。平面形は、北東部辺1.1mから南西部辺1.6mで、幅1.4mの方形状であるが、南西側は円形状となっている。検出面からの深さは35cm程度で底面は中央付近でやや窪んでいる。覆土は淡灰黒色粘質土の単一層で、遺物は出土していない。

S K12 (第9図、図版10 b・c, 13 a)

S K12はS K11～16の土坑群の内、最も南に位置する土坑である。2段に掘り込まれ、上部の平面形は短辺1.3m×長辺1.9mの隅丸方形、下部の平面形は短辺0.9m×長辺1.5m前後の長方形である。南東側の検出面からの深さは、40cm程度で下部の底面は平坦である。北西側の壁に直径30cm前後の柱穴跡があり、S K12はこの柱穴より新しい。上部は下部からの南西に張り出し、検出面からの深さ10cmのテラス状の平坦となっている。当初は、上部と下部を重複関係のある別遺構と想定したが、第1層に変化がみられないため、同一遺構とした。この平坦面から、底面までの深さは、約30cmである。遺物は、平坦面から甕底部（27）が出土している。

出土遺物（第18図、図版23）

26は土坑内から出土した甕の口縁部片である。27は甕底部片で底面は丸みを帯びている。底部の外面は板状の工具でナデ、内面は指頭による圧痕が残っている。胴部外面は、縦方向のヘラ磨き、内面は横方向のヘラ削りの後、板状の工具を用いてナデしている。土器の厚みが4mmと全体的に薄い。

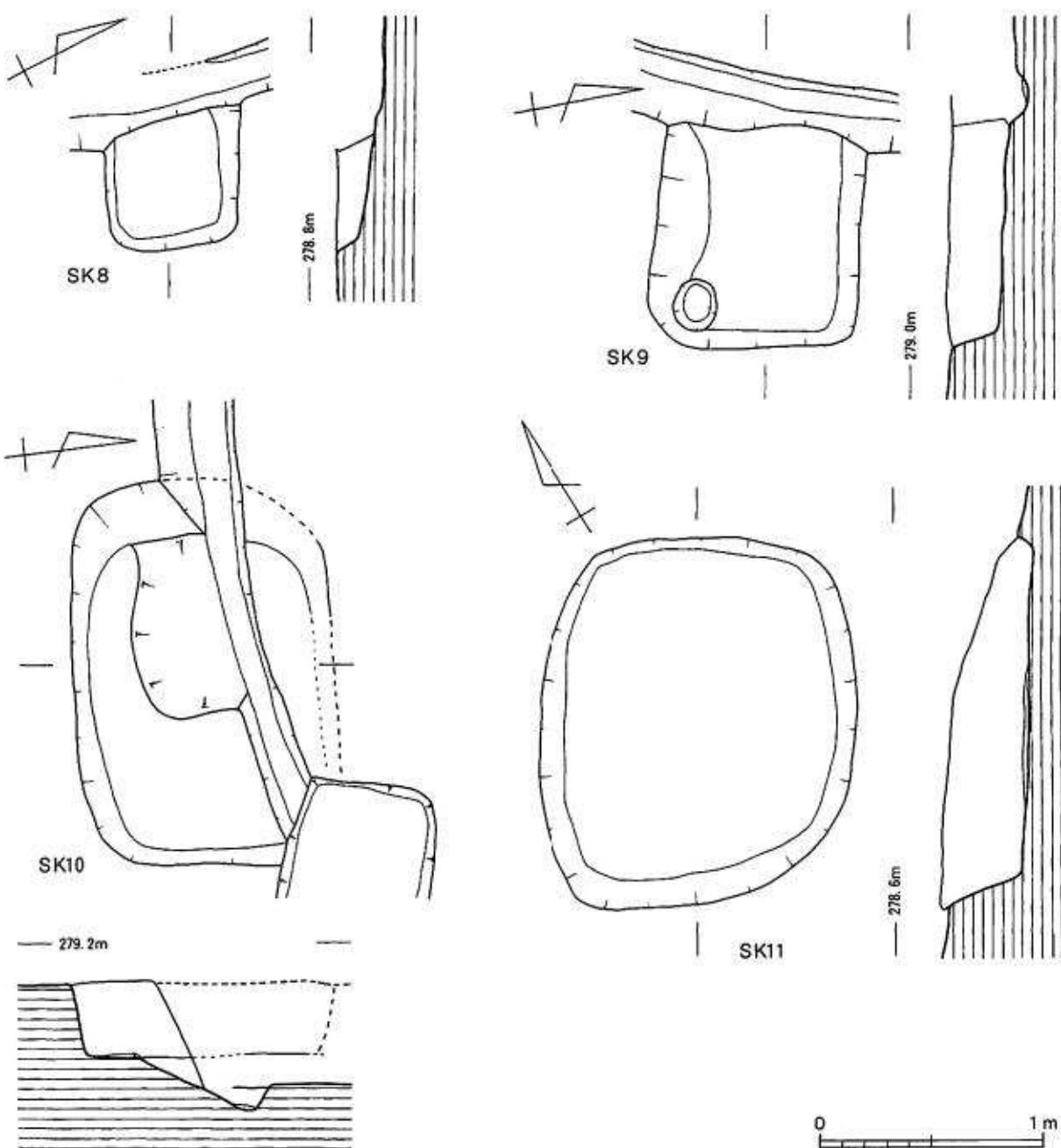
S K13 (第9図、図版11 a・b, 13)

S K13はS K12の北に位置し、SD 1と重複関係にあり、SD 1より新しい。平面形は短辺1m、長辺1.75mの不整形な長方形である。南側の壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。検出面からの深さは40cmで、底面はほぼ平坦である。底面の東隅部に、底面からの深さ約25cm、短辺30cm

×長辺50cmの方形状の落ち込みがある。覆土は第2層と同一でSK12に伴うものであるが、性格は不明である。遺物は覆土中の第1層から器台片(28)が出土している。

出土遺物（第18図）

28は器台部片で外面に4条の沈線、沈線から上部は横方向のヘラ磨きが残る。内面は、裾部に、絞り目状に指頭による調整痕跡がみられ、上部は横方向のヘラ削りが施されている。



第8図 SK8～11実測図 (1 : 30)

S K14 (第9図, 図版11c, 12a, 13a)

S K14は、S K15とS K13との間に位置する土坑で、重複関係はみられない。平面形は、短辺0.6m、長辺1.3mのほぼ長方形である。南側の検出面からの深さは、20cm程度で、中央付近でやや窪んでいる。覆土は灰褐色土の単一層で、壺(29)が、口縁部を底面に接地した状態で出土している。胴部以下の底部は存在していない。29の他、別個体の胴部片が出土している。

出土遺物 (第18図, 図版23)

29は壺の口縁から胴部下半が残っている。口縁部は肩部から頸部が緩やかに外反して立ち上がった後、強く内傾させ、折部外側に粘土を貼り付けている。貼り付け部分外面に、ヘラ状工具の先端を使用して明瞭な段をつくっている。口縁の端部は尖り気味に丸め、外面に凹線状の窪みが3条残っている。頸部の上半から口縁部は内外面とも横ナデで仕上げている。頸部下半から胴部の外面は縦方向のハケ目から横方向のハケ目が残っている。内面は頸部下半から横方向のハケ目、指頭による成形痕が残り、肩部から胴部は横方向のヘラ削りが行われている。部分的に黒斑がみられる。

S K15 (第9図, 図版12b, 13a)

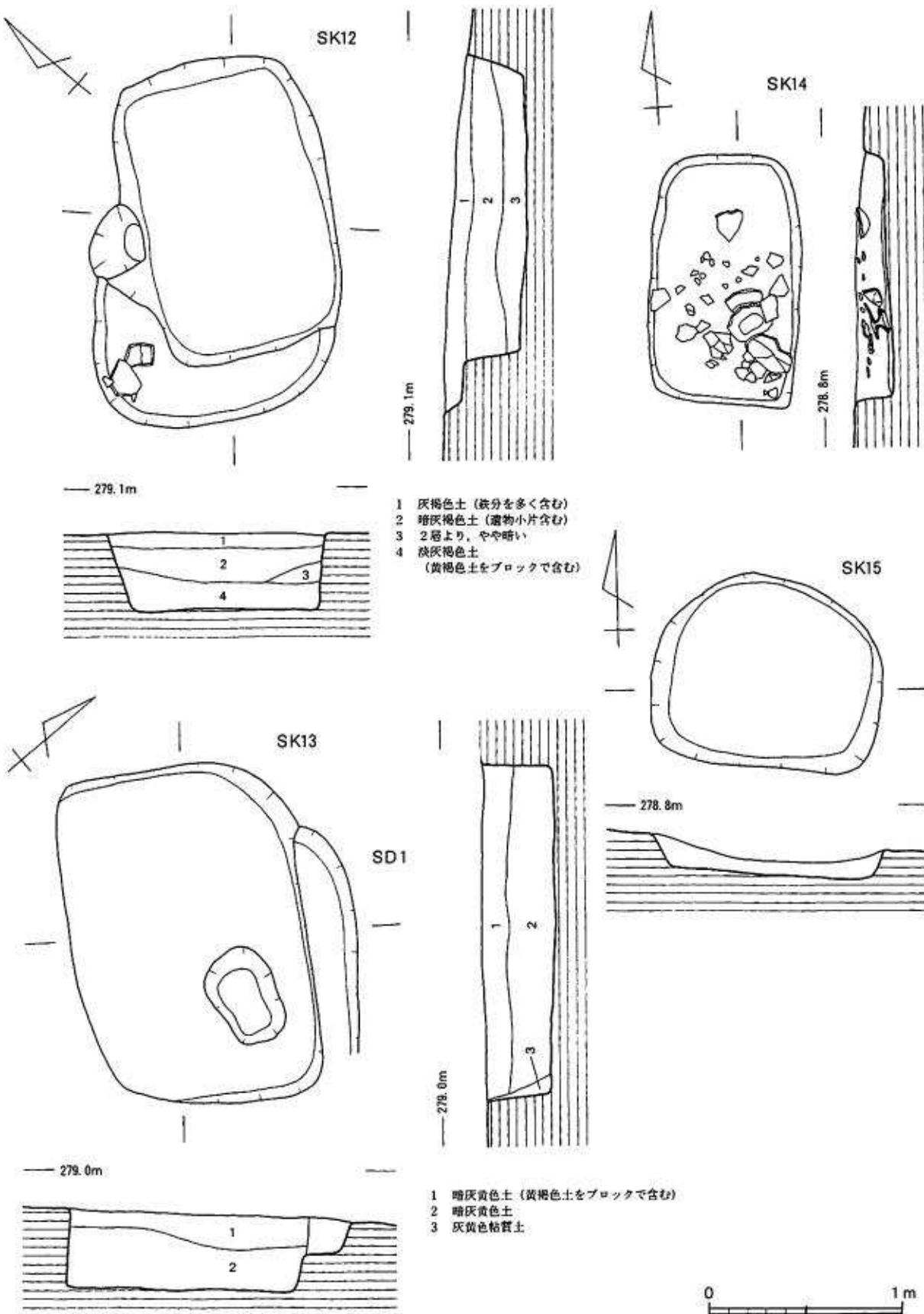
S K14の北東に位置している。平面形は南側の長さ1.1m、北側が膨らんだ幅1mの台形状の土坑である。西側の検出面からの深さは15cmで、底面は東に向かって下がっている。覆土は淡灰黒色土の単一層で、遺物は出土していない。

S K16 (第10図, 図版12c・13a)

S K16はSD1・2の間、SD1から北東へ1条分枝する地点に位置している。平面形は短辺1m、長辺1.5mの長方形で北西側がやや膨らんでいる。検出面からの深さは、15cm前後で、底面は北東隅部の方向に緩やかに下がっている。覆土は灰褐色土の単一層で、遺物は底面に接した状態で壺(30)、甕(31・32)が出土している。その他、角が磨耗した自然礫が1点出土している。

出土遺物 (第18図, 図版23・24)

30は壺口縁部片で、口縁部は貼り付けられており、頸部からやや外傾しつつ立ち上がっている。外面に丁寧に波状文が施された後、内外面ともに、横ナデがみられる。頸部から肩部外面は縦方向のハケ目が残る。このハケ目と口縁部に施された波状文は、幅が2cm前後で16条前後とほぼ同一であり、同じ工具を使用した可能性が考えられる。肩部の内面は横方向の強いヘラ削りである。31の甕口縁部は、頸部から僅かに直立し、外側に開いている。内外面ともに横ナデ、肩部外面はナデ、内面は横方向のヘラ削りが行われている。32は甕口縁部片で、頸部から水平に外反したのち、上方へ立ち上がってから緩やかに外方へ広がっている。外面は強い横ナデによって上下2段窪んでいる。



第9図 SK12～15実測図 (1 : 30)

S K17 (第10図, 図版13 b · c)

S K17は調査区東側の位置するS K17~26の土坑群中に位置する土坑で、最も北西部に位置している。平面形は、北側0.75m, 南側0.6m, 東西両側が0.9mの不整長方形である。南側の検出面からの深さは20cm前後で、底面は中央付近で窪んでいる。覆土は淡灰黒色粘質土で、上位から甕(33・34)片が出土している。

出土遺物 (第18図, 図版24)

33は甕口縁部片で、口縁部は頸部から一旦外反し、内傾して立ち上がる。屈曲部分に凹線状の窪みが廻っている。内外面とも横ナデが行われている。34は底部片で底部外面に不定方向、胴部外面には縦方向のヘラ磨きが施されている。内面は縦方向のヘラ削りが残っている。

S K18 (第10図, 図版14)

S K18はS K17の南西側、調査区の際に位置し、単独で立地している状況である。平面形は短辺0.7m前後、長辺1.6m前後の長方形である。南西側の検出面からの深さは、30cmで底面は北東に向かって下がっている。覆土は2層堆積しており、上層の南西部から甕片(35~37)、自然礫が出土している。

出土遺物 (第18・19図, 図版24)

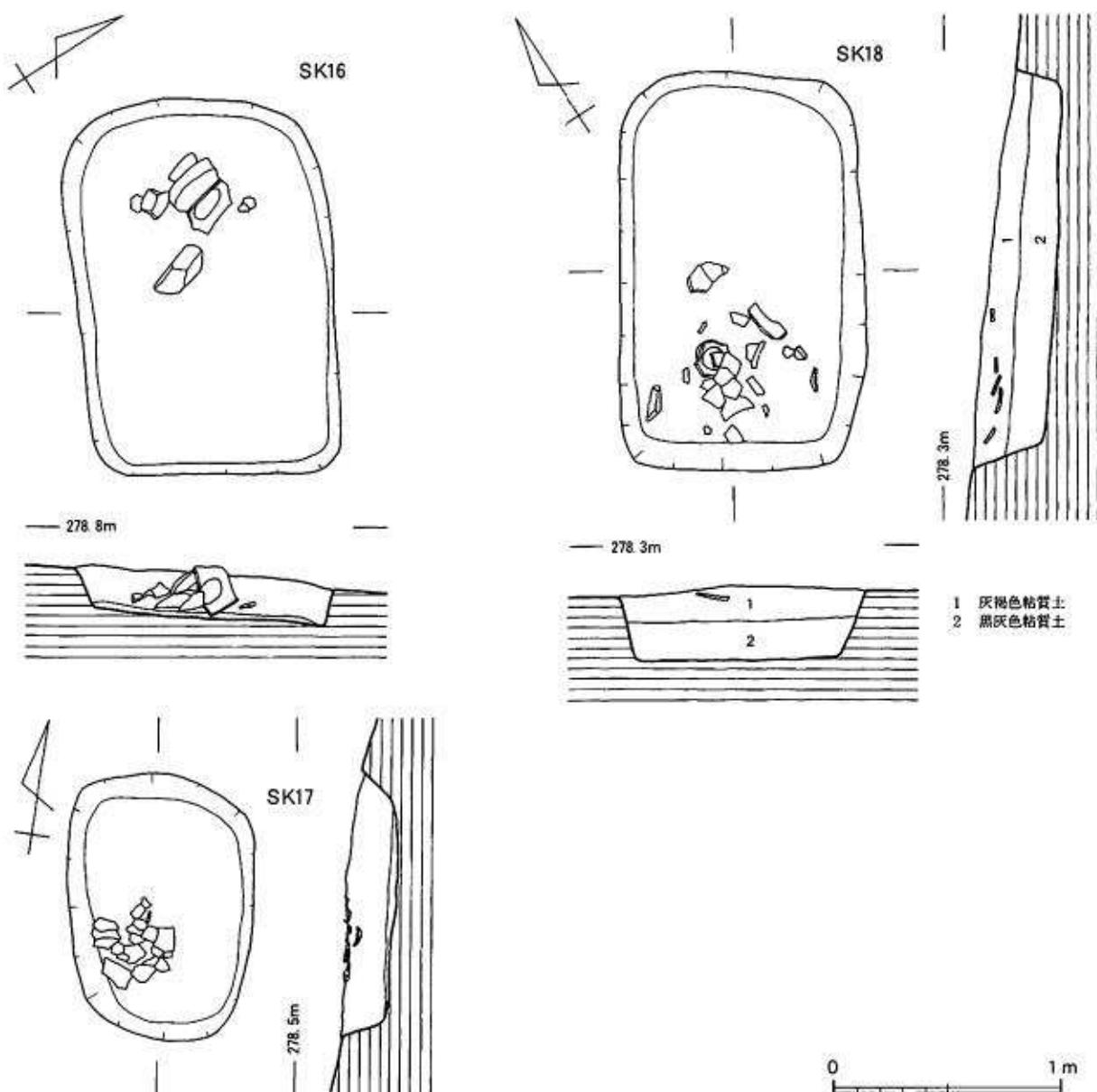
35は口縁部から肩部片と肩部から胴部片との接点が僅かしない。口縁は頸部から外反し、直立気味に立ち上がり、端部は丸く終わっている。口縁部周辺は内外面ともに横ナデ、特に外面は、強い横ナデにより2段窪んでいる。肩部から胴部の外面は、縦方向のハケ目が残り、2次焼成による煤が全面に付着している。内面は肩部周辺が横方向のヘラ削り、胴部が斜め方向のヘラ削りが残る。36・37は甕口縁部片である。口縁部は頸部から外反し、直立気味に立ち上がる。頸部と口縁部の境は強い横ナデにより段をつけている。内外面ともに横ナデが行われている。36の肩部内面は、横方向のヘラ削りが行われている。38は大型の甕か壺の平底気味の底部で、外面はナデ、胴部外面は縦方向のハケ目が僅かに残る。内面は底周辺が横方向、胴部は縦方向のヘラ削りが明瞭に残っている。

S K19 (第11図, 図版15 a · b, 18 a)

S K19はS K19~24の土坑群のひとつで、北隅に位置している。平面形は、長辺は両側とも1.5mであるが、北西側の幅0.55m、南東側幅0.7mと南東側がやや広い長方形である。南西の検出面からの深さは、26cmで、底面は北東方向に向かって下がっている。覆土は2層堆積している。遺物は出土していない。

SK20 (第11図、図版15a・b, 18a)

SK20はSK19の南に位置している。平面形は、短辺が両側ともに0.9m、長辺の北西側が1.45m、北東側が1.2mと短い不整長方形である。南西側の検出面からの深さ、20cmで底面の中央付近から北東隅方向に向かって、15cm窪んで土坑の壁にいたっている。覆土は3層堆積しており、遺物は出土していない。



第10図 SK16~18実測図 (1 : 30)

S K21 (第11図, 図版15 c, 16 a, 18 a)

S K21はS K19の南側, S K20とS K23の間に位置している。平面形は長辺南西側が1.3m, 北東側が1.4m, 短辺は北西側が1.3m, 南東側が1.4mと不整方形である。検出面からの深さは, 30cmで底面はほぼ平坦である。覆土は2層からなり, 遺物は上層からは僅か, 下層からの出土がほとんどである。下層からは, 貝 (39~42), 底部 (43), 高杯または鉢 (44) が出土している。

出土遺物 (第19図, 図版24)

39~42は貝口縁部片である。口縁部はいずれも頸部から外反しながら立ち上がるが, 40は直立して立ち上がり, 端部にやや面をもっている。口縁部内外面ともに横ナデを施している。39の外面は強い横ナデによって, 3条の窪みが残る。肩部の内面は横方向のヘラ削り, 39のみ頸部の内側に横方向のヘラ磨き状の条痕が残っている。40の肩部外面は縦方向のハケ目が施され, 部分的に煤が付着している。43は丸みを帯びた平底で外面がナデ, 内面は不定方向のヘラ削りが施されている。胴部の外面はハケ目が僅かに残り, 内面は縦方向のヘラ削りが行われている。44は, 高杯か鉢の口縁部片で, 口縁は外方に広がる体部から直立している。口縁部周辺は, 内外面に強い横ナデを行って, 両側を窪ませることによって, 端部の面を強調している。端面には, 凹線などの加飾はみられない。

S K22 (第11図, 図版16 b・c, 17 a, 18 a)

S K22はS K23と重複関係にあり, S K23より新しい。覆土は暗黒褐色粘質土に黄褐色土が若干混入している單一層で, S K23とは平面で新旧関係を確認した。平面形は南隅に後世の搅乱を受けているが, 短辺が0.9m, 長辺が1.6mのほぼ長方形であったと思われる。南西側検出面からの深さは35cm, 底面は北西から南東側に下がっている。この底面は, S K23の底面から約10cm深くなる。遺物は覆土中から貝 (45), 鉢 (46), 器台台部 (47) が出土している。

出土遺物 (第19図, 図版24)

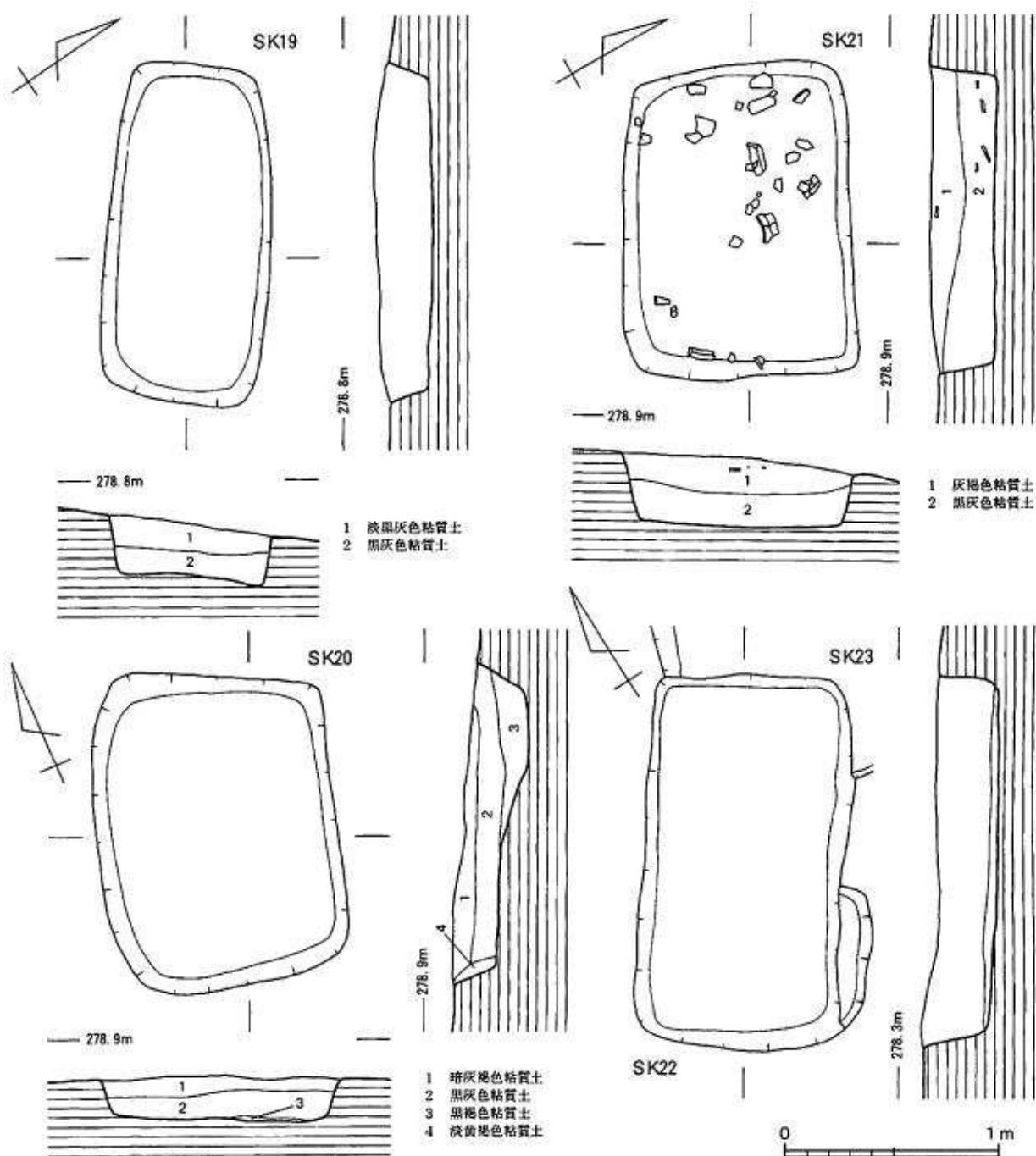
45は貝口縁部片で, 口縁部は頸部から直立して立ち上がる。口縁部と頸部の境には明瞭な段が残る。口縁の外面, 肩部の外面には波状文が残っている。口縁部の内面は横ナデ, 肩部の内面は横方向のヘラ削りが残っている。46の鉢は口縁部内外面を横ナデ, 体部外面を横方向のヘラ削り, 内面を縦方向のヘラ磨きを行っている。47は器台台部片で鋸外面と端面に3条の凹線を施している。内面は横方向のヘラ削りが残っている。

S K23 (第12図, 図版16 c, 17 a, 18 a)

S K23はS K22と重複関係にあり, S K22より古い。S K24の北西隅に近接している。平面形は, S K22によって, 南西隅部が掘削を受けているが, 短辺0.9m前後, 長辺2.1m前後の長方形と思われる。西側の検出面からの深さは, 15cmで北に向かって徐々に下がっている。覆土は3層が堆積している。遺物は出土していない。

SK24 (第12図, 図版17b・c, 18a)

SK24は、北西部がSK23とほぼ接する位置にある。平面形は、短辺1m, 長辺1.3mの長方形である。南西側の検出面からの深さは30cmで、底面はほぼ水平である。覆土は3層堆積しており、遺物は出土していない。



第11図 SK19~22実測図 (1 : 30)

S K25 (第12図, 図版18 b・c)

S K25は調査区内の東側に位置する土坑群のさらに北東側, 調査区際に位置している。北東隅部を水田によって削平されている。平面形は、短径0.9m, 長径1.4m以上の長楕円形であったと思われる。北西側の検出面からの深さは約20cmで、底面はほぼ水平である。覆土は3層堆積している。覆土中の層位は明確でないが、甕(48)が出土している。

出土遺物 (第19図, 図版25)

48は甕口縁部片で、肩部に3条の沈線を施している。口縁部は頸部から僅かに外反して短く終わり、口縁端部には加飾はみられない。肩部外面から内面にわたって丁寧にナデている。胴部外面は表面の剥落が激しく調整は不明である。弥生時代中期前半頃と思われる。

S K26 (第12図, 図版18 c)

S K26はS K25の南東に位置している。平面形は、0.7m×1mの長楕円形で2段に掘り込まれている。2段目は、1段目の北東部から15cmほど掘り下げた平坦面から、壁から20cm南西側から、直径50~70cmの楕円形に約30cm掘り下げている。覆土は、淡灰黒色粘質土である。遺物は土師質土器皿(67~71)と土鍋(66)が出土している。これらの出土状況をみると、掘方の2段目の底に71・70を口縁部が下になるように重ね、上部に小皿の67・68を口縁が上になるよう重ねた後、さらに69で蓋をするように口縁を下にして重ねている。そして、1段目の平坦面の高さに合わせるように、66の土鍋の口縁を下に置いている。土層の観察では確認できなかったが、皿の重なりがあまり乱れていないことから、2段目の掘り込みに木製の桶が据えてあった可能性も考えられる。

出土遺物 (第21図, 図版26)

66は土師質のほぼ完形の土鍋である。口縁部を緩やかに外反した後に横ナデを施している。体部内面は横方向の粗いハケ目、底部周辺は不定方向のハケ目が残っている。外面は頸部から体部に指頭による成形の後に縦方向のハケ目、底部周辺は綾杉文状にハケ目が残っている。67・68は燈明皿として使用されていた小皿で、底部は回転によってヘラで切り離されている。69~71も土師質の皿で、底部は回転ヘラ切りによる。67~71の体部・口縁とともにロクロ回転によるナデが行われているが、69・70は内外面に凹凸ができている。

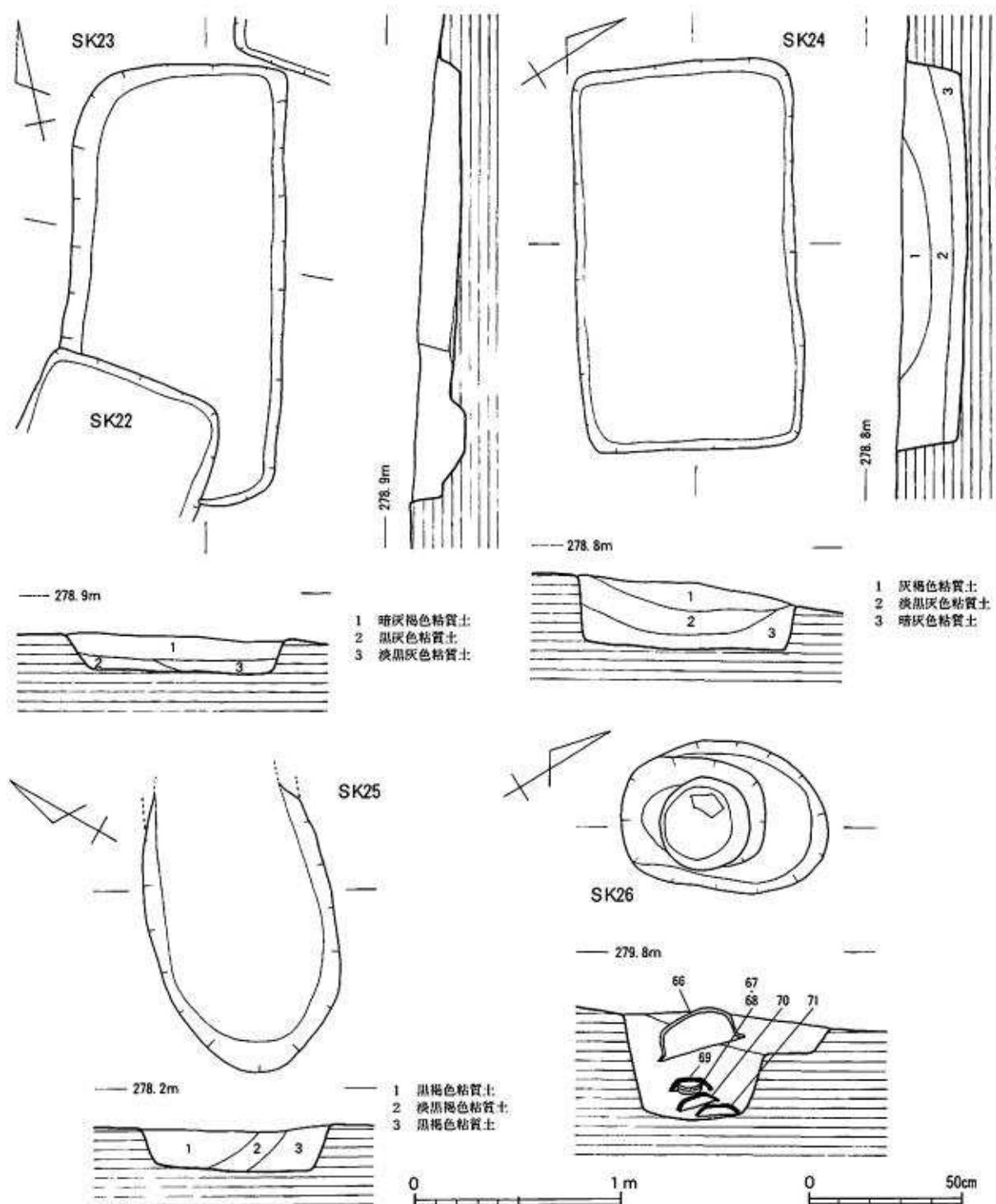
c. 溝

調査区内中央部の遺構群中に等高線に沿う状況で、北西一南東方向のSD1・2の溝2条確認している。

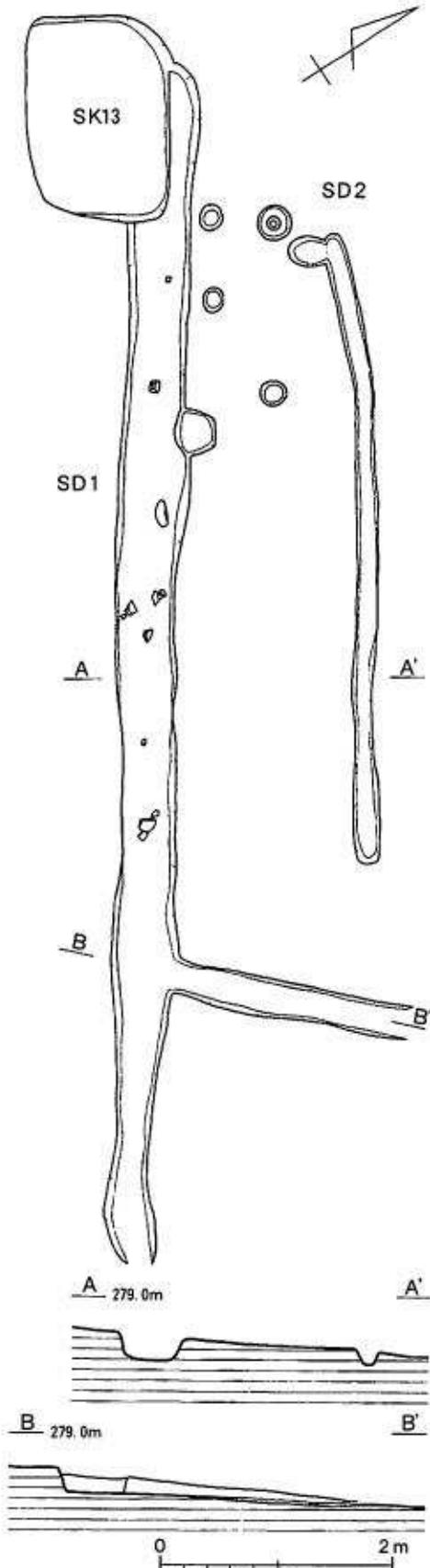
SD1 (第13・14図, 図版11 a・b, 19 c)

SD1は調査区中央部に位置するSK13から等高線に沿って南西方向に長さ10.4m、幅0.5m、深さ0.1m前後の溝である。南東の端から2.3m北西側で北東方向に分枝している。底面は、この

地点まで両側から深くなり、北東方向にさらに下がっている。覆土は暗褐色粘質土で、覆土中から壺(50)、甕(49・51)、底部(52~54)、高杯または鉢(55)、石錐と考えられる石製品(107)が出土している。



第12図 SK23~26実測図 (1 : 30, SK26は1 : 20)



第13図 SD1・2実測図 (1 : 60)

出土遺物 (第19・20・23図、図版25・28)

50は形態から壺と思われる。外面は肩部がハケ目、胴部最大径周辺が櫛状工具による波状文、横方向のヘラ磨き、底部周辺は縦方向のヘラ磨きを丁寧に施している。肩部内面は、上部で指頭による成形痕が部分的に残り、下部は板状工具による縦方向のナデ、胴部下半はハケ目が残っている。49・51は甕の胴部から口縁部片である。49は口縁部を上下に拡張し、3条の凹線文を施している。口縁部の内外面は横ナデ、肩部外面をハケ目、胴部外面をハケ目の後横方向のヘラ磨き、胴部内面を板状工具によるナデを行っている。51の口縁部は肩部から強く外反している。端面には凹線状の窪みが若干認められるが、磨滅が激しいため不明である。頸部内面から肩部外面まで横ナデ、胴部内面は部分的に指頭による圧痕が残るが、縦方向のハケ目が残っている。52~54は平底の底部片である。54は調整不明であるが、52・53は外面にヘラ磨き状の板ナデ、52の内面は底部が不定方向のヘラ削りの後ナデ、胴部は板状工具により斜め方向にナデている。55は高杯杯部あるいは、鉢の口縁部片である。端面に2条の凹線文、口縁外面に5条の凹線文を施している。107は、自然石を利用し、凹部は丁寧に打ち欠いて成形している。凹部から上下とも幅5~7mmの平坦面があり、両端に至っている。性格は不明瞭であるが、凹部に擦痕がみられることから、石錘である可能性が考えられる。

SD2 (第13図、図版19c)

SD2はSD1から北東側に1.6m離れ、SD1と並行して位置している。溝の長さは5.4m、幅0.4m、深さは10cm前後である。溝に高低差がみられないことと、両端が終結していることから、溝として機能していたかどうかは不明である。覆土は灰褐色土の単一層で、覆土中から甕(56)が出土している。

出土遺物 (第20図)

56は甕の肩部から口縁部片である。外面は横ナデ、口縁端面に2条の凹線が施されている。器表面の剥落が激

しいため内面の調整は不明である。

d. 性格不明遺構

S X 1 (第14図)

S X 1 は、調査区中央の S B 5 の南西に位置している。平面形は短径1.3m、長径2.9mの不整形である。南西から北側は緩やかに曲がっているが、長軸の両端は鋭角的である。深さは、南西側の検出面から20cmで、底面は、北西部から南東方向に下がっている。覆土は淡灰黒色粘質土で、上位から甕(57・58)が出土している。

出土遺物 (第20図、図版25)

57・58は甕口縁部片である。57は強く外反した頸部から緩やかに外反して立ち上がる。口縁部の内外面とも横ナデ、肩部の内面は横方向のヘラ削りが残る。口縁の立ち上がり部分は強く押し当てて明瞭な窪みを成している。58は端面をもつ口縁で、調整は器表面が磨滅しているため不明である。

S X 2 (第15図、図版19d)

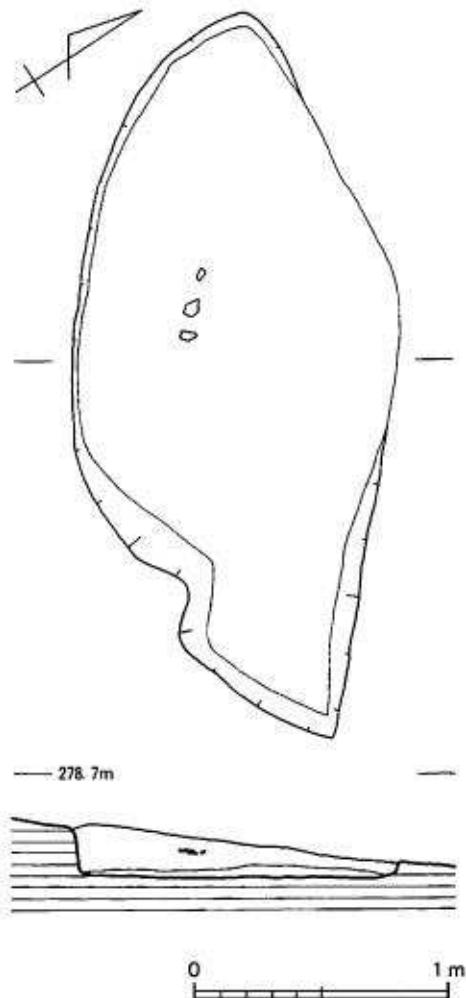
調査区内で最も南東部に位置している。北東部は搅乱を受けている。上端での最大幅が南西部で2.2m、深さが0.4m、最少幅が北東端で0.8m、深さが0.58mである。底面の高低差は0.77mあり、南西から北東方向に下がっている。覆土は5層堆積しており、長頸壺(59)が南西側の下層から、ミニチュア土器(60)が北東側の下層から出土している。

出土遺物 (第20図、図版25)

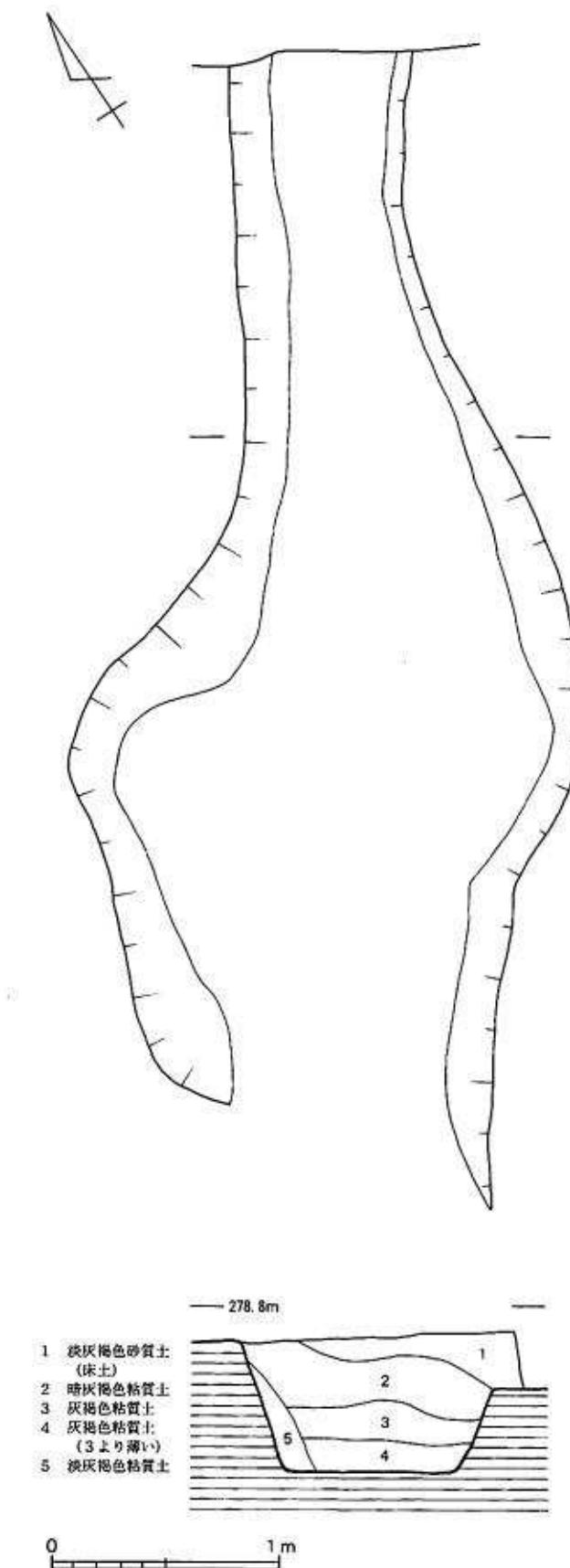
59は長頸壺の頸部から口縁部片である。口縁部は、直立した頸部から緩やかに外反し内傾しながら立ち上がる。頸部外面は縦方向のハケ目後に凹線文を施している。口縁外面に3条の凹線状の窪みがみられる。口縁部内面は横ナデ、頸部は下部から上方の方向に指頭による成形痕が残る。60はミニチュア土器で頸部から口縁は内外面とも横ナデ、体部内面は横方向のヘラ削りが残っている。

e. 柱穴跡 (第4図、19a・b)

調査区内で、S B 1~4と中央付近の土坑群との間と南東土坑群周辺に柱穴と思われる一群を確認した、中には柱痕跡状の落ち込みをもつものや直線的に並ぶ



第14図 S X 1 実測図 (1 : 30)



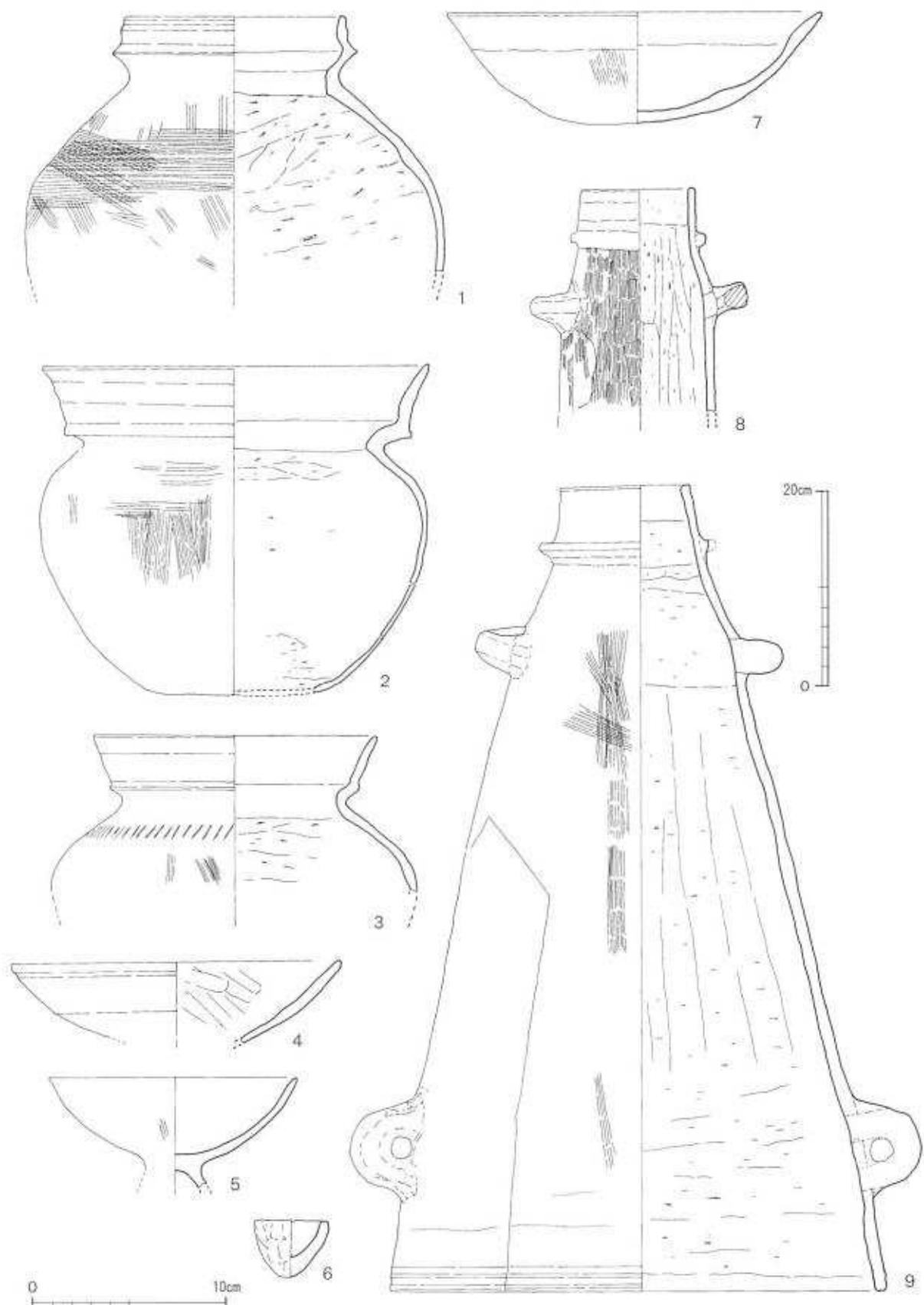
第15図 SX 2 実測図 (1 : 30)

ものが認められるが、対応関係が明確なものは存在していない。柱穴内から、遺物が出土しているものの内、P 1からの手捏土器 (63) と P 2からの壺 (64) の出土状況は祭祀的な状況が窺える。

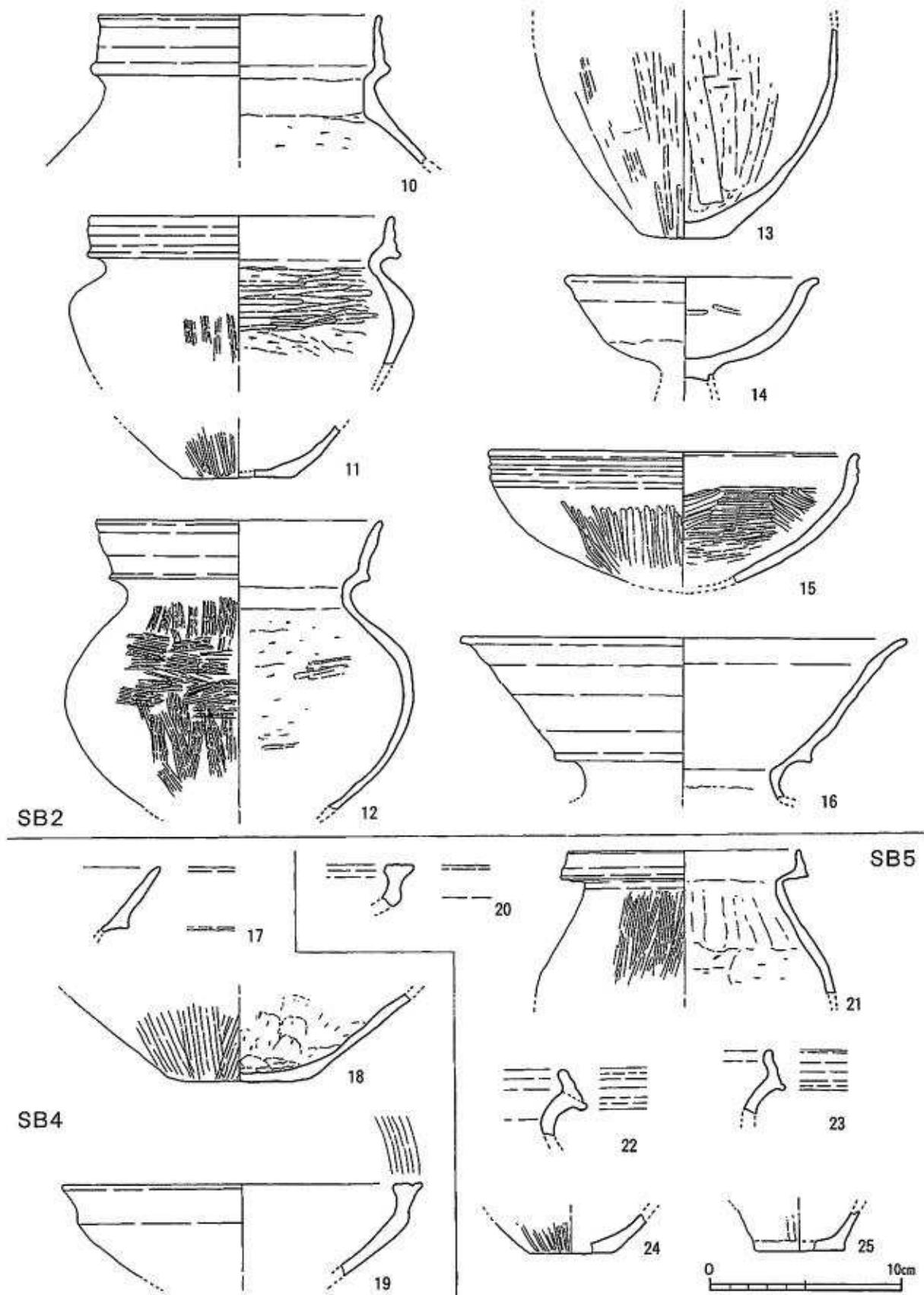
柱穴・調査区内出土土器

(第20~22図、図版25・27)

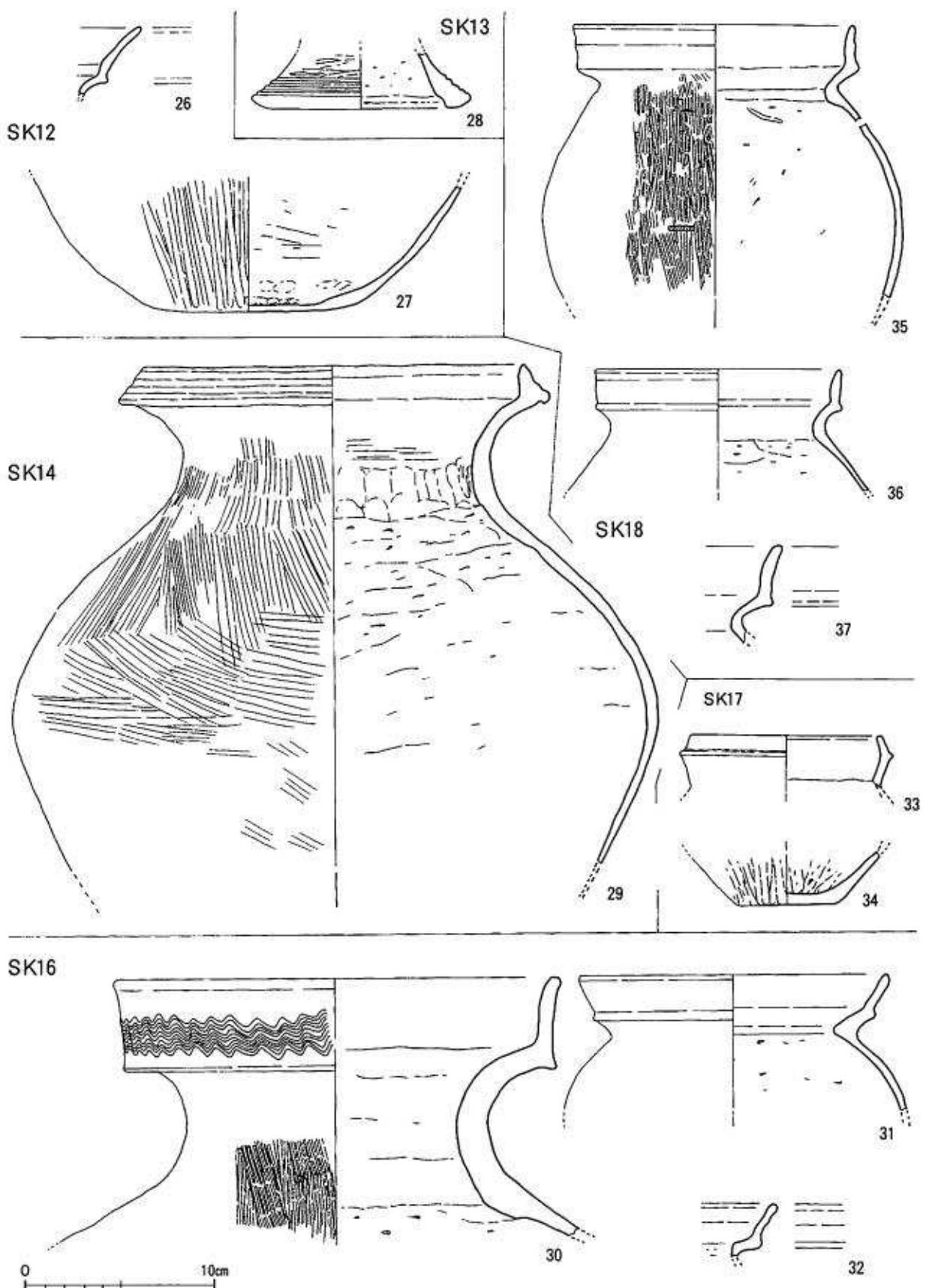
61はP 3、62はP 4、63はP 1、64はP 2、65はP 5から出土している。61は外面に赤色顔料を塗布した痕跡が残っている。粘土紐を断面三角形状に成型し幅3cmの間隔で貼り付け、さらに上下の繋ぐように縦に同様の粘土紐を貼り付けている。内面は横方向の強いナデによる。胎土は精緻で、今回の調査では他に例がない。形態は不明であるが、大型壺の胴部最大径部分の装飾箇所である可能性がある。62は甕口縁部片、63は手捏のミニチュア土器で前面に指頭成形の圧痕が残る。64は大型の壺口縁部片で、口縁が外反気味に立ちあがっている。外面に竹串による刺突文が施されている。頸部から口縁部は横ナデ、頸部外面にヘラ状工具による刺突文が廻り、内面に横方向のヘラ削りが残っている。65は須恵器杯蓋である。上部は回転ヘラ削りにより成形、口縁部の内外面はロクロナデが行われている。83は床土内から出土した甕の底部片である。平底で胴部外面に縦方向の、内面に横方向のヘラ磨きが施されている。91は床土内から出土した須恵器杯身で口縁部は内傾して短く立ち上がる。受部に工具を用いて沈線状に明瞭な段が廻っている。



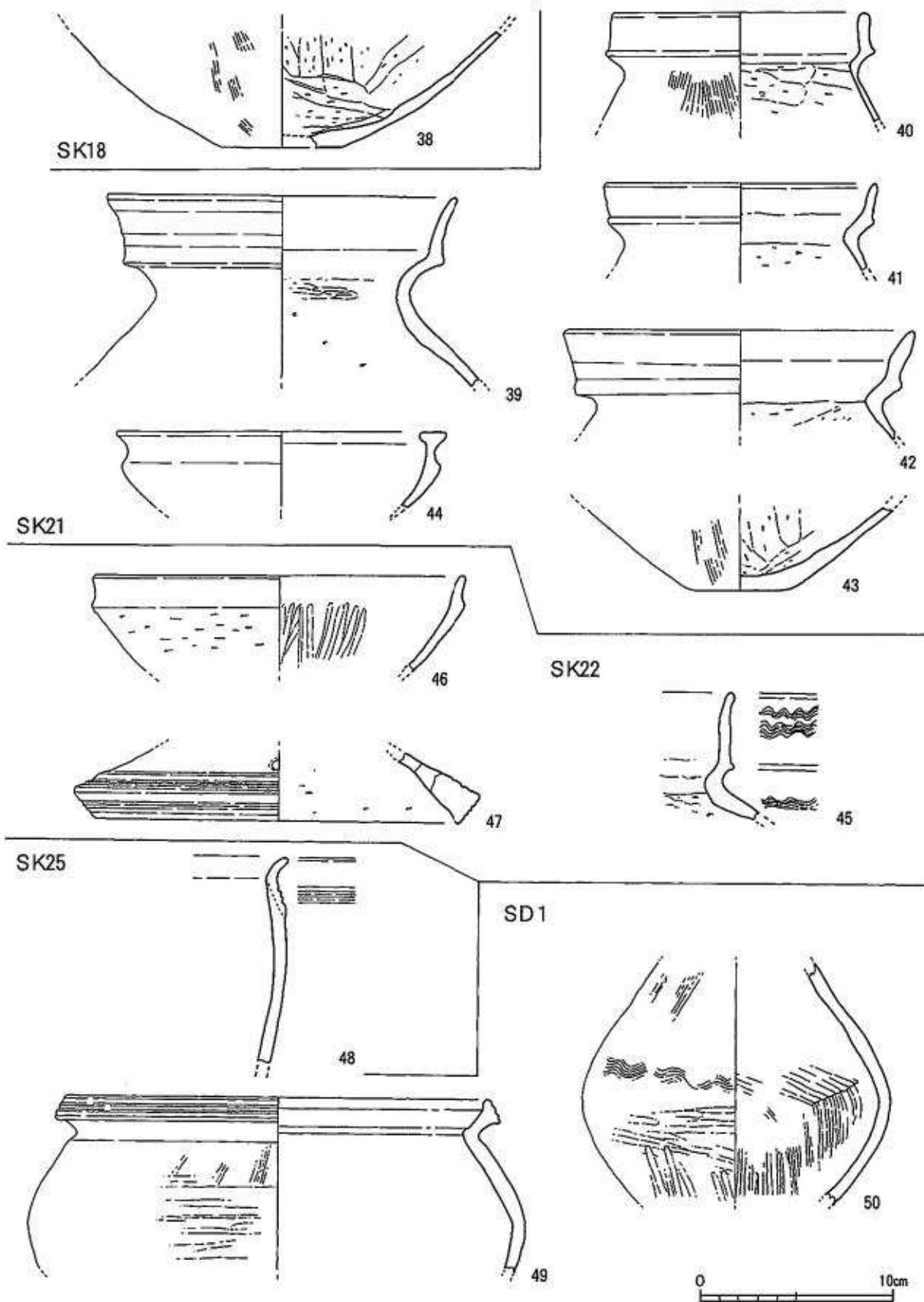
第16図 SB 1出土土器実測図 (1:3, 9は1:6)



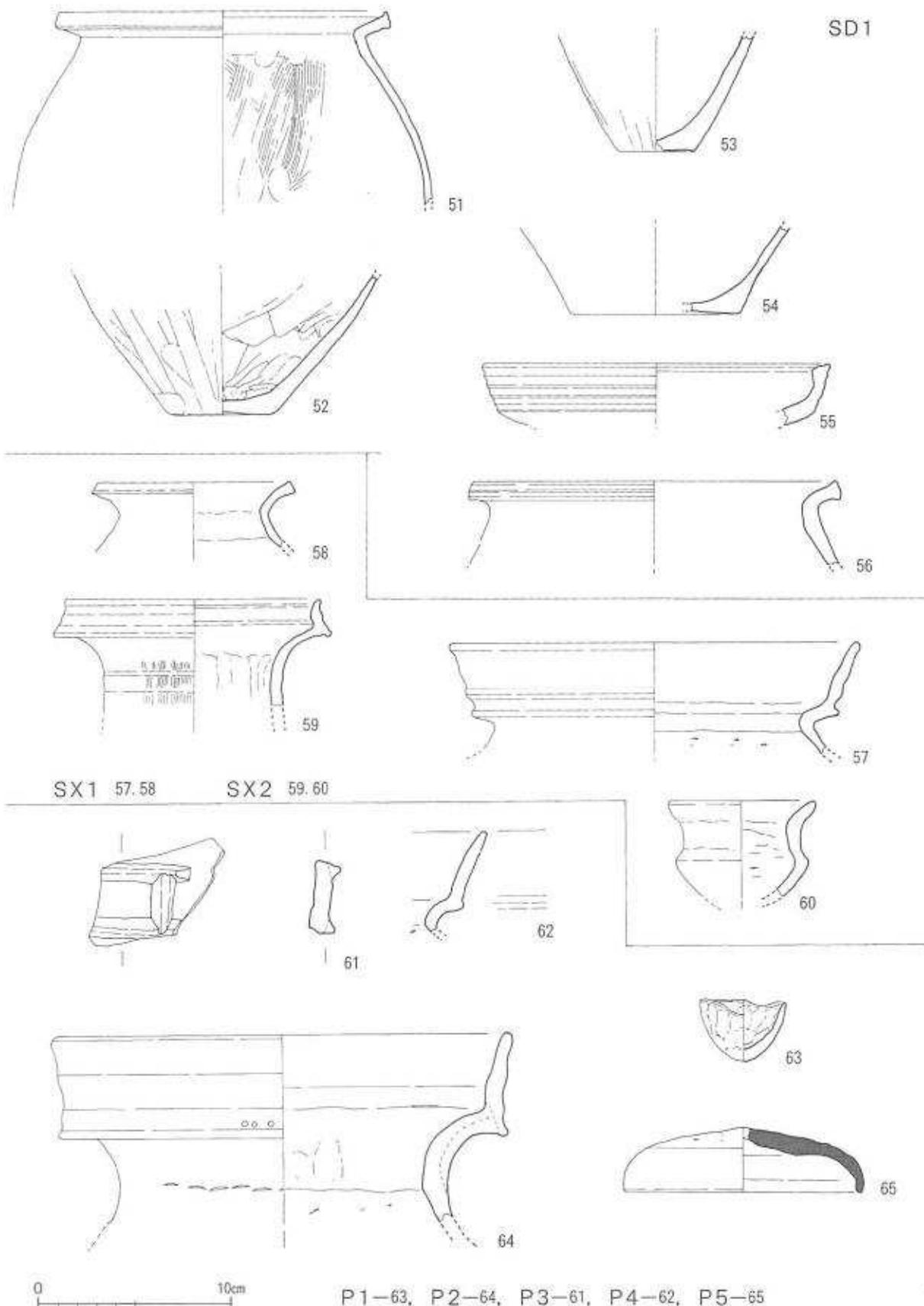
第17図 SB2・4・5出土土器実測図 (1 : 3)



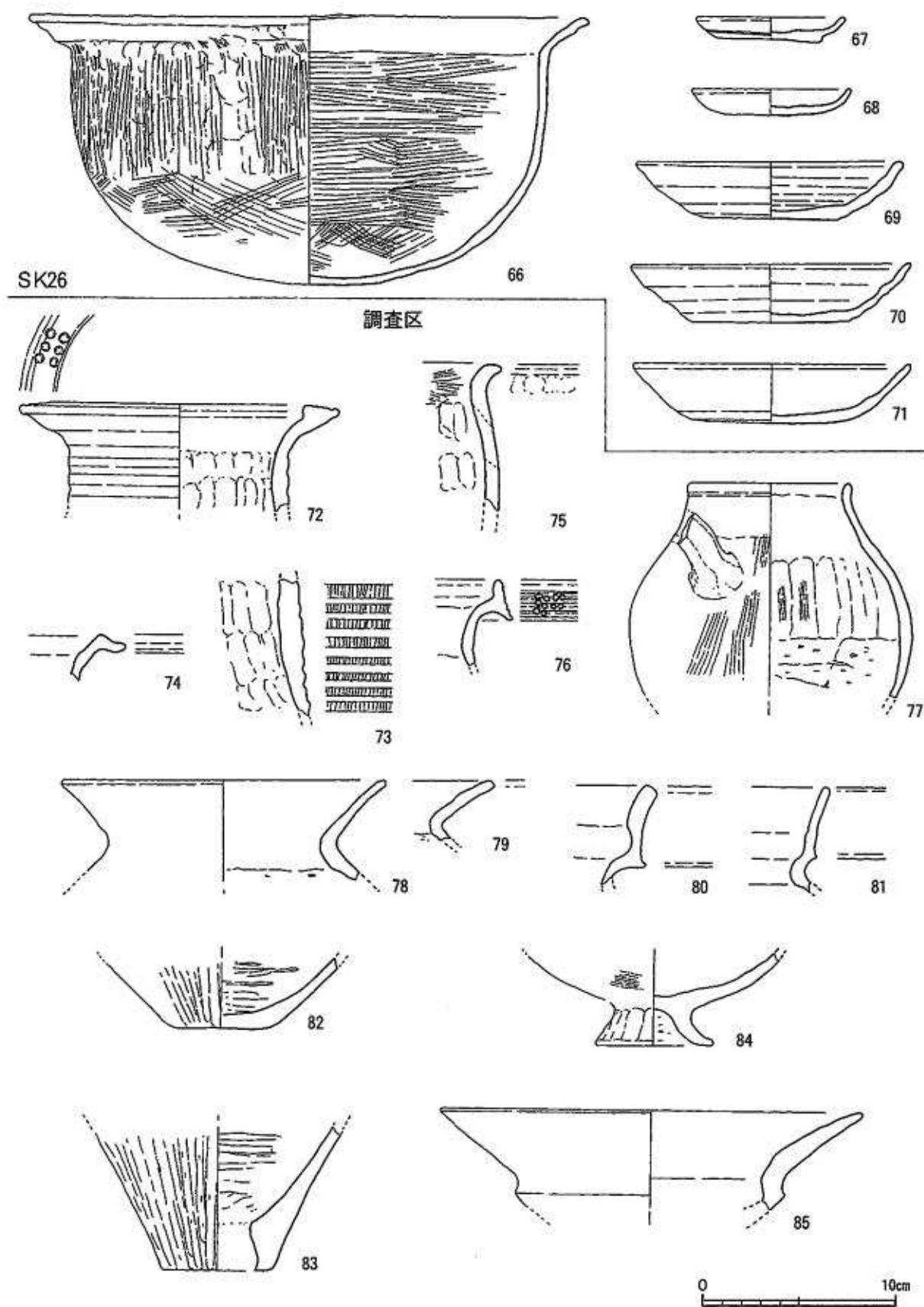
第18図 SK12~14・16~18出土土器実測図 (1 : 3)



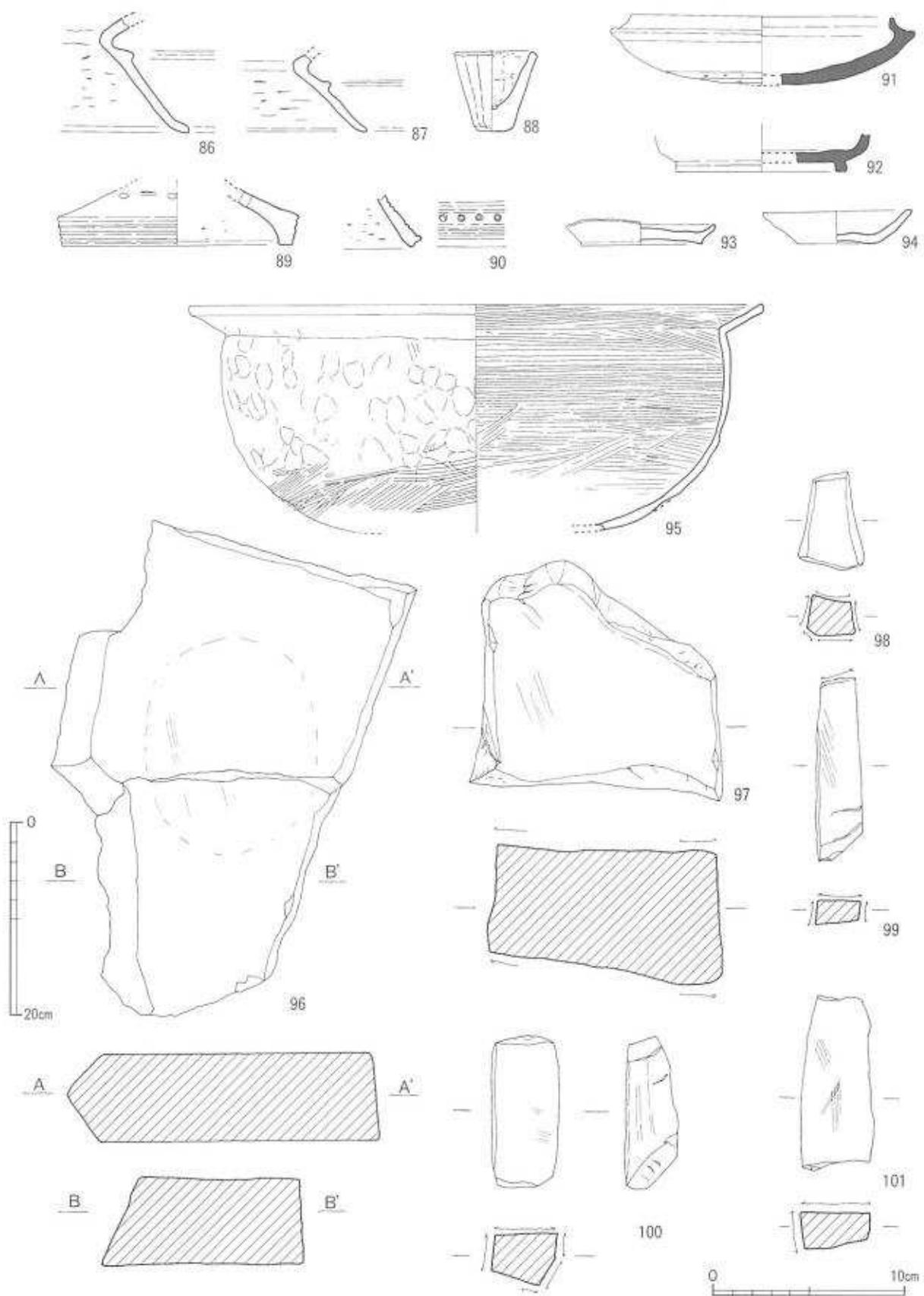
第19図 SK18・21・22・25, SD1出土土器実測図 (1 : 3)



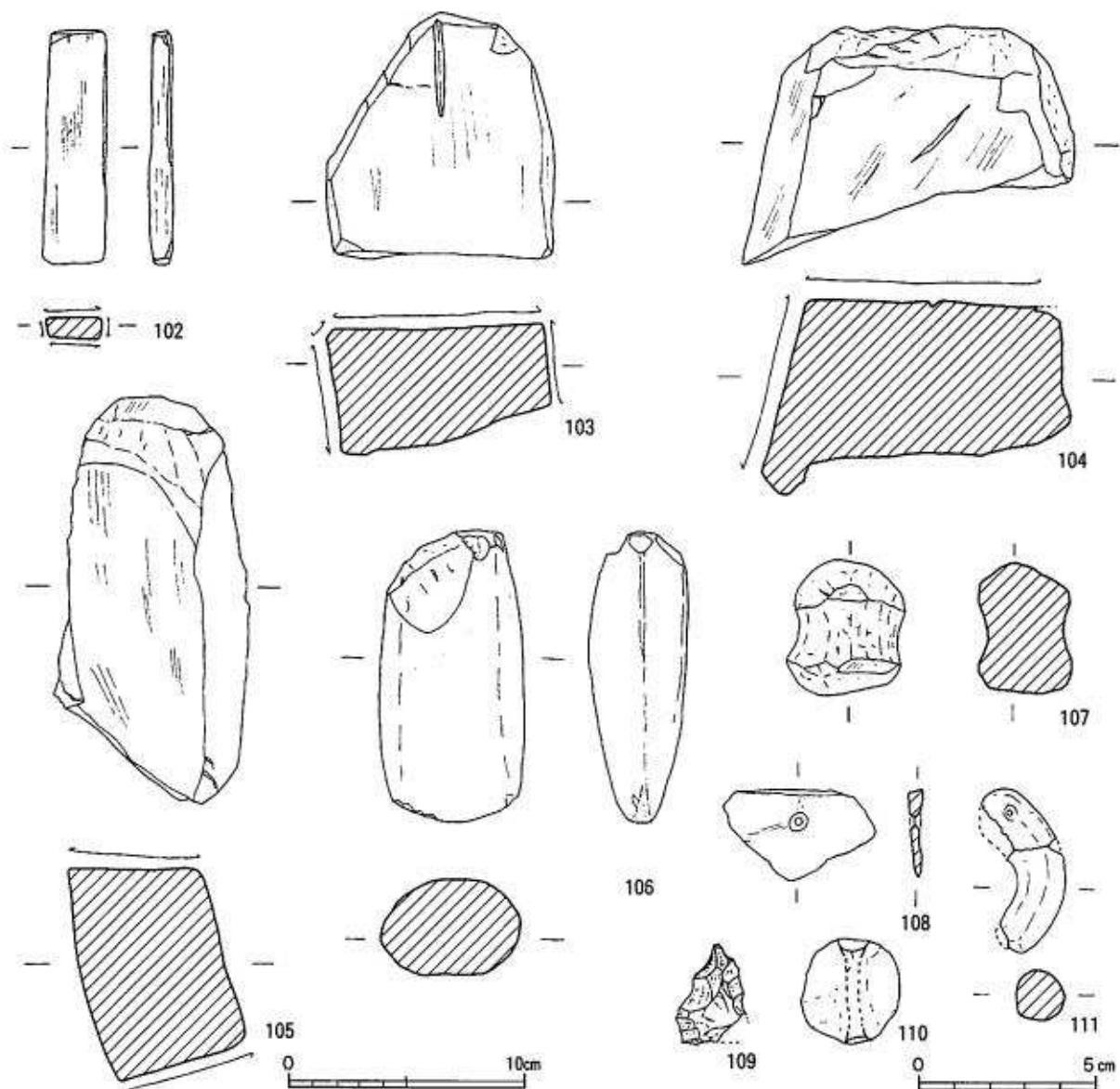
第20図 SD1・2, SX1・2, 柱穴内出土土器実測図 (1 : 3)



第21図 SK26, 調査区内出土土器実測図 (1 : 3)



第22図 調査区内出土土器、SB1出土石器実測図 (1:3, 96は1:6)



第23図 SB1, SD1調査区内出土石器、土製品実測図 (1 : 3, 108~111は1 : 2)

第1表 出土遺物観察表1 各部名称は口縁部、胸部、体部、底部を口、胸、体、底等に、外面・内面・断面を外・内・断に、上半、中位、下半を上・中・下と略している。

遺物番号	造構番号	器種	法量(cm)(復元値/残存高)				手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径	最大径	底径	器高				
1	SB1	甕	11.0	23.8	—	(13.3)	口・頸・横ナデ、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り	普通	良好	灰白色
2	SB1	甕	19.8	20.0	—	17.2	口・頸・横ナデ、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り	普通	良好	灰白色
3	SB1	甕	(14.8)	—	—	(8.2)	口・頸・横ナデ、肩一刺突文、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り	普通	良好	灰白色
4	SB1	高杯	17.2	—	—	(4.2)	口外一凹線状の縦み、体内一板状工具のナデ	細粒	不良	灰白色
5	SB1	高杯	(12.8)	—	—	(5.5)	体外一ハケ目	細粒	不良	外一灰白色、内一灰黒色
6	SB1	手搾	4.0	—	—	2.9	体外一指頭圧痕、体内一ナデ	細粒	良好	灰白色
7	SB1	碗	19.4	—	—	5.8	口一横ナデ、体外一ハケ目	普通	やや不良	灰白色～淡灰色
8	SB1	山陰型瓶形土器	11.4	—	—	(22.4)	狹口部一横ナデ、突帶一貼り付け、把手一差込、体外一ハケ目、体内一ヘラ削り	普通	良好	外一灰白色、内一淡茶灰色、断一灰黒色
9	SB1	山陰型瓶形土器	12.0	—	44.0～46.0	72.9～73.2	狹口部一横ナデ、突帶一貼り付け、把手一差込、体外一ハケ目、体内一ヘラ削り後中央部横ナデ、広口部外一2条の凹線、広口部一横ナデ	普通	良好	外一灰白色、内一茶白色、断一灰黒色
10	SB2	甕	(14.6)	—	—	(7.5)	口・頸・横ナデ、胴内一ヘラ削り	普通	やや不良	淡黄褐色
11	SB2	甕	15.8～16.2	17.9	5.8	(13.0)	口・頸・横ナデ、凹線状の縦み、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ磨き、ヘラ削り、低外一ヘラ磨き	細粒	良好	灰白色～淡青灰色

第2表 出土遺物観察表2

遺物番号	遺構番号	器種	法量(cm)(復元値/残存高)				手 法 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 調
			口径	最大径	底径	器高				
12	S B 2	甕	6.9~8.1	18.2	—	(15.0)	口・頸一横ナデ、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り、ヘラ磨き	細粒	良好	灰白色
13	S B 2	底部	—	—	4.5	(11.2)	胴外一板ナデ、胴内一ヘラ削り、底外一ヘラ磨き	細粒	良好	外一褐色、内一灰白色
14	S B 2	高杯	12.9~13.4	—	—	(5.0)	ロ一横ナデ、体内一ナデ後、ヘラ磨き	細粒	良好	灰白色
15	S B 2	柵	(18.0)	—	—	(7.3)	ロ一横ナデ、口外一3条の回線、体一ヘラ磨き	普通	良好	明褐色
16	S B 2	幾形器台	(23.2)	—	—	(8.3)	ロ一横ナデ、体一横ナデ	細粒	良好	灰白色
17	S B 4	甕	—	—	—	—	ロ一横ナデ	細粒	不良	淡灰白色
18	S B 4	底部	—	—	7.6	(4.3)	胴外一ヘラ磨き、胴内一ヘラ削り、底外一ナデ、底内一指頭圧痕	細粒	良好	灰白色
19	S B 4	高杯	(19.0)	—	—	(4.8)	ロ一横ナデ、口端一2条の回線	細粒	良好	淡橙褐色
20	S B 5	高杯か鉢	—	—	—	—	ロ一横ナデ、口端一2条の回線	細粒	良好	外一黒褐色、内一褐色
21	S B 5	甕	(12.0)	—	—	(7.4)	ロ一横ナデ、肩内一ナデ、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り	細粒	良好	橙褐色
22	S B 5	甕	—	—	—	—	ロ一横ナデ	細粒	良好	橙褐色
23	S B 5	甕	—	—	—	—	ロ一横ナデ	細粒	良好	橙色
24	S B 5	底部	—	—	(4.4)	(1.6)	胴外一ヘラ磨き	細粒	良好	灰白色
25	S B 5	底部	—	—	(4.6)	(2.0)	胴外一ヘラ磨き	普通	不良	外一明赤褐色、内一黒灰色
26	S K12	甕	—	—	—	—	ロ・頸一横ナデ	細粒	良好	灰白色
27	S K12	底部	—	—	10.0	(6.7)	胴外一ヘラ磨き、胴内一ヘラ削り後板ナデ、底外一板ナデ、底内一指頭圧痕	細粒	良好	灰白色
28	S K13	器台	—	(10.0)	(3.0)	—	胴外一ヘラ磨き、4条の沈線、胴内一ヘラ削り	普通	良好	橙褐色
29	S K14	壺	20.0	34.2	—	(26.3)	ロ一横ナデ、頸内一ハケ目、指頭圧痕、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り	粗粒		淡橙色
30	S K16	壺	(23.0)	—	—	(13.3)	ロ一横ナデ、口外一波状文、肩外一ハケ目、肩内一ヘラ削り	細粒	良好	浅黄橙色
31	S K16	甕	(16.2)	—	—	(7.0)	ロ・頸一横ナデ、胴外一ナデ、胴内一ヘラ削り	普通	良好	外一淡赤褐色、内一灰白色
32	S K16	甕	—	—	—	—	ロ一横ナデ、頸外一横ナデ、頸内一ヘラ削り	細粒	良好	暗灰茶色
33	S K17	甕	(10.0)	—	—	(2.7)	ロ・頸一横ナデ	細粒	やや不良	外一灰白色、内一黒灰色
34	S K17	底部	—	—	(5.0)	—	胴外一ヘラ磨き、胴内一ヘラ削り、底外一ナデ	細粒	良好	外一茶灰色、内一黒灰色
35	S K18	甕	14.8	19.1	—	(14.5)	ロ・頸一横ナデ、胴外一ハケ目、胴内上一ヘラ削り、胴内中一ヘラ削り後ナデ	細粒	良好	褐色～灰白色
36	S K18	甕	(13.0)	—	—	(6.3)	ロ・頸一横ナデ、胴内一ヘラ削り	細粒	やや不良	灰白色
37	S K18	甕	—	—	—	—	ロ・頸一横ナデ、胴内一ヘラ削り	普通	良好	灰白色
38	S K18	底部	—	—	(6.2)	(6.0)	胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り、底外一ナデ	細粒	良好	灰白色
39	S K21	甕	(18.0)	—	—	(9.4)	ロ・頸一横ナデ、頸内一ヘラ磨き、肩内一ヘラ削り	細粒	不良	黄灰色
40	S K21	甕	(13.0)	—	—	(5.6)	ロ・頸一横ナデ、肩外一ハケ目、肩内一ヘラ削り後ナデ	細粒	良好	茶灰色
41	S K21	甕	(14.0)	—	—	(4.3)	ロ・頸一横ナデ、肩内一ヘラ削り	細粒	不良	灰白色
42	S K21	甕	17.5~18.0	—	—	(5.3)	ロ・頸一横ナデ、胴内一ヘラ削り	普通	良好	灰白色
43	S K21	底部	—	—	5.0	(4.2)	胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り、底外一ハケ目	普通	良好	外一茶灰色、内一灰白色
44	S K21	高杯か鉢	(17.0)	—	—	(3.8)	ロ一横ナデ	細粒	良好	茶灰色
45	S K22	甕	—	—	—	—	ロ・頸一横ナデ、口外一3~4条の波状文、肩外一波状文、肩内一ヘラ削り	普通	良好	灰白色
46	S K22	鉢	(19.0)	—	—	(5.0)	ロ一横ナデ、体外一ヘラ削り、体内一ヘラ磨き	細粒	良好	茶灰色
47	S K22	器台	—	—	(18.8)	(3.6)	据外一3条の回線、据内一ヘラ削り、端一3条の回線	普通	やや不良	褐色
48	S K25	甕	—	—	—	(10.5)	ロ・頸一ナデ、肩外一3条の沈線、胴内一ナデ	普通	やや不良	淡褐色
49	S D 1	甕	(21.8)	(26.0)	—	(4.0)	ロ・頸一横ナデ、3条の回線、胴外上一ハケ目 胴外中一ハケ目後一ヘラ磨き、胴内一板ナデ	普通	良好	暗赤褐色
50	S D 1	壺	—	(16.0)	—	(12.5)	胴外上一ハケ目、胴外中一波状文、胴外下一ヘラ磨き、胴内一板ナデ	普通	良好	外一淡褐色、内一淡灰褐色
51	S D 1	甕	(17.0)	—	—	—	ロ・頸一横ナデ、胴外一横ナデ、胴内一ハケ目	普通	良好	茶褐色
52	S D 1	底部	—	—	5.2~5.4	6.9	胴外一ヘラ磨き状の板ナデ、胴内一板ナデ、底外一ナデ、底内一ヘラ削り後ナデ	細粒	良好	外一橙褐色、内一灰色
53	S D 1	底部	—	—	(3.9)	(6.1)	胴外一ヘラ磨き状の板ナデ	細粒	良好	褐色
54	S D 1	底部	—	—	(8.2)	(4.6)	調整不明	細粒	良好	暗灰(褐)色
55	S D 1	高杯か鉢	(15.8)	—	—	(3.2)	口外一5条の回線、口端一2条の回線、口内一横ナデ	普通	良好	外一黄白色、内一橙色
56	S D 2	甕	(18.8)	—	—	(4.3)	ロ・頸一横ナデ、口端一2条の回線、肩外一横ナデ	細粒	良好	淡褐色
57	S X 1	甕	(11.0)	—	—	(5.5)	ロ・頸一横ナデ、肩内一ヘラ削り	細粒	良好	茶灰色
58	S X 1	甕	(10.0)	—	—	(2.9)	ロ・頸一横ナデ	細粒	やや不良	暗灰色
59	S X 2	長頸壺	(13.2)	—	—	(5.6)	ロ・頸一横ナデ、口外一3条の振回線、頸外一ハケ目後凹線、頸内一指頭圧痕	細粒	良好	灰黄色
60	S X 2	ミニチュア	(7.4)	—	—	(4.9)	ロ・頸一横ナデ、体外一ナデ、体内一ヘラ削り	細粒	やや不良	灰白色
61	P 3	壺	—	—	—	—	胴外一横ナデ、粘土紐の貼り付け、赤色顔料	精微	良好	外一灰白色、内一灰黑色
62	P 4	甕	—	—	—	—	ロ・頸一横ナデ	細粒	良好	淡褐色

第3表 出土遺物観察表3

遺物番号	遺構番号	器種	法量(cm)(復元値/残存高)				手法の特徴	胎土	焼成	色調
			口径	最大径	底径	器高				
63	P 1	手捏	4.3~4.6	-	-	2.3~3.1	外・内一指頭圧痕	普通	良好	灰白色
64	P 2	壺	(13.4)	-	-	(9.5)	口・頸一横ナデ、口外一先の丸い物による刺突文、頸外一刺突文、頭内一ナデ、ヘラ削り	普通	不良	灰白色
65	P 5	須恵器杯蓋	(12.2)	-	-	(3.2)	天外一回転ヘラ削り、ローロクロナデ	細粒	やや不良	外一青灰色、内一灰白色
66	SK 26	土鍋	28.5~28.7	-	-	14.1	ローナデ、体外一ハケ目、体内一ハケ目	細粒	良好	淡茶褐色
67	SK 26	土師質皿(灯明皿)	7.6~8.0	-	5.4~5.8	1.2~1.5	体一回転ナデ、底外一回転ヘラ切り	細粒	良好	橙褐色
68	SK 26	土師質皿(灯明皿)	8.3~8.5	-	4.5	1.7	体一回転ナデ、底外一回転ヘラ切り	細粒	良好	橙褐色
69	SK 26	土師質皿(灯明皿)	14.4	-	8.0	3.0	体一回転ナデ、底外一回転ヘラ切り	細粒	良好	淡橙褐色
70	SK 26	土師質皿	13.8~	-	7.0	2.9~3.1	体一回転ナデ、底外一回転ヘラ切り	細粒	良好	淡橙褐色
71	SK 26	土師質皿	14.4	-	8.3	3.1	体一回転ナデ、底外一回転ヘラ切り	細粒	良好	淡橙褐色
72	A地区	長頸壺	13.0	-	-	(5.2)	ロー横ナデ、口端一1条の回線、竹管文、頸外一3条の凹線、頭内一指頭ナデ	普通	やや不良	淡橙色
73	A地区	長頸壺	-	-	-	-	頭外一ハケ目、7条以上の回線、頭内一指頭ナデ	細粒	やや不良	外一橙色、内一灰白色
74	A地区	長頸壺	-	-	-	-	ロー横ナデ、口外一赤色顔料	細粒	良好	橙色
75	A地区	壺	-	-	-	(7.6)	口外一指頭圧痕、口内一粗いハケ目、胸内一指頭圧痕	普通	良好	灰褐色
76	A地区	壺	-	-	-	-	口外一5条の擬回線、竹管文、頭一横ナデ	普通	良好	茶褐色
77	A地区	短頸壺	(8.2)	-	-	(11.0)	口・頭一横ナデ、頭内一指頭ナデ、肩外一差込による把手、胴外一ハケ目、胴内一ヘラ削り	普通	やや不良	外一灰白色~淡橙色、内一灰白色
78	A地区	壺	(16.6)	-	-	(3.7)	口・頭一横ナデ、口外一浅い沈線	細粒	良好	淡茶灰色
79	A地区	壺	-	-	-	-	ロー横ナデ、頭内一ヘラ削り	細粒	良好	灰茶色~灰白色
80	A地区	壺	-	-	-	-	ロー横ナデ	普通	良好	灰白色
81	A地区	壺	-	-	-	-	ロー横ナデ	細粒	良好	暗褐色
82	A地区	底部	-	-	5.0	(3.3)	胴外一ヘラ磨き、胴内一ヘラ磨き	普通	良好	淡灰黒色
83	B地区	底部	-	-	5.6	(7.0)	胴一板状工具による磨き、底内一ヘラ削り	細粒	良好	明褐色
84	A地区	高杯	-	-	6.1	(4.5)	体外一ハケ目、脚外一ナデ、脚内一ヘラ削り、外一内一赤色顔料	細粒	良好	明褐色
85	A地区	高杯	(22.0~25.0)	-	-	(5.0)	ロー横ナデ、外一内一赤色顔料	細粒	良好	橙色
86	A地区	鼓形器台	-	-	-	-	脚外一横ナデ、脚内一ヘラ削り	細粒	良好	茶褐色
87	A地区	鼓形器台	-	-	-	-	脚外一横ナデ、一部に赤色顔料、脚内一ヘラ削り	細粒	良好	茶灰色
88	A地区	ミニチュア	4.0	-	-	4.2	体外一指頭ナデ、体内一指頭圧痕	普通	やや不良	灰白色~灰黒色
89	A地区	高杯	-	-	(12.0)	(2.9)	脚外一ナデ、下端に4条の擬回線、脚内一ヘラ削り	普通	良好	暗灰白色
90	A地区	高杯	-	-	-	-	脚外一横ナデ、9条の回線文、竹管文、脚内一ヘラ削り	細粒	良好	灰白色
91	B地区	須恵器杯身	(13.6)	-	-	(3.6)	天・ロー回転ナデ、底外一ヘラ削り	細粒	良好	青灰色
92	A地区	須恵器杯身	-	-	(9.0)	(2.0)	体一回転ナデ	細粒	良好	淡青灰色
93	A地区	土師質皿	7.8	-	6.3	(1.0~1.4)	体一回転ナデ、底外一回転糸切り	普通	良好	淡橙褐色
94	A地区	土師質皿	7.4	-	4.2	(2.1~2.3)	体一回転ナデ、底外一回転糸切り	細粒	良好	淡橙褐色
95	A地区	土鍋	(29.9)	-	(12.7)	(11.8)	口外一ナデ、口内一ハケ目、体外上一指頭圧痕、体外下一ハケ目、体外一全面に煤、体内一ハケ目	細粒	良好	赤褐色

第4表 出土遺物観察表4

遺物番号	遺構番号	種別	法量(最大値/cm. g)				材質
			長さ	幅	厚・高さ	重量	
96	SB 1	台石	51.4	32.4	9.0	25.1kg	流紋岩質凝灰岩
97	SB 2	砥石	11.3	12.2	6.9	15.6kg	細粒半花崗岩
98	SB 1	砥石	4.6	2.5	2.1	52.9	凝灰岩
99	SB 1	砥石	8.9	2.4	1.2	46.5	珪長岩
100	SB 2	砥石	7.4	3.5	2.6	133.3	珪長岩
101	SB 1	砥石	8.6	3.8	1.9	117.9	凝灰質砂岩
102	SB 3	砥石	9.8	2.6	1.0	49.7	珪長岩
103	SB 1	砥石	9.9	9.2	8.3	683.7	細粒黒雲母花崗岩
104	SB 1	砥石	8.5	12.5	6.9	1.2kg	流紋岩質凝灰岩
105	SB 2	砥石	16.7	6.2	8.9	1.8kg	-
106	A地区	磨製石斧	12.4	6.2	4.1	477.1	流紋岩質凝灰岩
107	SD 1	石錐?	5.7	4.3	-	173.2	凝灰岩(輝緑凝灰岩?)、幅はくびれ部の数値
108	SB 1	石砲丁	2.5	4.0	0.4	5.7	珪質凝灰岩
109	A地区	石鍛	2.7	1.9	0.5	2.5	珪質凝灰岩
110	SB 2	土錐	3.0	2.7	-	19.4	孔径は、0.4~0.8cm
111	SB 1	土製勾玉	4.7	-	1.4	11.8	-

V まとめ

今回の発掘調査の結果、確認した遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑26基、溝状遺構2条、性格不明の遺構2基、柱穴跡多数である。これらの遺構中からは、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、石製品が出土し、包含層からも同様な遺物が出土している。ここでは、調査によって得られた成果について整理を行いまとめたい。

1 出土した遺物と遺構の変遷について

本遺跡の遺構から出土した遺物で最も古いと考えられるのは、SK25出土の甕である。口縁部が逆「L」字状であること、頸部以下に沈線を施していることから、弥生時代中期でも前半頃と思われる。次いでSD1から出土している50・51の器表面調整と形態、55の高杯杯部か鉢の口縁部が拡張し外面に凹線文がみられることから中期後半頃と思われる。その他、後期の範疇に収まるものとしては、SB4壁溝内から出した19と、SB5の20の高杯杯部か鉢の口縁部に面をもつ形態は、後期中頃には消滅することと、甕21～23は、口縁部を上下に拡張し、内傾していることからSB4・5は後期前半頃と思われる。SK14の壺29、SD2の甕56も同様であろう。他の遺物は、山陰系の二重口縁甕・山陰型甑形土器・鼓形土器など外来の影響を強く受けたものと、備後南部いわゆる在地の土器に分かれ、後期後半と思われる。弥生時代後期後半の土器の編年は、県内において資料が増えつつあるが整理するに至っていない。この為、当該期に山陰系土器がまとまって出土する県北部の三次・庄原市域では、山陰での研究成果を参考にして時期区分を行っている。しかし、当地域では資料的な制約があり、細分は困難である。備後南部域の資料も多いとは言えないが、近年、尾道市御調町曾川1号遺跡の調査で良好な資料が出土し、従来の備後V-3期の土器を3段階に区分している。⁽²⁾ 本遺跡で後期後半に該当する土器が出土しているSB1・2、SK12・16～18、22は、ここでいうV-3以降の時期の範疇に該当している。従って、本遺跡で遺物が出土した遺構中、明確に対応できるものは、SK5（中期前半）→SD1（中期後半）→SB4・5、SK14、SD2（後期前半）→SB2（庄内式並行期）→SB1・SK12・16・18、21・22（庄内式並行期）の順と新しくなる。SB1・2で重複関係がみられるが、土器においては庄内式並行期の古、新の差とみれるかどうかは不明である。

SK6の皿は草戸千軒町遺跡での分類で法量から67・68が皿A I、69～71が皿A III、66は土鍋Bに類似しており、概ね草戸編年のIII期からIV期前半頃（15世紀中～後半）に求めることができよう。

2 土坑について

SK25、26以外の土坑の内、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の遺物が出土しているのはSK14とSK12・16・18、21・22である。参考までに、これらの土坑の長軸方向を基準にして、おおまかにグループ分けを行うと①SK14・17・20・23と②SK5・13・16・19・21・24と③SK11・

12・18・22とその他④SK4・7～10・15の4つとなる。①の時期は後期前半、②・③が弥生時代終末～古墳時代初頭で、住居跡との時期的な対応関係はSB4・5と①、SB1・2と②・③となる。④は重複関係のないSK15を除き、SK4はSB3より新しい、SK7はSB1より古い、SK8・9はSB1より古い、SB10はSB2より新しくなるが、①と②・③との関係は不明である。

土坑の性格については、長方形であるといった形状と底面までの深さが浅いことから、墓壙の可能性も考えられるが、底面と土層の観察では木棺痕跡がみられなかったことと、墓壙とすると住居地と近接していることから貯蔵穴とも考えられる。いずれにしても、詳細は不明である。

SK26は掘方内部に土師質の皿を5枚重ね、土師質の土鍋をうつ伏せにした状態で確認した。性格については類例がみられないため⁽³⁾不明であるが、日常的な使用法ではないことから祭祀的な要素が強いと考えられる。

3 山陰型甑形土器について

甑形土器は大型で底のない器体に、一对または二対の半環状把手がつけられた器形をしたものである。山陰地域から多く出土していることから、山陰型の甑形土器、山陰型甑形土器と呼称されている。本遺跡から出土した把手の部分は、二対の半環状把手が狭口部を縦、広口部を横につけられたものである。⁽⁴⁾県内での出土例は表5のとおり、県北部と広島市に多く出土している。県北部は、山陰での出土例と同一の形態で、広島市域での出土例は、形態的に大型であることと、甑形としての共通点はあるものの、形状が県北部出土例は広口部から狭口部までが直線的であるに対し、広島市域での出土例は、広口部から直ぐに狭まり、狭口部まで煙突状となっている。また、把手がつかないものが大半を占めており、山陰系の土器もほとんど含まれていないことなど、形状や器種構成が違う。本遺跡から出土したものは、県北部出土例と似ている。この土器の性格については、諸説あり定かではない。ただ、大型であることと重量があること、甑とするには対応する遺物がないことから、日常的に使用したとは考えにくい。また、この時期に属する全ての住居跡から出土していないことから、特定の人物、或いは集団が持ち得た土器である可能性は高い。本遺跡の出土状況からも性格を推定できる状況ではないが、縦方向に半分に割れ、広口部を接するように対峙した状況は、少なくとも、住居廃棄に伴って意図的に置いたものではないかと考えられる。⁽⁵⁾本郷地区の土居丸遺跡でも、住居跡の柱穴内から出土していることから、本遺跡例と同じく、住居廃棄に伴って意図的に置いていかれたものではないかと考えられる。今後、この土器の性格については出土する遺構の性格も含めて、詳細な検討を加えていく必要があるであろう。迫田山遺跡の調査から今回の報告までに、本遺跡を含めて6遺跡19例が増えている。これらの遺跡はいずれも、県北出土例と同様の形態で山陰系土器も含まれている。県北域（主に三次市・庄原市域）では、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器は、山陰で出土する土器とほぼ同様の形態と器種構成で、在地の土器がみられない出雲南部地域と同様である。6遺跡の中でも府中市ツジ遺跡、尾道市御調町曾川1号遺跡、⁽⁶⁾広島市安佐北区可部町トンガ坊城遺跡の例は、比率

第5表 山陰型瓶形土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	点数	出土遺構
1	追田山遺跡	庄原市川西町	1	住居跡
2	布掛遺跡	庄原市川西町	6	住居跡
3	妙見山遺跡	庄原市東本町	1	住居跡
4	永宗遺跡	庄原市新庄町	1	住居跡
5	和田原D地点遺跡	庄原市新庄町	3	住居跡・土坑
6	尾崎遺跡	庄原市峰田町	4	住居跡
7	土森遺跡	三次市三良坂町	1	住居跡
8	油免遺跡	三次市三良坂町	1	住居跡
9	原田遺跡	三次市井河町	1	住居跡
10	出土地不明	三次市内	1	
11	向原遺跡	安芸高田市高宮町	1	住居跡
12	寸志名遺跡	安芸高田市高宮町	1	住居跡
13	明官地廐寺跡	安芸高田市吉田町	1	整地面
14	焼け遺跡	山県郡北広島町	2	住居跡・包含層
15	中屋遺跡B地点	東広島市豊栄町	3	住居跡
16	鳥井木遺跡	世羅郡世羅町	1	包含層
17	土居丸遺跡	世羅郡世羅町	1	住居跡内土坑
18	近森遺跡	世羅郡世羅町	2	住居跡

番号	遺跡名	所在地	点数	出土遺構
19	龍王山2号遺跡	世羅郡世羅町	1	土坑
20	曾川1号遺跡(G地区)	尾道市御調町	2	土坑
21	府中市市街地	府中市元町	1	包含層
22	ツジ遺跡	府中市元町	3	包含層
23	トンガ坊遺跡	広島市安佐北区可部町	5	住居跡
24	上深川北遺跡	広島市安佐北区上深川町	1	住居跡内土坑
25	城前遺跡	広島市安佐北区落合南	4	住居跡・貯藏穴
26	毘沙門台遺跡	広島市安佐南区毘沙門台東	2	住居跡・不明
27	鶴之追遺跡	広島市安佐南区安東	2	住居跡・包含層
28	大町七九谷B地点遺跡	広島市安佐南区大町	2	住居跡
29	長う子遺跡	広島市安佐南区祇園町	1	住居跡
30	芳ヶ谷遺跡	広島市安佐南区祇園町	1	住居跡
31	串山城遺跡	広島市佐伯区五日市町	1	住居跡
32	黒谷遺跡	広島市佐伯区五日市町	1	住居跡
33	平尾遺跡	広島市佐伯区五日市町	2	包含層
34	小林A地点遺跡	広島市佐伯区五日市町	1	住居跡
35	白堀遺跡	広島市佐伯区五日市町	1	包含層

計63点

文献

- 1 広島県庄原土木事務所「財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『追田山遺跡発発掘調査報告書』」2001年
- 2 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『地域高規格道路江府三次道路(一般国道183号)道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(2)布掛遺跡・大仙1号遺跡・大仙2号遺跡発掘調査報告書』2003年
財団法人広島県教育事業団『布掛遺跡・大植神遺跡 一般国道183号(高道路)に係る発掘調査報告』2007年
- 3 庄原市教育委員会『妙見山遺跡』1999年
- 4 広島県教育委員会 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『西山・小和田・水宗』1982年
- 5 順易保証福井事業団・庄原市教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原D地点遺跡発掘報告書』1999年
- 6 庄原市教育委員会『県営ほ場整備事業(本田地区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1997年
- 7 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(VII) -土森遺跡の調査-』2003年
- 8 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(IV) -油免遺跡の調査-』2003年
- 9 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『原田遺跡』1998年
- 10 桑原隆博『三次市内出土の所謂「山陰型の瓶形土器」について』『芸術第10集』芸術友の会 1980年
- 11 高宮町教育委員会『向原遺跡』1989年
- 12 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)』1979年
- 13 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『明官地廐寺跡-第4次調査概報』1990年
- 14 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『本郷遺跡・焼け遺跡』1990年
- 15 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『中屋遺跡B地点発掘調査報告Ⅱ』1999年
- 16 世羅町教育委員会『鳥井木遺跡』1998年
- 17 世羅町教育委員会『土居丸遺跡』1994年
- 18 本報告書
- 19 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山2号遺跡』1997年
- 20 財團法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5)曾川1号遺跡(G~J地区)』2006年
- 21 府中市教育委員会『府中市内遺跡4』1994年
- 22 府中市教育委員会『府中市内遺跡9』2005年
- 23 財團法人広島市文化財団文化科学部文化財課「第27回青空ミュージアムinトンガ坊城遺跡」2007年 *現地見学会資料
- 24 財團法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』1991年
- 25 未報告(1979年 調査団調査) 関山理科大学所蔵龟田修一氏の御教示による。1979年
- 26 未報告(1982年 調査団調査) 広島市教育委員会所蔵 高下洋一氏の御教示による。1982年
- 27 財團法人広島市文化財団『鶴之追遺跡-広島市安佐南区所在-』20001年
- 28 財團法人広島市文化財団『大町七九谷遺跡群』1999年
- 29 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡発掘調査報告』1984年
- 30 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡発掘調査報告』1984年
- 31 財團法人広島市歴史科学教育事業団『串山城遺跡発掘調査報告』1995年
- 32 財團法人広島市歴史科学教育事業団『黒谷遺跡発掘調査報告』1995年
- 33 財團法人広島市歴史科学教育事業団『平尾遺跡発掘調査報告』1994年
- 34 広島市教育委員会『小林A・B地点遺跡発掘調査報告』1990年
- 35 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『月見城遺跡』1987年

的には在地の土器が多いが山陰系土器も含まれている。特にトンガ坊城遺跡は、別形態の甑形土器の分布する地域での調査例となっている。こうした状況は、山陰地域の影響を強く受け、当時の複雑な社会情勢をあらわしていると思われる。

今回の調査で近森遺跡は、弥生時代中期前半に集落が営まれ始め、後期前半から終末期～古墳時代初頭にいたるまで営まれていたことが明らかになった。最盛期と思われる終末期～古墳時代初頭の時期は、時代の変わり目という大きな変革期で、各地で山陰系・畿内系・吉備系などの土器が出土しつつ、やがては統一化された文化様式が全国規模で展開・波及する時期にあたる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭の時期にあたる遺跡の調査例が増える中で、今回の調査成果は、この時期の一端を窺わせ、当地域の歴史を考える上で貴重な資料になると考えられる。

註

- (1) 伊藤実「備後地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 正岡陸夫・松本岩雄編 木耳社 1992年
弥生土器の編年については、本資料を参考にしている。
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2)曾川1号遺跡(A～D地区)』2006年
ここで筆者の伊藤実氏は、註1でいうところのV-3期に該当する資料をもとに、後期後半を新たに、V-3期一庄内式(古)並行期一庄内式(新)並行期の3段階に細分している。V-3期と庄内式並行期との区分は山陰系土器の有無を基準にしている。本文中では、庄内式並行期を弥生時代終末期として記述しているが、庄内並行期を古式土師器とする研究成果もあり、ここでは弥生時代終末～古墳時代初頭とする。
- (3) 建設省岡山国道工事事務所 笠岡市教育委員会『山陽自動車道建設に伴う本谷遺跡』1987年
本谷B遺跡第2調査区で、近森遺跡と同様に土師質皿を重ねて土鍋の口縁部を下にして重ねた状態で確認されている。土鍋は完全に伏せた状態ではなく、本来は、椀・皿に土鍋を立てかけていたものが転倒して、重ねた状態となつたと推定されている。ここでは、出土地点が集落の縁辺部であること、谷に流れ込む斜面に立地していること、谷の小川がこの近辺で利用できる数少ない用水路であることから、水に関係のある祭祀遺構と考えられている。近森遺跡とは立地の違い、土坑内からの出土であることから、本谷遺跡のように水に関する祭祀遺構とは性格を異なるものであろう。
- (4) 広島県庄原土木事務所 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『迫田山遺跡発掘調査報告書』2001
本文中で、山陰型甑形土器の集成がされている。表4はこの集成をもとに、最近、発見された資料を追加したものである。また、山陰型甑形土器の使用法についての研究史とベッド状遺構を有する住居跡の集成と検討が行われている。
- (5) 世羅町教育委員会『土居丸遺跡1』1994年
- (6) 註(4)と同じ
- (7) 府中市教育委員会『府中市内遺跡9』2005年
- (8) 註(3)と同じ
- (9) 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課「第27回青空ミュージアムinトンガ坊城遺跡」2007年
*遺跡見学会資料 調査担当者である榎木啓太氏にご教示を得た。



a 遠景 北東から



b A地区調査前
西から



c B地区調査前
南西から



a A地区完掘状況
西から



b A地区完掘状況
北東から



c No.2 トレンチ土層
東から





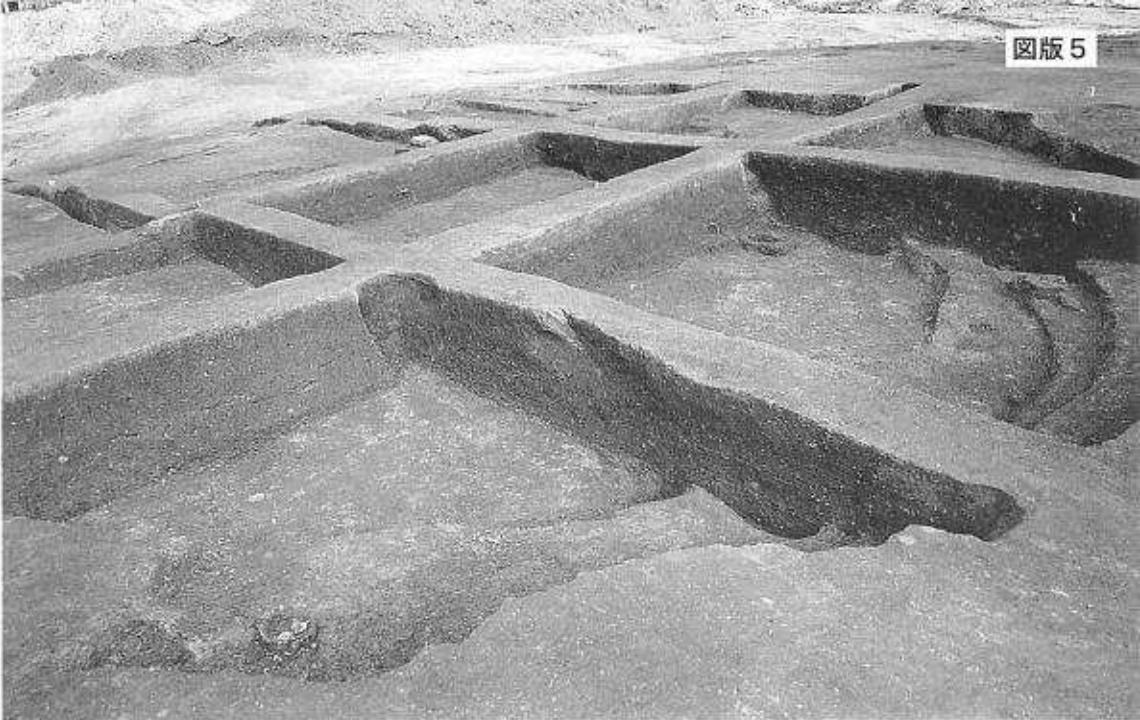
a B地区完掘状況
(東半) 西から



b B地区完掘状況
(西半) 東から



c 調査区全景
(空中写真)
西から



a SB 1 土層断面
西から



b A-A' 土層断面
西から



c B-B' 土層断面
西から



a SB 1～4 完掘状況
北東から



b SB 1～4 完掘状況
南東から



c SB 1 遺物出土状況
東から



a SB 1 遺物出土状況
南西から



b 遺物 (1・3) 出土
状況 北から



c 砥石(102)出土状況
左 北から



d SK 1 土層
右 北から



a SB5 土層断面
北東から



b SK4 完掘状況
北東から



c SK5 完掘状況
北東から



a SK 6・7 完掘状況
東から



b SK 8 完掘状況
東から



c SK 10 完掘状況
北から

a SK11完掘状況
北西から



b SK12土層断面
南東から



c SK12完掘状況
南西から



a SK13・SD1土層
断面 南東から



b SK13・SD1完掘
状況 南西から



c SK14遺物出土状況
北から



a SK14完掘状況
西から



b SK15完掘状況
北から



c SK16遺物出土状況
北西から



a SK11～16完掘状況
西から

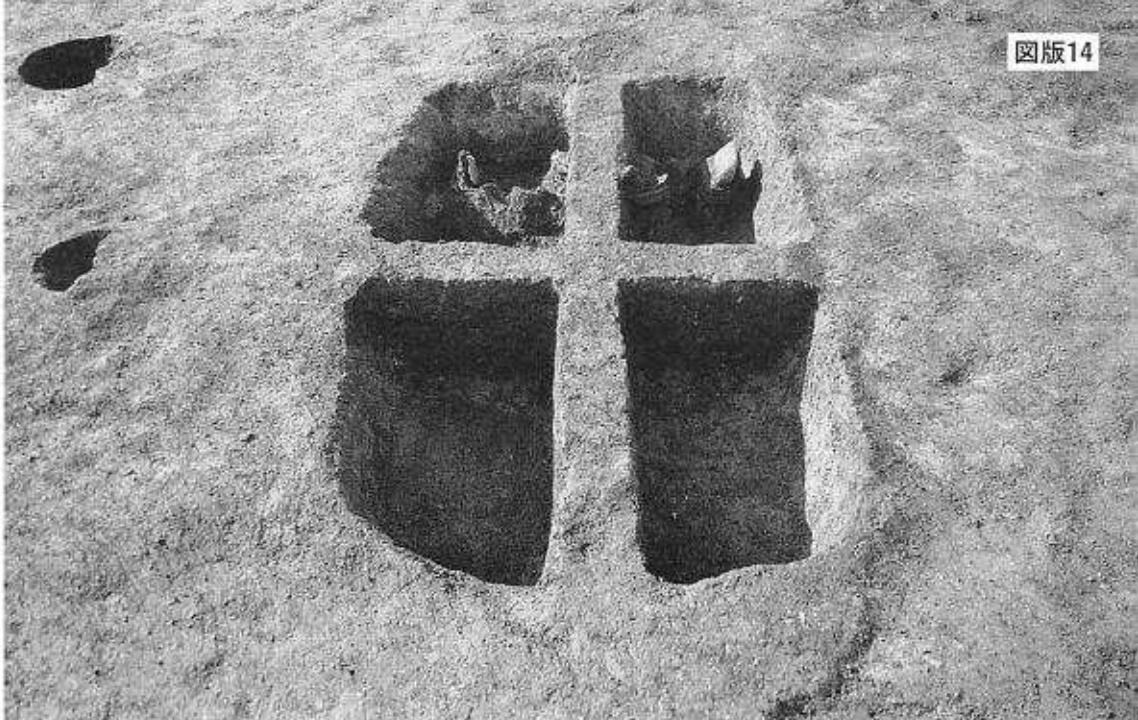


b SK17遺物出土状況
北から

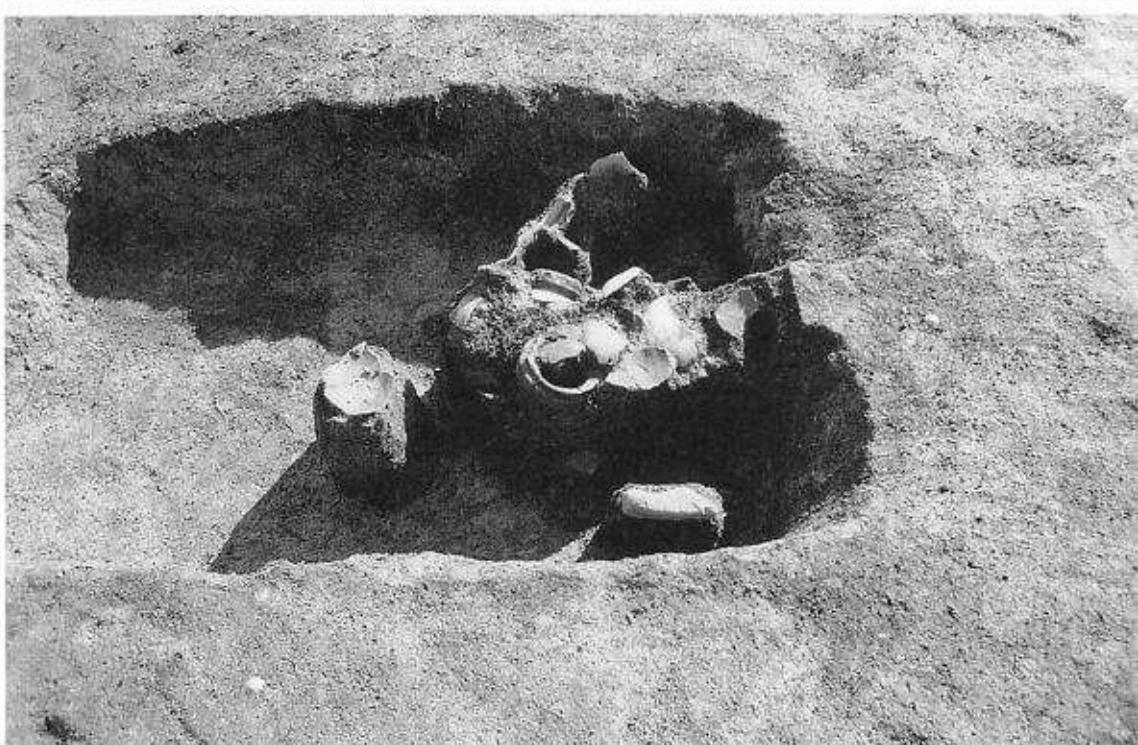


c SK17完掘状況
北から





a SK18土層断面
東から



b SK18遺物出土状況
北から



c SK18完掘状況
東から

a SK19~21土層断面
東から



b SK19・20完掘状況
北から



c SK21遺物出土状況
南東から



a SK21完掘状況
北西から



b SK22完掘状況
南西から

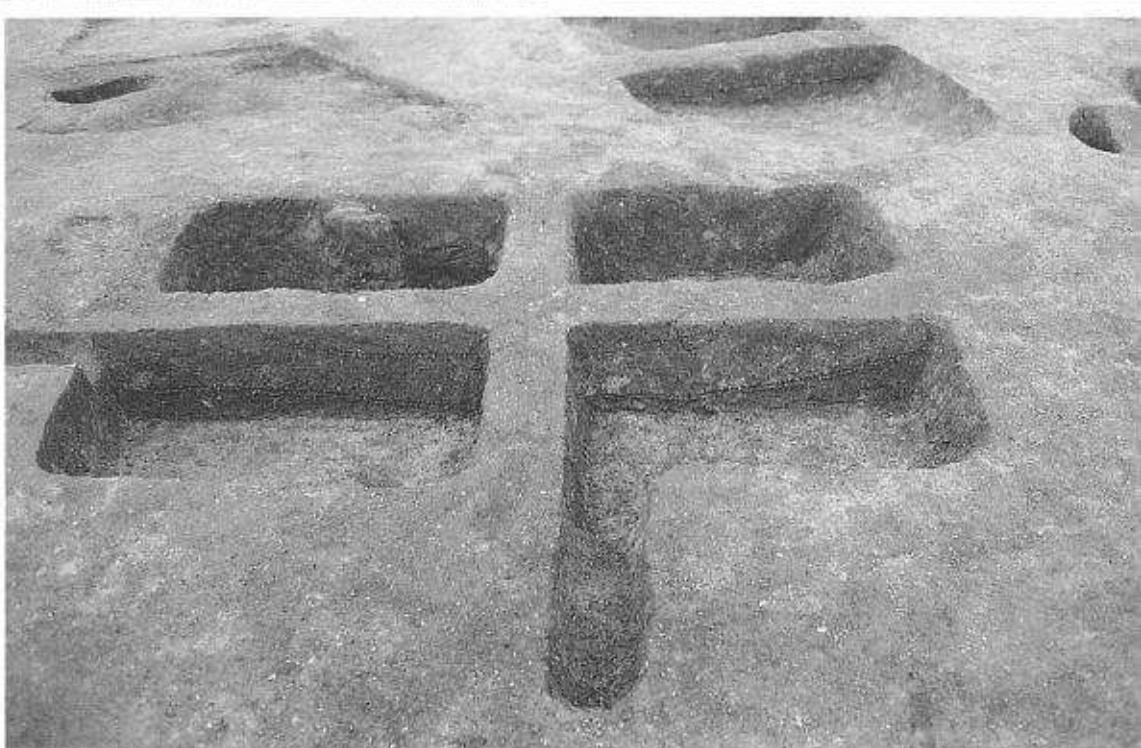


c SK22・23土層断面
北から





a SK22・23完掘状況
北西から



b SK24土層断面
北東から



c SK24完掘状況
南東から

a SK19~24完掘状況
南東から



b SK25土層断面
南西から



c SK25完掘状況
SK26遺物出土状況
北東から



a P 1 遺物出土状況
左 北東から



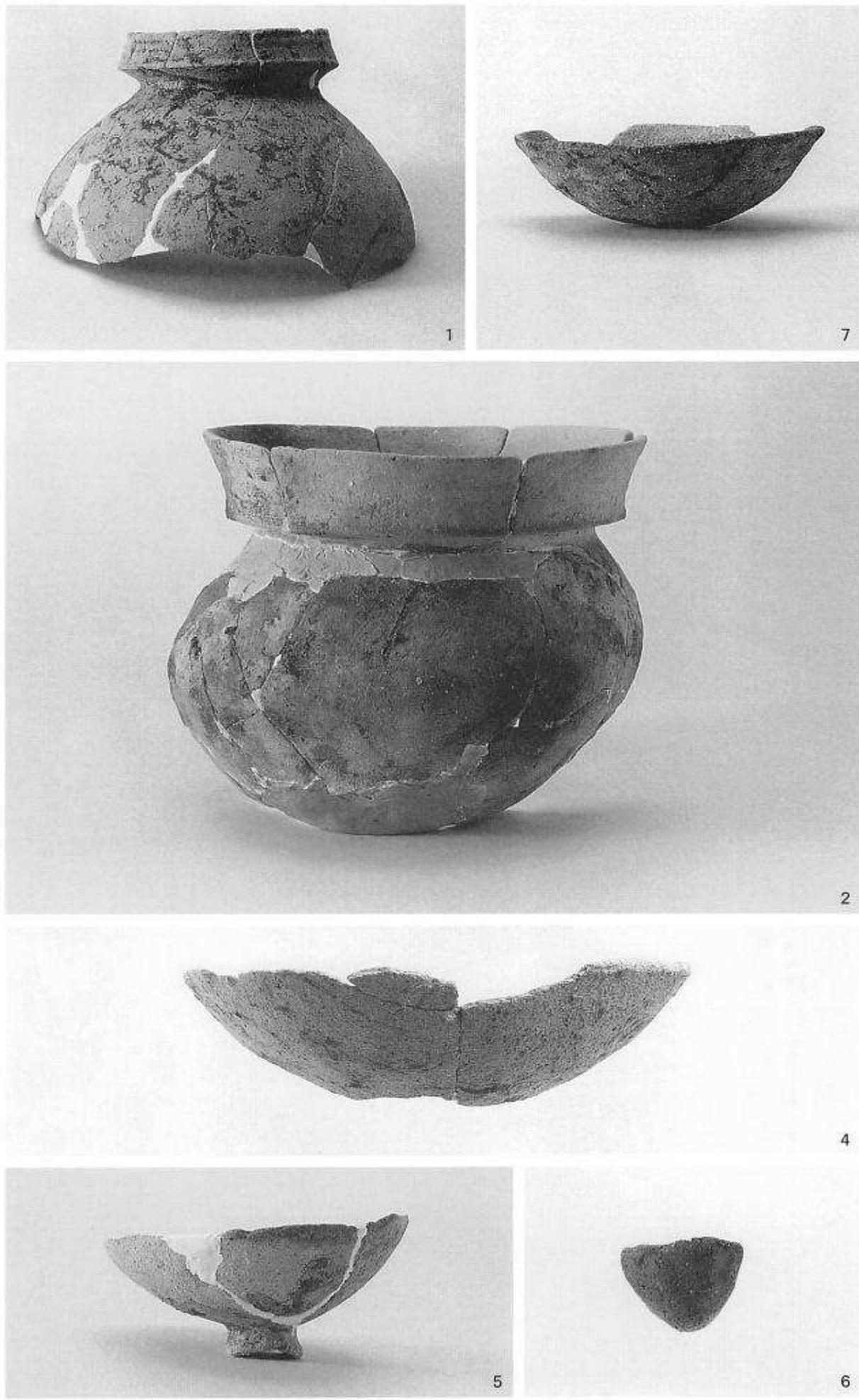
b P 2 遺物出土状況
右 南西から



c SD 1・2 完掘状況
北西から



d SX 2 土層断面
南西から



S B 1 出土土器 I

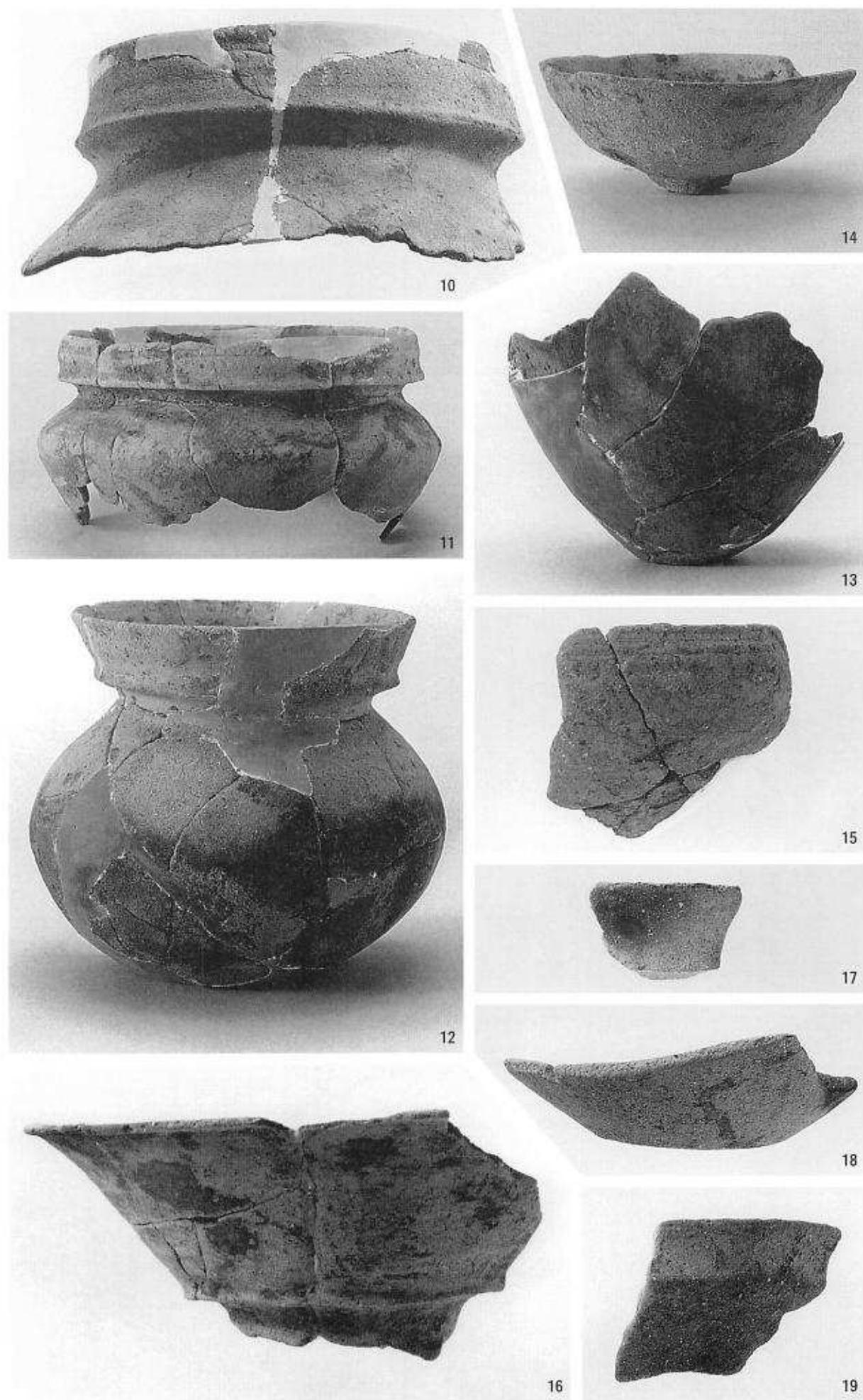


8

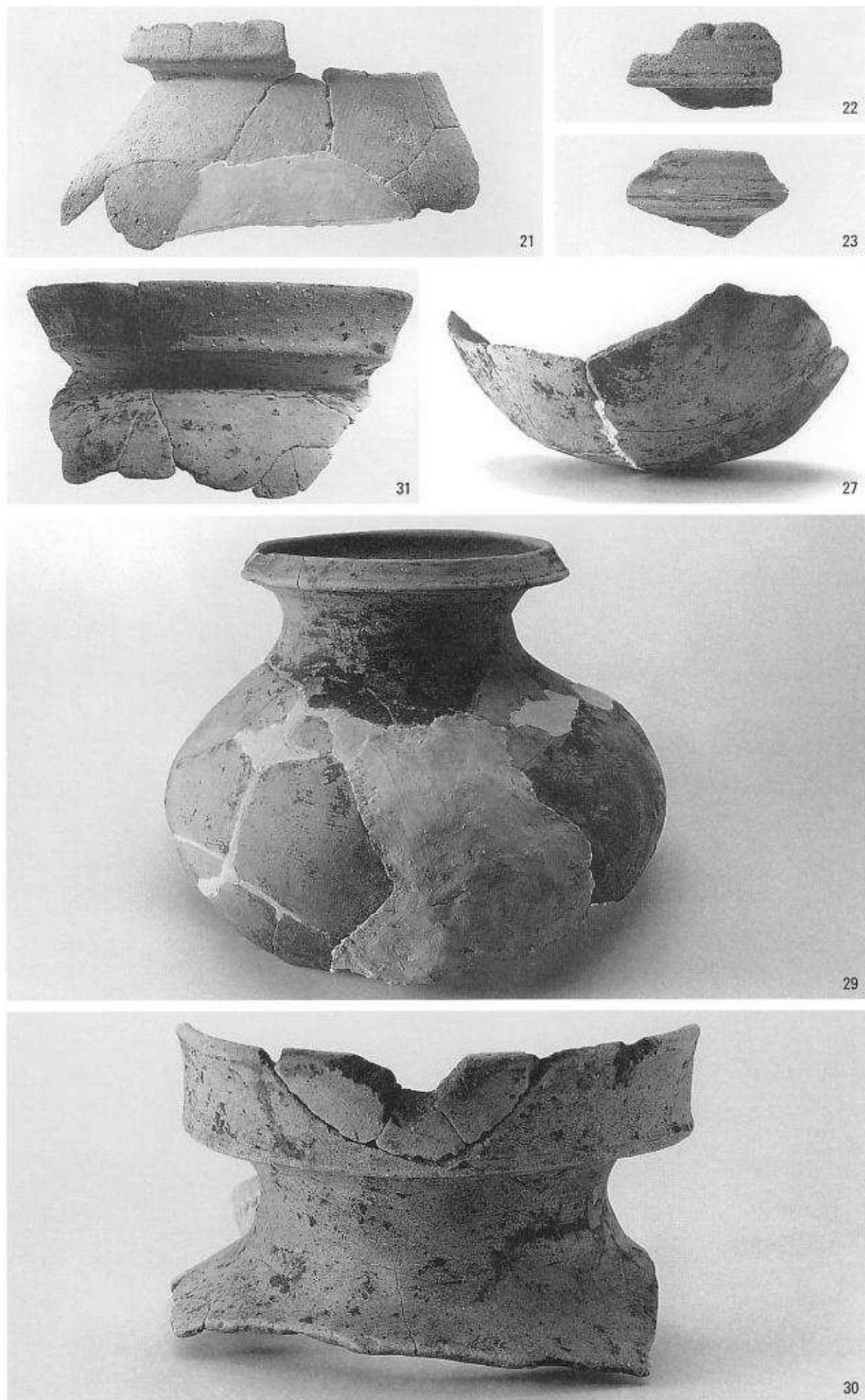


9

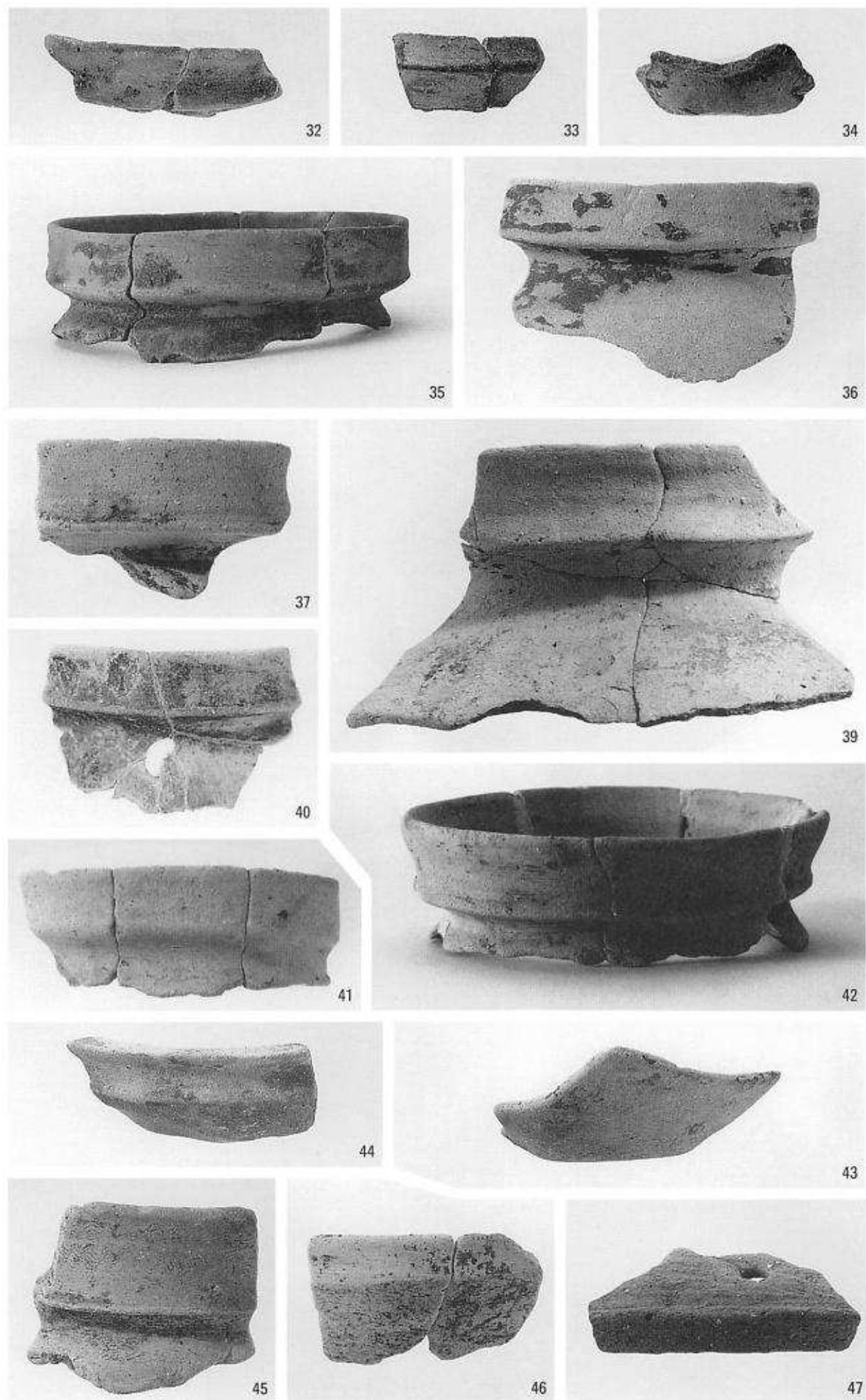
S B 1 出土土器Ⅱ



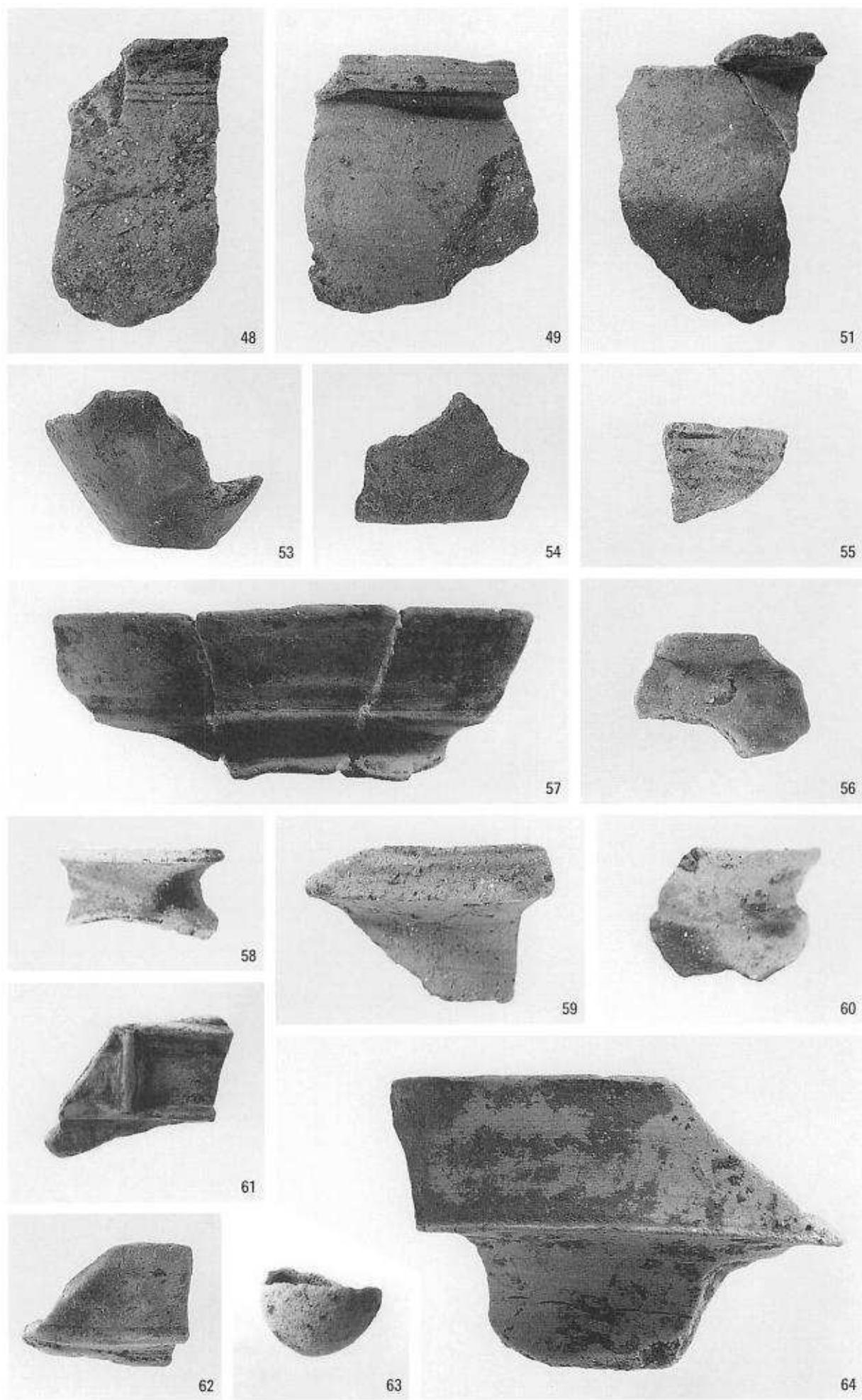
S B 2・4・5出土土器



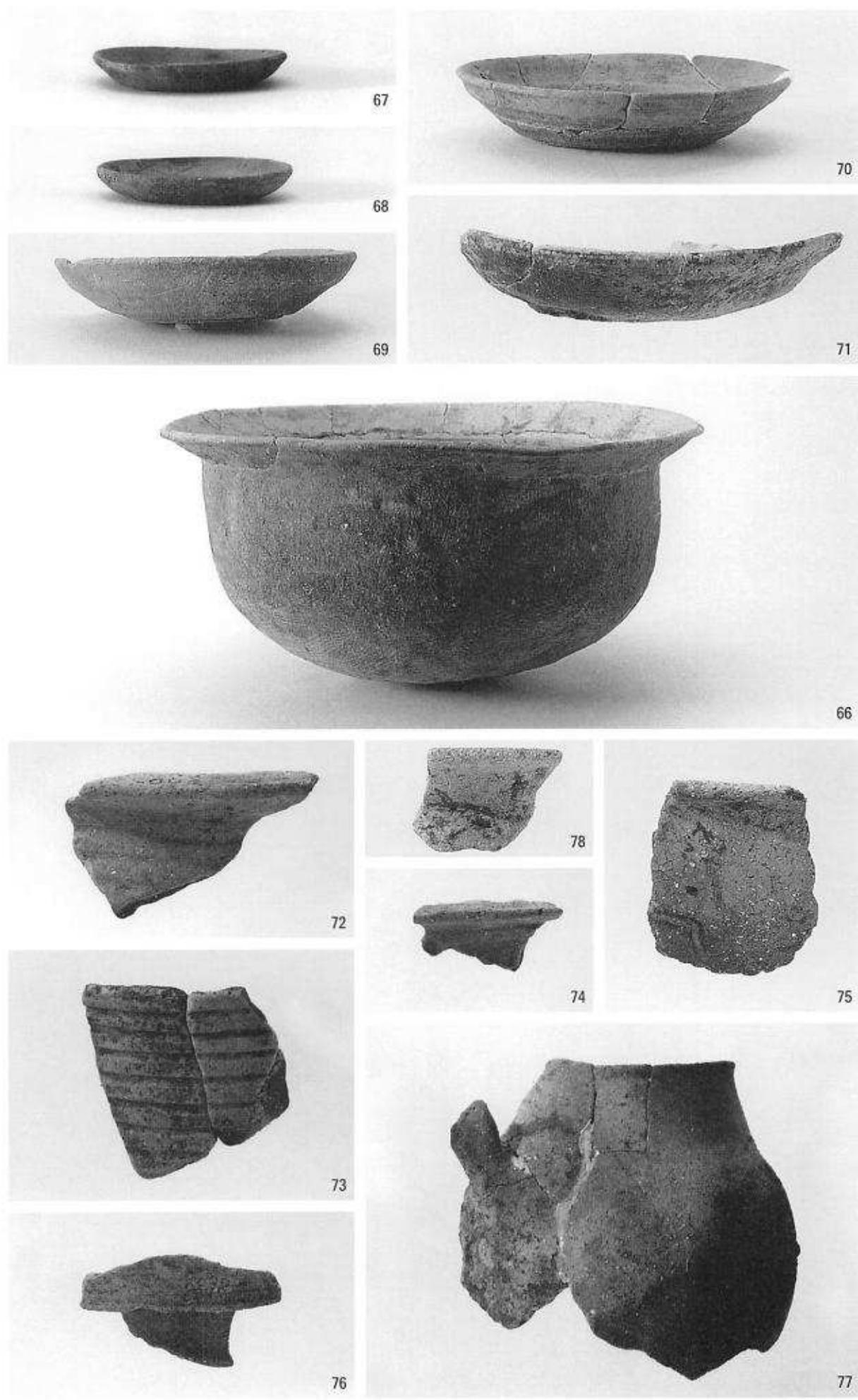
S B 5, SK12・14・16出土土器



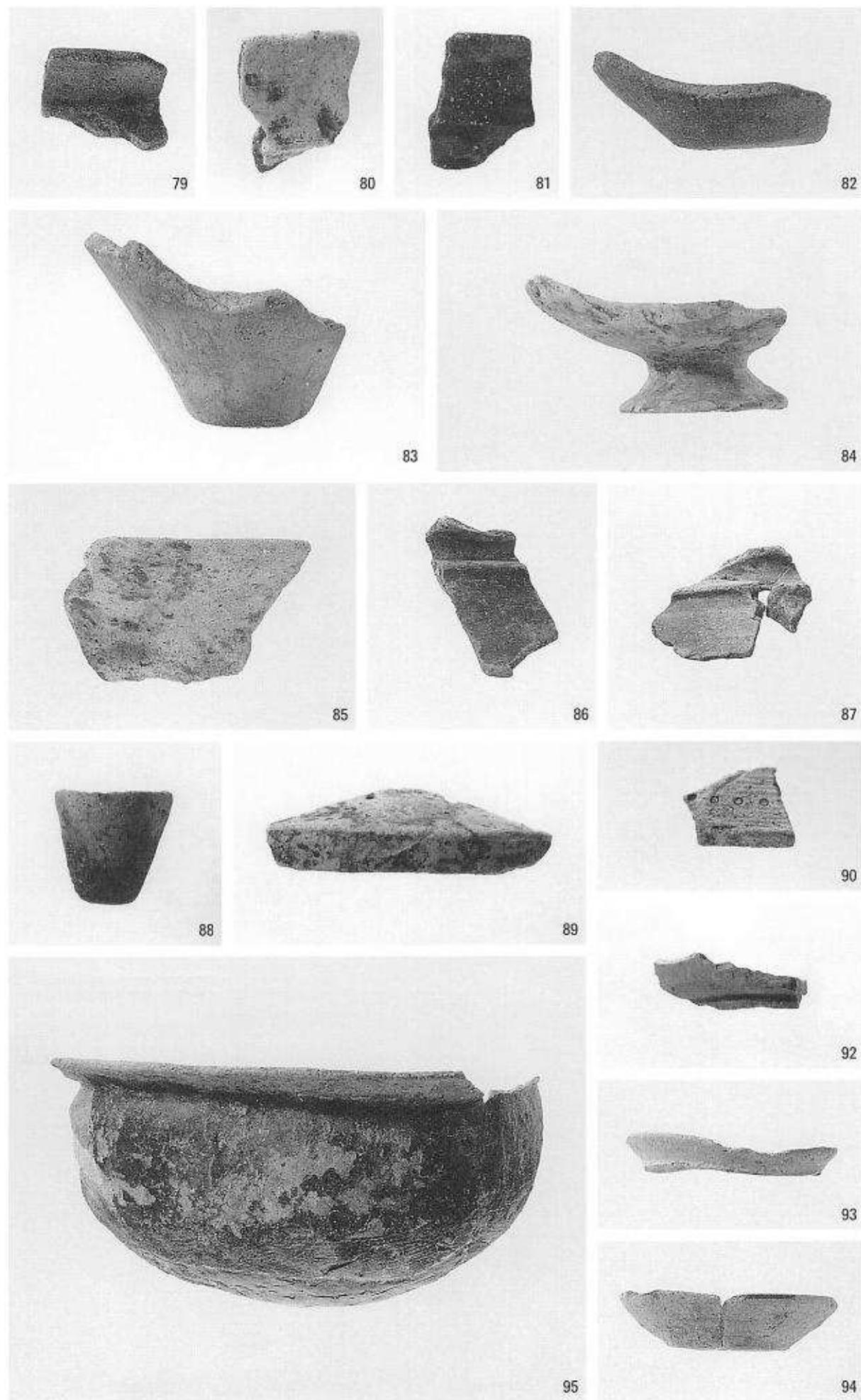
SK 16~18・21・22出土土器



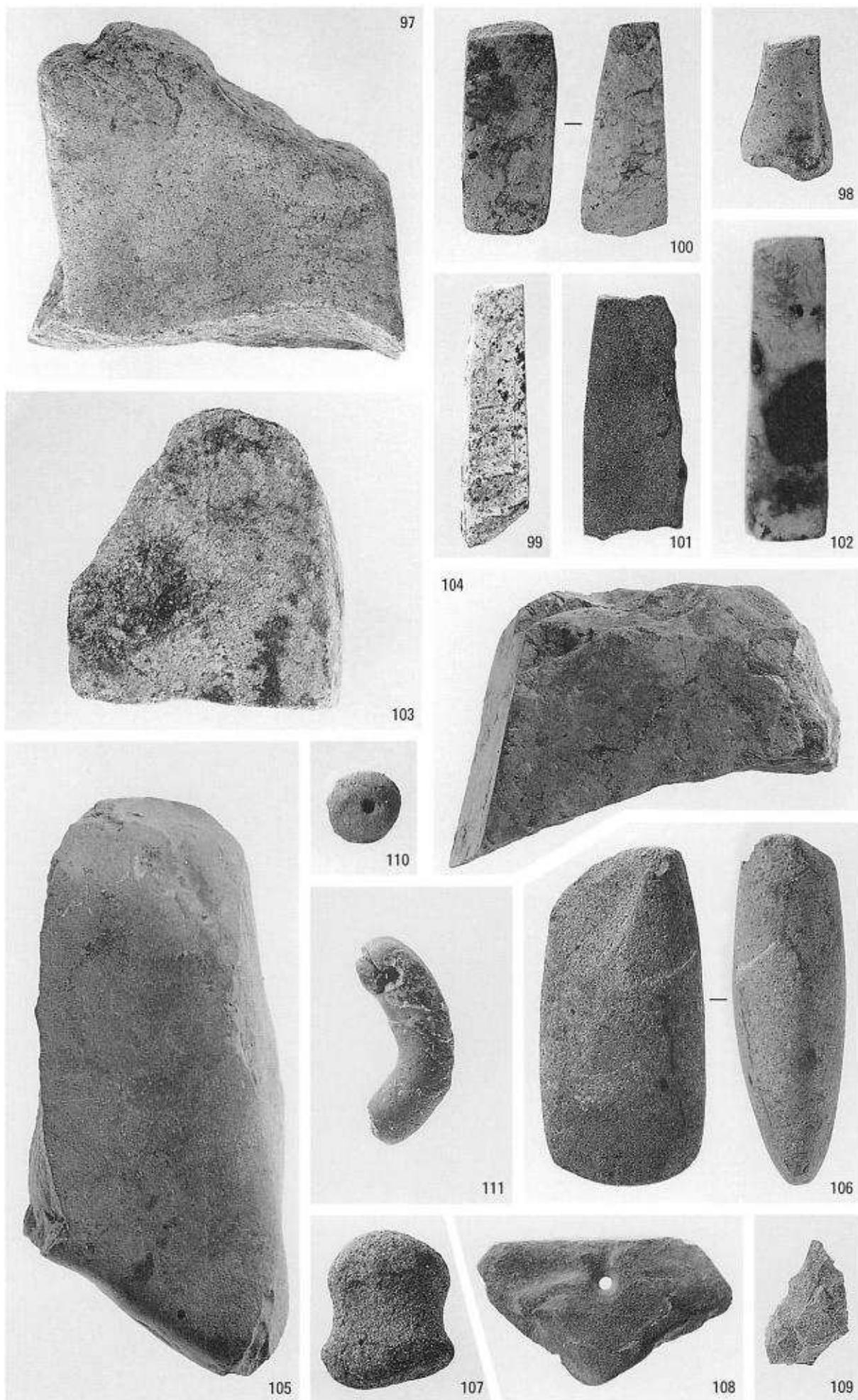
SK25, SX1・2, SD1, P1・2出土土器



SK 26, 調査区内出土土器



調査区内出土土器



S B 1, S D 1, 調査区内出土石器, 土製品

報告書抄録

ふりがな	ちかもりいせき
書名	近森遺跡
副書名	県営経営体育成基盤整備事業西伊尾地区に係る発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第25集
編著者名	山田繁樹
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036 広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL 082-295-5751
発行年月日	西暦2008年3月7日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯 ° ′ ″	東經 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ちかもりいせき 近森遺跡	ひろしまけんせらぐんせらちょう 広島県世羅郡世羅町 いおあさちかもり 伊尾字近森935、936	34462	34461-284	34度 37分 9秒	133度 5分 57秒	20051024 ～ 20051226	970	県営経営 体育成基 盤整備事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
近森遺跡	集落	弥生時代中期～ 古墳時代初頭	竪穴住居跡 土坑	弥生土器・土師器			山陰型瓶形土器	

要約	近森遺跡は、三川ダム堰堤の北西方向にあり、北側に芦田川の両岸に広がる水田や集落地が見渡せる低丘陵上の先端部付近に立地している。主に竪穴住居跡5軒、土坑26基、柱穴多数、溝2条を確認した。竪穴住居跡はSB1・2が径約9.5mの規模で重複し、それぞれ数回拡張している。更に下層からSB3・4を確認した。SB1からは床面から山陰系瓶形土器が2個体分出土している。土器以外に、土製勾玉・砥石、土製紡錘車がある。同一場所に建て替えを行い、住居跡も大規模であることから集落の中心的な建物であった可能性が高い。SB5は壁と床の一部のみで水田の造成時に削平されている。土坑は形状が方形のものが大部分を占め、約半数から土器が廃棄された状態で出土している。これらの住居跡と土坑は一部で重複関係がみられるが、古墳時代初頭を中心とした時期と思われる。唯一、中世の時期であるSK26は土師質土器皿を5枚置き、更に土鍋をうつ伏せに被せた状態で確認し、性格としては祭祀的な要素が強いと思われる。
	近森遺跡は弥生時代終末～古墳時代初頭の遺構を中心とした集落で、同時期の集落跡である龍王山2号遺跡とは芦田川を挟んで対峙する位置にある。近森遺跡と龍王山2号遺跡は芦田川を望む小高い場所に営まれているという共通性があることから、このような立地条件の場所には同時期の集落が存在していた可能性は高い。

出土した土器は山陰型瓶形土器などの山陰系土器が出土しており、この地域が古墳時代初頭頃に山陰地方の強い影響を受けていたと考えられる。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書25集

近森遺跡

県営経営体育城基盤整備事業西伊尾地区に係る発掘調査報告書

発行日 平成20（2008）年3月7日

編集 財団法人 広島県教育事業団事務局

埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区鏡音新町四丁目8番49号

TEL (082)295-5751 FAX (082)291-3951

発行 財団法人 広島県教育事業団

〒730-0011 広島市中区基町4番1号

TEL (082)228-8451 FAX (082)228-8441

印刷所 鯉城印刷株式会社